

第 69 代横綱白鵬関研究

篠塚 徹、大道雅之、岡崎正昭
近藤真宣、土門裕之、西口茂樹

拓殖大学北海道短期大学
拓 殖 大 学

「第69代横綱白鵬関研究」目次

第1章 序論

第1節 はじめに	1
第2節 目的	1

第2章 本論(状況編)

第1節 食生活の状況

1 モンゴルの食生活	3
(1) モンゴル帝国と食生活	4
(2) 食生活の変化	5
(3) 2000年前後のモンゴルの食生活	6
(4) 現在の食生活	6
2 白鵬が来日するまでの食生活	7
(1) 市乳	10
(2) 乳脂肪食品	11
(3) 発酵乳食品	11
(4) 民族の健康飲料アイラグ(馬乳酒)	13
3 入門後の食生活	13

第2節 教育の状況

1 モンゴルの教育

(1) 国家の歴史的変遷	15
(2) モンゴルの学校教育制度と教育環境	17
(3) モンゴルの家庭教育	19
(4) 都市と地方の格差	21

2 実地調査の方法と内容

(1) 調査方法	22
(2) ヒヤリング(国内)	22
(3) ヒヤリング(ウランバートル)	23

3 教育環境と教育の実際(ヒヤリング調査の結果から)

(1) 幼少期のダヴァジャルガル	23
(2) 両親の教育観と家庭の教育環境	24
(3) 兄弟の教育状況	25
(4) 少年時代(ウランバートルでの学校教育)	25
(5) 父親の親族と毎夏過ごしたゲル生活で受けた家庭教育	26

第3節 日本語から見る白鵬関の強さ

1 白鵬と日本語	27
2 モンゴル語と日本語	28
(1) 形態的類型論から見た共通性	29
(2) 統語的類型論から見た共通性	29

(3) 音声・音韻	30
3 相撲社会という言語習得環境	32
4 白鵬の日本語習得方法	35
第4節 身体状況	
1 大相撲力士の体力と精神力	
(1) 大相撲力士の体力の概要	37
(2) 大相撲力士の精神力の概要	38
2 研究方法	
(1) 大相撲力士の体力の概要	39
(2) 心理面における研究方法	40
第3章 本論(考察編)	
第1節 食生活をめぐる考察	
1 モンゴルの食が胎児や乳幼児の身体づくりに与える影響	42
2 草原での生活体験が身体づくりに与える影響	43
3 乳製品摂取が身体づくりに与える影響	
(1) タラグ(ヨーグルト)の効用	43
(2) 微量成分の効用	44
(3) アイラグの効用	45
4 入門後の食生活が体づくりに与えた影響	45
第2節 教育をめぐる考察	
1 仮説	47
2 ヒヤリング調査の分析と考察	
(1) 学校教育が本人に与えた影響(恩師・友人の記憶から)	48
(2) 両親および兄弟から受けた影響	49
3 学校教育とモンゴルでの環境が人格形成に与えた影響	
(1) 変革期にあった学校教育	50
(2) 友人たちとの関係(バスケットボール仲間、近隣の幼馴染)	51
第3節 白鵬の日本語	
1 話者の性格印象を形作るパラ言語情報	52
2 白鵬の発話の特徴	53
(1) 発話速度	54
(2) 声の高さ(ピッチ)	56
(3) ピッチ変動	56
(4) 白鵬の音声的特性と性格印象	57
3 白鵬の日本語と情報収集力	58
第4節 身体状況と心理状況をめぐる考察	
1 白鵬の体力の評価	
(1) 先行研究における大相撲力士の体力の評価	60

(2) 白鵬と他の横綱との形態的特徴の比較からの考察	62
2 白鵬の心理面の評価－白鵬の心理的特徴および他の相撲選手との比較と考察－	63
第4章 考察から引き出した白鵬関の強さ(結論)	
第1節 食生活をもたらした強さ	
1 モンゴル時代の食環境から	65
2 入門後の食環境から	66
第2節 教育環境をもたらした人格形成に関する考察結果	
1 モンゴル時代の教育環境から(両親及び家族による家庭教育から受けた影響)	67
2 来日後の自己学習環境から	
(1) 発達最近接領域論による考察	68
(2) 多重知能の理論による考察	69
(3) 広い人間関係の中で培われた自己薫陶	70
3 総論	71
第3節 白鵬の日本語に見る「強さ」	72
第4節 体力と心理面のまとめ	
1 白鵬の体力についてのまとめ	72
2 白鵬の心理面におけるまとめ	73
第5節 総合力の発現(仮説の実証)	
1 天分を引き出す自己努力	74
2 心技体の充実	76
(補論)本研究が繋ぐ学校法人拓殖大学人づくりへの影響	78
第1節 設置校の人づくりに関わる教育方針	78
1 学校法人拓殖大学の掲げる大方針	78
2 拓大の教育方針	78
3 北短の教育方針	78
4 一高の教育方針	79
第2節 海外に開かれた大相撲	79
第3節 白鵬の幼少時代から成人するまで	
1 幼少時代から中学時代まで－白鵬のモンゴル時代	79
2 高校生に当たる時期の白鵬－2000年10月から2003年9月まで	80
3 大学生に当たる時期の白鵬－2003年10月から2007年9月まで	82
第4節 白鵬の22歳に至るまでの成育状況から学ぶ学校法人拓殖大学の人づくり	83
第5節 白鵬と学校法人拓殖大学	85
(参考文献)	91
研究チーム構成員略歴	95

「第 69 代横綱白鵬関研究」

第 1 章 序論

第 1 節 はじめに

2012 年 10 月にモンゴル原産シーベリーの栽培を契機に第 69 代横綱白鵬翔関と拓殖大学北海道短期大学(以下「北短」という)との交流が芽生え、同時期に白鵬関が北短を訪問した際、白鵬関は北短女子バスケットボール部の名誉監督にも就任した。また、白鵬関は 2013 年 6 月に拓殖大学を訪問し客員教授に就任したが、そのときの記者会見において拓殖大学(以下「拓大」という)が北短と共同で「第 69 代横綱白鵬関研究」を行うことを承諾した。

白鵬関は北短とのご縁が出来るまでに「平成の大横綱」にふさわしい数々の大記録を打ち立て、その後も相撲史の記録を塗り替える実績を積み重ねている。また、北短の体育館において白鵬関が女子バスケットボール部の学生たちと練習やミニゲームなどに興じている姿が 4 回(2012 年 10 月、2013 年 6 月、同年 10 月、2014 年 10 月)テレビやネット映像で全国に流れたが、鮮やかにボールを操る身体能力が世人を驚かせている。モンゴルの中学時代にバスケットボールに打ち込んでいたとはいえ、相撲以外のスポーツで見せる白鵬関の運動能力に彼の運動面における潜在性を窺わせている。

上述のように学校法人拓殖大学が白鵬関と濃い関係を結ぶようになって、本学は白鵬関の強さの秘密を学術研究の面から総合的に分析し研究の実を挙げたいと考えるようになり、白鵬関にこの考えを説明して了解を得た。

本研究は拓大と北短との合同研究であり、研究チームの構成員は次の通りである。篠塚徹(北短学長、チーム長)、土門裕之(北短副学長、保育学科教授)、大道雅之(北短、農学ビジネス学科教授)、岡崎正昭(北短、農学ビジネス学科教授)、近藤真宣(拓大、国際学部教授)、西口茂樹(拓大、国際学部教授)

第 2 節 目的

第 69 代横綱白鵬関の強さの秘密を、多角的かつ総合的に研究する。これまでの白鵬関をめぐる報道や分析は、同人の生い立ちからモンゴルにおける少年時代の模様、家族関係の紹介、来日時のエピソード、入門してからの努力等について、かなり詳しく描いているが、その多くが土俵上で強さを発揮するまでの足跡を辿っており、それ以上の深さには限界がある¹⁾。本研究は縦糸で繋がる足跡を横糸で繋ぎ合わせて、白鵬関を多角的に分析し、それらから出てくる総合力が土俵上の強さとなって現れているのではないかという仮説のも

とで進めていく。

白鵬関と接した拓大と北短の関係者が考察した同人の印象を、本研究のスタート時点(2013年6月)で述べると、次の通りである。

一般人と接するときの白鵬関は、驕り高ぶりを一切見せず、謙虚で礼儀正しい。日頃厳しい勝負の世界で生きているとは思えないほど、穏やかで高潔円満な人柄に見える。

白鵬関と話をしていると相撲界の分野だけでなく、自然界や社会現象にも話が及び、書物をはじめ日頃多様なソースから知識を得てそれらを自分なりに咀嚼していることがわかる。優れた知性を感じさせるのである。

白鵬関との会食を通じて考察した結果、同人が栄養のバランスを心がけていることが分かるが、量的にはやや多めの程度で一般人とそれほど変わらない。部屋ではちゃんこ料理を食しているのであろうが、量より質を重視したある種の豊かな食生活を実践していると思われる。

白鵬関は、パソコンやスマートホンを楽々と使いこなす。周囲の人に聞くと、同人は習ったことをすぐ身につけてしまう。高い学習能力を培う教育環境にあったのであろうか。

白鵬関は、格調の高い日本語を話す。モンゴル出身の力士をはじめ外国人力士はおしなべて日本語が上手だが、白鵬関の日本語は正確で、敬語もきちんと使いこなしている。話す言葉だけでなく、漢字を積極的に覚えようとしてある程度読解力も有していると思われる。来日時にはまったく日本語を知らなかった同人が短期間で日本語をマスターできたほど、高い言語能力を有している。

白鵬関は、来日時には一般人と比べても身長・体重ともに目立たなかったという²⁾。その同人がどうして今日の堂々たる体躯(193cm、155kg)にまで成長したのか。入門してから激しい稽古を通じて成長していったのであろうが、最近は休場もせずに土俵上で圧倒的な強さをみせている。実績が強靱な肉体を裏づけている。

以上の白鵬関に関する考察をもとに、研究チームの研究者は次に述べるようなそれぞれの専門分野から白鵬関の研究を行う。

食育面からの研究：大道雅之教授並びに岡崎正昭教授が担当している。視点は、幼少時代からどのような食生活を送ってきたのか。その後食生活がどのように変化し、今日に至っているのか。食生活の変化が肉体的、精神的にどのような影響を与えているか、である。

教育面からの研究：土門裕之教授が担当している。視点は、どのような教育環境のもとで成長したのか。教育面から知性や感性がどのように育まれてきたのか、である。

語学面からの研究：近藤真宣教授が担当している。視点は、来日時にはまったく日本語を理解していなかった少年が、どのように日本語を習得していったのか。正確で格調のある日本語をどのようにして身につけていったのか、である。

体育面からの研究：西口茂樹教授が担当している。視点は、白鵬の肉体が他力士と比べてどのような違いがあるのか。勝負に臨むときの心理状態や精神状態がどのように勝敗に影響しているか、である。なお、西口教授の担当分野に関しては、佐藤伸一郎拓殖大学商学部非常勤講師並びに舩田守拓殖大学体育振興課長が共同研究者として協力している。

専門分野からの研究は以上の通りであるが、本来人間ひとりの能力や行動は、精神や肉体が有機的に連携して発揮されるものであろう。白鵬関の高潔円満な人柄も、同人の精神や肉体が有機的に反応して形成されていると言える。そのため、各研究者は常に連絡を取りながら検討を重ね³⁾、有機性に満ちた高質の総合研究の実を挙げることにした。

さらに、本研究はその成果を拓大及び北短が目指す人材育成の在り様に繋げていく。具体的には、本研究が学校法人拓殖大学を引き続きアジアに強い国際社会になくなくてはならない存在にするための人材の育成に資することを目標としている。

なお、第2章本論以下の各章においては、「白鵬関」という敬称を伴った呼称を略して単に「白鵬」と記述するとともに、現役もしくは現役当時の力士名に対しても敬称を略する。

注記

- 1) 2010年11月28日放送の『NHKスペシャル』「横綱白鵬～“最強”への挑戦～」は、白鵬関の身体能力や心理状況に焦点を当てて深く分析している。内藤堅示『白鵬のメンタル』講談社、2013年は、題名通り白鵬関のメンタル面を詳細に分析している。
- 2) 熊ヶ谷誠志(現宮城野親方)『白鵬「山」を越える男』主婦と生活社、2010年によると「来日直後のダヴァ少年(白鵬)は175cm、62kg」(5頁)であった。
- 3) 全体会議(2013年9月、2014年9月)、日本におけるインタビュー(2013年12月、2014年12月)、及びモンゴルにおけるインタビュー(2014年3月)の際には研究者全員が揃い、進捗状況の確認や執筆内容に関する意見交換等を行った。この他、個々の研究者同士による検討やEメールを利用した意見交換等は随時行っている。

第2章 本論(状況編)

第1節 食生活の状況

1 モンゴルの食生活

モンゴルの食生活の基本は、「赤い食べ物」と「白い食べ物」を中心とした質素なものである。「赤い食べ物」は主に肉類を指し、「白い食べ物」は乳製品を指している。草原の国モンゴルの食がどのように形作られてきたのであろうか。それは、和食が日

本の豊かな四季や冷帯から温帯に細長く分布する国土とそれを取り巻く豊かな海の幸から長い時間をかけて民族食として完成してきたように、モンゴル国の自然環境と風土によって形作られてきたのは間違いないであろう。モンゴル国の歴史と自然環境からモンゴルの食生活について辿ってみた。

(1) モンゴル帝国と食生活

現在のモンゴル国はおよそ北緯 45～50 度の中緯度地帯の間にあり、北海道よりもやや北に位置し、海から遠く離れ、標高 1,000m の高原地帯から 4,000m 級の山脈があり平均標高は約 1,500m である。緯度と経度から見ても寒冷で乾燥した地帯で、気候は大陸性気候に属している。気温は年間を通じて寒暖の差が大きく、年間降雨量は平均約 200mm であるが、ゴビ沙漠のような砂漠地帯は 50mm 以下である。このように寒冷と乾燥を特徴としたモンゴル高原は、一般に厳しい自然環境にあるといえる。

モンゴルというとすぐに思い浮かぶのは「チンギス・ハーン」(1162～1227 年)である。チンギス・ハーンはモンゴル国を統一し、中国北部からカスピ海・黒海にまたがるモンゴル帝国を築き、元の時代へと繋がっていく。どうしてチンギス・ハーンはこの広大な地域を自己の手に治めたのか。それは、モンゴルの騎馬軍団であるといえる。モンゴル高原での生活は、遊牧生活が主である。寒冷と乾燥が厳しいモンゴルでも夏(7月、8月)の時期には雨が降り、その雨によって草原が作られる。この草原を巧みに利用してきたのが、家畜とともに移動する放牧であり、移動には「ゲル」が利用され、家族とともに移動した。遊牧民は家族、部族をひとまとまりとする組織を築き上げてきた。国としての遊牧民の社会組織の統治は平時はその家族、部族を中心とする組織であるが、一旦、軍事力が必要となると軍事組織となった。機動性に富む馬は軍事力として最強であった。モンゴル帝国の基礎は、遊牧とゲルの移動性、そして家畜からの恵みを享受する食にあったといえる。

家族を養っていたのは家畜である。モンゴル遊牧民は「モンゴル 5 畜」と呼ばれる羊・山羊・牛・馬・駱駝を混合して飼っている。このように世界の遊牧地域の畜種が全てそろっていることがモンゴル遊牧民の大きな特色である¹⁾といえる。家畜にはそれぞれ優れた点が有り、馬は機動性に富み、雌馬は出産後に乳を出し、馬乳酒の原料となる。羊は乳とともにその毛はフェルトになる。牛や駱駝も移動のための荷車を引き、その乳を利用した。

遊牧民の食事は、その遊牧生活を大きく反映している。遊牧民の季節移動は四季に応じて行われている²⁾。これはモンゴルの自然環境に順応した方法といえる。春は、家畜の出

産期で、人々は家畜の世話が生活の中心で、夏になると乳が多く出る時期となり搾乳に多くの時間を割く。加工された乳製品は長期の保存も可能となる。各種の乳製品は夏を中心にした時期に食べる事ができた「白い食べ物」である。日中の気温が0℃以下になる初冬に冬期間に必要な食料の確保のため家畜をまとめて屠殺し、越冬食料を準備した。冬は専ら肉「赤い食べ物」を食べる。この季節的なパターンは13世紀の旅行記(南宋の彭大雅の「黒韃事略」)に記されていることから、遊牧民の食文化は13世紀には形作られていたと考える。また、家畜による移動性と家畜の恵みがモンゴル帝国の基礎となったといえる。

(2) 食生活の変化

モンゴル帝国以降のモンゴルの食生活は、近隣国との交易や、他民族との間の混血、紛争、国の興亡など様々な変化とともに、近隣諸国の文化を取り入れるなどして変遷してきたが、大きな変化は20世紀に入ってからだといえる。1921年にロシア革命(1917年)の影響を受けた知識人が結成したモンゴル人民党は、チベット仏教の活仏(ジェプツンダンパ・フトクト)を元首とする君主制人民政府を樹立し、1918年のソビエト社会主義共和国連邦(ソ連)の成立に次いで、世界で2番目の社会主義国として、1924年、モンゴル人民共和国が誕生した。農業生産拡大を目指し、1922年から国营農地の建設をはじめ1959年までに旧来の耕地を踏襲した社会主義的集団化農場(国营農場)が完成した。次に、農業開発(第1次アタル1959~1965年、第2次アタル1976~1988年、'アタル'とはモンゴル語で開墾を意味する)が始まった。ソ連から大量の農業機械類が導入され、1965年には約47万haが開墾された。近代的な農業の導入は、新しい生活様式の導入でもあった。国营農場の建設における大きな問題点はモンゴル人労働力の確保であったが、徐々に農牧業部門に人々が集まり、定住地が生まれ、国营農場は文化の一大中心地となり、学校、幼稚園、病院、文化会館といった施設が建設された。さらに、ソ連からジャガイモが大量に輸入され、食生活の中に取り入れられるようになっていった。その後都市が出現し、食料需要を急速に増加させ、工業都市も建設されたため1976年には都市の人口が地方の人口を上回るようになった。新たな次の未開墾地開拓運動が開始されたが、モンゴルにおける農耕の発展の可能性は限られていた。

その次ぎに訪れたのは社会主義国からの転換である。1991年に民営化の法律が決議され、国营農場や牧畜協同組合など国营企業は直ちに民営化され、1992年モンゴル国新憲法施行で土地の私有化、1994年に土地法が制定された。その結果として、民主化以前に53

を上回った国営農場は解体や再生の過程にあるものがほとんどであり、1989年の収穫面積は70万haであったが、2007年の作付面積は20万haに縮小している³⁾。民主化後の20年間で耕地は荒廃し、耕作放棄地が増加していった。

民主化前の社会主義時代と民主化後の食生活については劇的に変わったといえる。例えば、民主化前の野菜は、ジャガイモ、ニンジン、タマネギ、マンジン(カブ)等しか入手できなかったというが、現在の首都ウランバートルでは各種野菜や果物もあり、世界中の食材を入手できる状況にある。民主化以降の20年間における首都での食は大きく変化してきたといえる。

(3) 2000年前後のモンゴルの食生活

表1 調査世帯の夫の喫食内容

	1997年7月	2002年8月
朝食	乳茶2杯、馬乳酒300ml エーズキー入りウルム70g	乳茶3杯、アロール60g ウルム60g、羊肉炒飯150g
途中	乳茶5杯、羊肉内臓300g、馬乳酒2,000ml	乳茶7杯、アロール80g、砂糖20g、市販パン50g
夕食	乳茶3杯、羊肉ボーズ15個、タルバカン肉80g	乳茶2杯、羊肉うどん700g、アロール10g
朝食	乳茶2杯、ハイルマック*40g、ウルム50g	乳茶2杯、羊肉うどん120g
途中	乳茶4杯、揚げドーナツ240g、馬乳酒1,500ml	乳茶4杯、粥500g、ウルム50g
夕食	乳茶3杯、羊肉ボーズ12個	乳茶3杯、焼きうどん500g
朝食	乳茶2杯、ハイルマック50g、ウルム30g、揚げドーナツ40g、羊肉ボーズ8個、馬乳酒300ml	乳茶4杯、アロール30g ウルム60g、羊肉炒飯150g
途中	乳茶4杯、アロール20g 馬乳酒2,700ml	乳茶7杯、アロール**100g ウルム50g、市販パン50g
夕食	乳茶2杯、羊肉うどん600g	乳茶3杯、羊肉うどん700g 茹羊肉50g、アロール**10g

* 小麦粉とウルムをルー状に練ったもの、** 親戚からもらった 石井智美「家畜に依存するモンゴル遊牧民の食事の雪害による変化」『日本栄養・食糧学会誌』第57巻第4号(2004年)より引用

2000年、2001年に起きたゾド(雪害)では、モンゴル国内の家畜のうち約30%が凍死したといわれている。このゾドの前後でモンゴル国の遊牧民の食生活も大きく変化した。石井智美らの報告⁴⁾によると、調査遊牧民家庭の夫の総エネルギー摂取量に対する小麦粉料理からのエネルギー摂取量がゾド以前は22%であったものがゾド後は47%まで増えている。また、馬乳酒の摂取量も大きく減少していたことがわかる。

表2 調査世帯の夫のエネルギー摂取量

	1997年6、7月	2002年8月
平均エネルギー摂取量(kcal)	2191±589	2108±618
小麦由来のエネルギー比率(%)	22	47

石井智美「家畜に依存するモンゴル遊牧民の食事の雪害による変化」『日本栄養・食糧学会誌』第57巻、第4号(2004年)より引用

(4) 現在の食生活

モンゴル国の基本的な料理はいうまでもなく「赤い食べ物」と「白い食べ物」である。

この基本的な料理は「5畜」の獲得と遊牧生活によって作り上げられ、13世紀には完成したと考えられる。しかし、遊牧民は草原での遊牧を繰り返しながら他民族の料理も取り入れてきた。大きな変革はモンゴル人民共和国の誕生により、旧ソ連から機械化や国営農場の建設と併せて、定住化とジャガイモが入ってきたことである。また、その後のポスト社会主義時代には耕地は荒廃し農業生産も減少する中、近隣国からの農産物の輸入が増大し、今まで食卓に上っていなかった野菜や果物も食卓に上るようになった。しかし、一般には現在でも家庭や食堂で、モンゴル人は普段はモンゴル料理しか食べないといわれている。首都ウランバートルでは1990年代以降、都市化と外国製品の流入によって、伝統的な食事が徐々に薄れつつある。実際に2014年にモンゴル国を訪問した筆者らは、日本食レストランをはじめイタリア料理店や中華料理店はいうまでもなく世界中の料理店が軒を並べ、スーパーマーケットには多くの輸入農産物、加工品が並んでいるのを目の当たりにしている。食生活の欧米化が首都では進んでいることに目を見張ったのは事実である。

2 白鵬が来日するまでの食生活

モンゴル料理の特徴を端的に表すならば、肉や乳を多用することによって、脂肪分が多く、酸味を呈することが挙げられる。また、主食として小麦や米が食べられているが、量的には肉や乳製品が主食並みの量を占める。農村部を中心に伝統的な遊牧民の食文化を伝えているのがモンゴル料理である。栄養の50%以上を家畜から摂取することから、料理は家畜のライフサイクルに応じ季節性がある。モンゴルでは一般に、乳製品を「白い食べ物」、肉料理を「赤い食べ物」と名付けている。「白い食べ物」は、春から夏にかけての家畜の生産・育成期の搾乳シーズンに応じて製造される。また、「赤い食べ物」は、初冬、日中の外気温が0℃以下になると家畜を屠殺することによって得られる肉を主材料とする食べ物である。草原が降雪によって飼料が欠乏する冬を前に衰弱した家畜をまとめて屠殺し、冬期間の食料を確保することができる。

白鵬は、1985年3月11日にモンゴル国ウランバートル市に生まれ、来日したのは2000年10月25日である。来日までの約15年間の食生活の中で、モンゴル特有の特徴的な食べ物である「白い食べ物」に着目し、その特性を追求するとともに、「白い食べ物」の摂取が彼の身体能力の源泉になっているとの仮説に基づいて論じることとした。なお、本節においては「白い食べ物」の状況を述べるにとどめ、仮説の検証は考察編及び結論の章において行うこととする。

モンゴルにおいては、牛だけではなく、羊、山羊、馬、駱駝の生乳を加工した多種類の

伝統的な乳製品が造られてきた。伝統的にモンゴルの人々が消費してきた食品には、乳脂肪製品や羊肉脂肪があった。そのため都市住民と遊牧民では、乳製品の消費が生活形態の違いにより大きく異なる。乳製品の加工や供給形態においても地方と都市では大きく異なり、地方では自家消費を前提とした自家生産であるのに対し、都市部の消費者は乳製品の供給を各都市に所在する牛乳を主原料とした乳製品加工メーカーに依存し、各加工メーカーの集乳量や稼働状態によって供給量が左右されてきた。都市では伝統的な乳製品よりも牛の生乳から加工された加工乳、ロングライフ乳、多種類の加工ヨーグルト、アイスクリームなど生乳による製品類が消費される。一方、地方では、牛も含め在来家畜の液状乳、発酵乳、チーズ、クリーム、バター、ケフィール、ミルクフード、乳飲料といった多種類の手作り乳製品が日常的に食料として消費される。牛乳以外の乳製品は、遊牧民により生産・加工され、少量分が都市住民向けに市場で販売されるが、都市では牛乳以外の乳製品に対する需要は馬乳酒以外ほとんどない状況にある⁵⁾。

モンゴルの「白い食べ物」である乳製品の呼称については諸説あるが、本報告では 2001 年⁶⁾及び 2006 年⁷⁾の石井の報告に基づいて表記し、製造法についても引用した。遊牧民にとって財産である家畜を失わず、子畜の成長を妨げない範囲で乳を継続的に獲得する搾乳は、家畜における去勢とともに遊牧生活に不可欠な技術である。また、夏季の遊牧民の食においては「白い食べ物」がエネルギー摂取源の 70%をも占めている。こうした乳加工を行うことは、伝統的に乳糖不耐症であるモンゴル遊牧民にとって乳を飲むよりも栄養摂取、食料保存の面で好都合であったと考える。モンゴル遊牧民は乳糖不耐症であることから、乳を飲まずに加工してきたと考える。そうした中で、チーズなどの製造に適さない馬乳を発酵させた民族飲料「馬乳酒」(アイラグ)は、遊牧民にとって夏の重要な健康飲料であり、機能性食品となっている。

白鵬がモンゴルで暮らしていた時代(1985 年～2000 年)、家族はモンゴル、ウランバートル市の中心街の 3 階建てのマンション(2LDK)に住んでいた。このマンション 1 階のテナントには、食料品や高級品の販売店が、隣にはモンゴル最大の百貨店ノミンデパートがあり、また、近くには食料市場(ハザ)があるなど、食料確保には事欠かない住環境・経済環境にあった⁸⁾。

白鵬が摂取していた「白い食べ物」について、母親、姉からの聞き取り調査は 2014 年 3 月 4 日に、夏季間滞在した草原の暮らしに関する聞き取り調査は白鵬の父親の次兄の孫から同年 3 月 6 日にいずれもウランバートル市内で実施した。この聞き取り調査(表 3)に

表3 モンゴル時代の白鵬及び親族・友人の食事調査

調査内容	白鵬との関係	年代	主な居住地	朝食	昼食	夕食	白い食べ物の摂取状況	備考	
白鵬モンゴル時代の食事	母親、次師、三師から聴取した事項のまとめ	3~5才	ウラン	乳茶、クロテツドクリーム、パン、バター、卵焼き	乳茶、牛乳粥、肉焼き飯	肉うどん、牛乳粥	白い食べ物の摂取状況は、田舎で過ごした時は、毎日ではないが馬乳酒を飲んでた。		
		6才~15才	ハートル	揚げ菓子、牛乳粥	肉うどん、肉シチュー	肉焼き飯			
夏休みに草原で白鵬が共に生活した親戚のおお兄さん(1979年11月30日生)の食事	白鵬が毎年夏季(1988、1990~2000)に田舎で過ごした時、お世話になった親戚のお兄さん	3~5才	ドゥフ根	紅茶、クッキー	茹で肉、蒸し肉、丸焼き肉	肉まん、羊肉と野菜入り蒸し焼きうどん	紅茶は常に飲む	リス科のタル	
		6才~15才	エレデネ	お粥、サワークリーム	アルコール、馬乳酒、茹で肉	肉まん、肉うどん	夏季は牛乳、乾燥チーズ、チーズ、馬乳酒、ヨーグルト	ハガンの茹で肉や丸焼きをよく食べていた。(7~9月)	
		16才~25才	サント郡	クロテツドクリーム	ヨーグルト、乾燥チーズ	肉まん、肉うどん、肉シチュー	肉まん、蒸し肉		
		3~5才		卵、パン	揚げ菓子、茹で肉	肉うどん	肉うどん	夏に時々白い食べ物を食べていた。	
		6才~15才	ウラン	パン、バター	パン、バター	肉うどん、肉焼き飯	肉うどん、肉焼き飯		
		16才~25才	ハートル	卵、パン	肉うどん、肉シチュー	肉うどん	羊肉と野菜入り蒸し焼きうどん		
友人Aの食事(1983年2月19日生)		3~5才	ウラン	乳茶、揚げ菓子	乳茶、肉焼き飯	肉うどん、乳茶			
		6才~15才	ハートル	パン	羊肉と野菜入り蒸し焼きうどん	肉うどん、乳茶			
友人Bの食事(1982年8月4日生)		3~5才	ウラン	乳茶、揚げ菓子	乳茶	肉うどん、乳茶			
		6才~15才	ハートル	パン	羊肉と野菜入り蒸し焼きうどん	肉うどん、乳茶			
友人Cの食事(1983年生)	白鵬と同じアパートに住んでいた友人(男)	3~5才	ウラン	乳茶、肉うどん、肉シチュー	乳茶、クッキー	肉シチュー			
		6才~15才	ハートル	揚げ菓子、サワークリーム、パン	肉シチュー	モンゴルうどん			
友人Dの食事(1984年4月26日生)		6才~15才	ウラン	紅茶、パン、クッキー	肉シチュー	茹で肉、肉まん、揚げ餃子			
		16才~25才	ハートル	卵	モンゴルうどん	焼そば、肉まん、ミートパイ			
友人Eの食事(1985年11月2日生)		3~5才	ウラン	揚げ菓子、乳茶	パン、バター、肉シチュー	肉うどん、肉焼き飯			
		6才~15才	ハートル	揚げ菓子、乳茶	パン、バター、肉シチュー	肉うどん、肉焼き飯	乳茶より紅茶の方が多かった。	白鵬の従兄(白鵬の母親の妹の息子)	
友人Eの食事(1985年11月2日生)		6才~15才	ウラン	揚げ菓子	パン、バター	肉うどん			
		16才~25才	ハートル	乳茶、揚げ菓子	乳茶、パン、バター	肉シチュー	夏季にはサワークリームや乾燥チーズなどの乳製品を食べていた。(祖父母のゲルで)		

「赤い食べ物」	チャナサン・マフ(茹で肉)、ホルボグ(蒸し肉)、ポードグ(丸焼き肉)、シヨログ(串焼き肉)、ザガス(魚の燻製)、タルハカン(丸焼き)
「白い食べ物」	ワルム(クロテツドクリーム)、ズーヒー(サワークリーム)、ツオブ(乳脂蛋白残渣)、シヤル・トス(バターオイル)、ツツギー(サワークリーム)
「白い食べ物」茶他	タラグ(ヨーグルト)、エースキー(チーズ)、ビヤスラグ(チーズ)
穀物	高発酵乳
	スーテーツアイ(乳茶)、紅茶
野菜等購入品及び採取品	ポーズ(肉まん)、ホーショル(羊肉と野菜入り蒸し焼きうどん)、ゴリルタイ・シュル(肉うどん)、パンタン(肉シチュー)、ポーヴ(揚げ菓子)、ポダータイ・ホーラガ(肉焼き飯)、スーテイ・ポダー(牛乳粥)、ツォイワン(焼きうどん)、パンシ(水餃子)、お粥
	タマネギ、ニンジン、マジン、キュウリ、トマト、チャチャルガン(シーベリー)、ニンニク、キノコ、松の葉、ベリー類、パン、バター、クッキー、卵、茶、米

よると、白鵬が家庭で摂取していた「白い食べ物」はステーツアイ(乳茶)、ウルム(クロテッドクリーム)、アイラグ(馬乳酒)、アールツ(発酵乳を加熱して濃縮した凝乳)などが挙げられた。また、夏季に伯父や叔母の草原での生活では、スー(牛乳)、ズーヒー(サワークリーム)、タラグ(ヨーグルト)、ビヤスラグまたはエーズキー(チーズ)、アロール(乾燥チーズ)、アイラグ(馬乳酒)の摂取報告があった。そこで、白鵬が摂取していた「白い食べ物」についてまとめてみた。

(1) 市乳

表4 モンゴルにおける輸入牛乳・乳製品供給量 単位 t

製品名	1995年	2000年	輸 入 先
市 乳	27.9	362.1	ロシア、東欧、中国
ヨーグルト	0.8	117.7	オランダ、フィンランド
バ タ ー	452.0	55.0	ロシア、東欧、中国
チ ー ズ	40.8	11.3	ロシア、東欧、中国
粉 乳	318.2	345.6	ロシア、東欧、中国

(出所):World Bank, The Semi-intensive Dairy Sector in Mongolia(Case Study), 2003

ウランバートル市には社会主義時代にソ連の支援を受けて 1958 年設立された乳製品工場が1つだけあった。この工場は日産量 100t を製造できる機械設備を持っていたが、市場経済に入った 1990 年に半官半民となり、原料乳確保の困難と設備の老朽化によって 50t/日(冬は 5~10t)まで生産が減少した。その結果、乳・乳製品供給の季節的な変動を補うため、冬と春には乳製品の輸入が増加した⁹⁾。常温輸送できることから、輸入市乳の多くが 140~145℃で 3~5 秒間加熱滅菌されたロングライフ(LL)牛乳であった。モンゴルの牛乳の一般組成については 1976 年中江らの報告¹⁰⁾があるが、モンゴル在来種の乳汁成分は日本の市乳組成と比較して、全固形分が高く、灰分が倍以上高い。また、モンゴル産馬乳はモンゴル牛の乳汁と比較して、蛋白含量が低く、乳糖量が高い。

表5 モンゴルの牛乳及び馬乳の一般組成 単位%

項 目	水分	全固形分	蛋白質	脂質	乳糖	灰分
モンゴル牛の乳汁	87.36	12.62	3.27	3.85	4.59	0.80
日本の牛乳	87.4	12.4	3.3	3.8	4.8	0.39
馬	89.54	10.46	1.45	2.30	6.24	0.38

日本の牛乳:五訂日本食品標準成分表より

中江利孝ら「モンゴルの乳及び乳製品の科学的性状について」『岡山大農学報』Vor. 48(1976)より引用

市乳の利用では、まず、乳茶としての飲用があげられる。乳茶はステーツアイといい、煮出した茶汁に生乳や市乳を 2~5%程度を添加し、塩(主に岩塩)を加えた飲み物である。モンゴル人は1日当たり 2L 程度を飲用するという。白鵬及び家族が自宅で飲用していた乳茶には市販の牛乳を使っていたと考えられ、夏季の草原においては搾り立ての生乳を加

温して毎日乳茶として飲用していた。

(2) 乳脂肪食品

モンゴル遊牧民には多彩な乳脂肪製品の呼称が存在している。シャル・トス(バター)はその製造において脂肪球から水分を離す過程で、水分残量の差が生じやすい。日本の乳製品では、ズーヒー(サワークリーム)やチャガン・トス(発酵バター)に含まれるものが、モンゴルでは脂肪含量によって区分されている。ウランバートル市の食品市場(ハザ)やデパートには国産や輸入のバターが市販されていた。

ウルムは、乳を加熱し攪拌によって比重の軽い乳脂肪を上部に集めたものをいう。ウルムは保存後、加熱して各種乳製品がつくられる。このウルムというクロテッドクリーム様のバター風味の生クリームのような乳脂肪はパンなどに付けて利用するほか、モンゴル料理に欠かせない食材である。草原では、このウルムは搾乳した乳を鍋の中で静かに加熱しながら攪拌し、乳脂肪を上を集める。翌朝まで置くと乳脂肪が集積して膜を形成し、クリームの味がするウルムという乳製品ができ上がる。ウランバートル市内の食料市場(ハザ)やデパートにはウルムが販売されていた。

白鵬は家庭においては、ステイ・ボダー(牛乳粥)にウルムを添加するなどした離乳食やパンにバターやサワークリームを塗るなど乳脂肪を摂取していた。

(3) 発酵乳食品

低発酵及び高発酵を促すのにスターターが必要になるが、草原のゲルには専用の発酵容器を備えている。この発酵容器の中では、搾乳後の乳や乳加工の過程で出てくるホエーに複数種の乳酸菌や酵母等の微生物が作用し、乳酸をはじめ各種の有機酸を生成している。この発酵乳がスターターとして利用される。

モンゴルの乳製品はヨーロッパの多様なチーズと比較すると、熟成を必要としないことから、比較的短時間で製造されるという特徴を持っている。低発酵に要する時間は24時間未満、高発酵に要する時間は24時間以上である。

タラグ(ヨーグルト)は、脱脂乳にスターターを加え、37℃前後で12時間程度保温して、酸凝固させ、豆腐のように固まってカード(凝固分)が形成された低発酵乳製品である。

夏季に伯父と叔母の草原での生活で白鵬はチーズを摂取している。チーズは加工食品の中でも歴史的に最も古いものの一つである。紀元前6000年頃、西アジアで発祥したと考えられ、この乳利用の技術は3つの経路で世界に広がったといわれている。まず、1つ目は西アジアからインドに伝わったチーズで、加熱や酸によって凝固させるものと植物性の凝

乳酵素を用いて造るものがある。2 つ目は、西アジアからギリシャを経て欧州に伝わったチーズで、レンネットに代表される凝乳酵素を用いるところにある。3 つ目は西アジアから東北モンゴルに伝わったチーズであり、モンゴルにおけるチーズ造りの特徴は凝乳酵素を用いずに加熱や酸によって乳を凝固させることにある。砂漠や乾燥したステップ地帯での厳しい条件下で生活するモンゴル遊牧民族は乳への依存度が極めて高く、乳から多くの保存性の良好な乳製品を造り出している¹¹⁾。

モンゴルの人口の 80% を占めるハルハ族の伝統的なチーズにはビヤスラクとエーズキーがある。このチーズも低発酵乳製品である。

表 6 モンゴル産チーズの化学組成

単位: %

試料No.	酸度	水分	蛋白質	脂質	灰分
No.1	0.81	13.75	27.99	34.58	1.57
No.2	2.46	14.18	42.86	13.82	3.96
No.3	0.94	13.52	44.25	12.62	6.05
No.4	0.90	16.94	13.50	54.94	1.66
No.5	0.80	10.03	43.73	19.15	4.94
No.6	0.78	38.16	24.98	29.07	4.55
No.7	0.75	54.80	8.94	33.11	1.05

No.6:日本の市販ゴーダチーズ、No.7:日本の市販クリームチーズ

中江利孝ら「モンゴルの乳及び乳製品の科学的性状について」『岡山大農学報』Vor. 48(1976)より引用

ビヤスラクは再度加熱した脱脂乳にスターターを加え、弱火で加熱し、酸凝固により沈殿したカゼインからホエーを除去したカッテージチーズ様のチーズである。pH5.4~5.5 付近で製造したとき、チーズのカゼインが餅状に伸びたとの報告がある¹²⁾。エーズキーは、ビヤスラクと同様にスターターを加え、弱火で加熱し、ホエーを除去せずにそのままじっくりと弱火で煮詰めて製造する。乾燥後は薄茶色で堅く、ホエーを排除していないので乳糖含有量が多い。五色豆のようにばらばらした形状をしている。

モンゴル産チーズの一般組成では、モンゴル産の製品は水分含量が最高で 16.94%、最低で 10.03%と日本の市販品 (No.6 及び No.7) に比べ、水分含量はかなり低く、逆に蛋白質含量は一般に高い値を示している。ヨーロッパ型チーズは主としてホルスタイン乳を原料としたレンネット凝乳型チーズであるのに対し、モンゴル産チーズはモンゴル牛の乳汁を原料とし、加熱濃縮や酸凝固による加熱-酸凝乳チーズであり、製造後の乾燥保存期間が比較的長いことによるものと中江らは 1976 年報告している¹³⁾。

次に、高発酵乳加工は、発酵が進行した乳を加熱し、酸凝固する乳の化学的性質を利用した加工である。保存食としてアロール(乾燥チーズ)が最も多く製造されている。このアロールは高発酵乳を加熱して造られる真っ白な乾燥チーズである。まず、脱脂乳の高発酵

乳を加熱して蛋白質を凝固させ、ホエーを除去した後、圧力を加えて脱水させる。この製造方法はピヤスラグ(チーズ)とほぼ同じであるが、原料乳の発酵度が異なることから、全く異なった風味を呈する。脱水後は伸ばし餅状に成型し、天日で1日程度乾燥させる。酸味が強く、遊牧民の間で最も好まれてきた乾燥チーズである¹⁴⁾。

アールツは発酵乳を加熱して濃縮した生乾きチーズである。このアールツを湯煎し、小麦粉、砂糖、バターを加えてビタミン豊富な飲料となる。市販されているアールツ商品名ゾヴは飲みやすいように甘く味付けられている。

白鵬は、母親手作りのアールツの湯煎飲料を摂取し、好物のアロールを日常的に摂取していた。また、夏季の草原においては、手作りの各種チーズやタラグ(ヨーグルト)を摂取していた。

(4) 民族の健康飲料アイラグ(馬乳酒)

草原の遊牧民は動物性の乳を原料にして酒をつくってきた。世界の酒の中でも特異な酒である。乳糖を原料としてアルコール発酵させるには、乳糖発酵性酵母の働きが欠かせない。

アイラグは馬乳酒のモンゴル呼称で、馬の生乳を冷却後、専用の発酵容器に加え、連続的に発酵させてつくる。馬乳自体ビタミンCを含んでいるが、発酵に関与する乳酸菌によってさらにビタミンCが増加する。野菜や果物を摂らない遊牧民にとって、夏の貴重なビタミンC補給源となる。モンゴルでは「冬の間肉食中心の食事で疲れたお腹を白くする」、「肺結核にならない」、「高血圧にならない」といった医学的効用が伝承されている。モンゴル遊牧民の食事は1日2食である。夏季は陽が長く朝食から夕食までの時間は約15時間である。その間のアイラグの飲用量が1日の摂取エネルギーに反映される。1日に成人男子で3~10L飲んでいる。3Lの飲用で1,200kcalと基礎代謝に近い熱量となる。アイラグは液体ながら食べ物扱いされている所以である。

アイラグは、酸度1.0~1.5%、アルコール度1.0~2.5%、中に炭酸ガスが溶解発泡性を有する飲料・食料である。酒というよりも「身体に良い飲料」として認識されており、専用の発酵容器の中で連続的に発酵させてつくることから、アルコール発酵が進まない段階のアイラグは子供も飲むことができる。白鵬も草原の生活ではアイラグをよく飲んでいたのである¹⁵⁾。

3 入門後の食生活

白鵬が来日し、宮城野部屋に入門したのは2000年12月23日であった。入門当時の白鵬の体格(身長・体重)は175cm68kgであったことから、2001年3月場所の新弟子検査(2012

年3月場所までの新弟子基準は身長173cm以上、体重75kg以上に体重が7kg不足であった。熊ヶ谷親方(元幕内・竹葉山)は、次の4品の摂取を命じた。1つは、宮城野部屋名物のつみれ入りちゃんこ(残り汁を含む)、2つ目は井に山盛りのご飯を4杯、3つ目は牛乳1L、4つ目がバニラ味のプロテインであったと述懐¹⁶⁾している。

表7 白鵬が宮城野部屋入門後の食事内容(朝食は摂らない)

		昼食	夕食	身長cm	体重kg	備考
結婚前	入門～三段目	ちゃんこ鍋	豚肉料理等	175	68	ご飯、豚肉、乳製品を多く摂取
	幕下～十両	ちゃんこ鍋	カレーライス、中華が多い	187	101	納豆を多く摂取
	新入幕～結婚前	ちゃんこ鍋	焼肉等肉料理が多い	189	134	牛肉を多く摂取
結婚後	巡業及び自宅での食事	ちゃんこ鍋*	魚料理が多い	192	158	Mg、S、Zn等のミネラル不足を解消する食事内容に変更、鶏肉を増加させ、サプリメントも使用(トレーナーの指導により)

本調査は2013年12月24日宮城野部屋にて聴取

* ちゃんこ鍋の食材内容を肉・脂より穀物・豆類及び野菜中心の内容に変更

表8 宮城野部屋のちゃんこ鍋等のレシピ(各30人分)

鍋 材料	ちゃんこ鍋		豚肉の味噌 炊き	鶏肉の醤油 ソップ炊き
	味噌味	塩バター味		
豚肉	kg	Kg	2 Kg	kg
豚バラ肉	2 kg	Kg	Kg	kg
鶏肉	kg	Kg	Kg	2 kg
つみれ(魚肉)	kg	2 Kg	Kg	kg
豆腐	4 丁	4 丁	丁	丁
揚げ	3 枚	3 枚	5~7 枚	5~7 枚
蒟蒻(大)	2 丁	2 丁	2 丁	2 丁
白菜	2 玉	2 玉	玉	玉
キャベツ	個	個	2~3 個	2~3 個
ニラ	束	5 束	4 束	4 束
長ネギ	5 本	本	本	本
ジャガイモ	8 個	個	個	個
玉葱	8 個	個	5~7 個	5~7 個
大根	1 本	1 本	1 本	1 本
人参(大)	本	本	3 本	3 本
キクラゲ	g	100 G	G	G
シメジ	p/c	5 p/c	4 p/c	4 p/c
バター	G	200 G	G	G
ニンニク			生おろし少々	
だし汁	煮干し、昆布			
調味料	酒、みりん、塩、醤油、味噌、本だし、白だし			

本調査は2013年12月24日宮城野部屋にて聴取

2001年3月3日の新弟子検査では身長180cm、体重80kgに成長し、同年春(3月)場所において前相撲デビューを果たした。入門後、白鵬の宮城野部屋における食事内容及びちゃんこ鍋の食材についての聴取結果(2013年12月24日)は表7及び表8の通りである。また、ちゃんこ鍋の食材については、白鵬が結婚した2007年頃から、肉よりは穀類や野菜類を多く摂取する食事に変更している。

注記

- 1) 石井智美「モンゴル遊牧民の食生活と伝統的なたべもの」『砂漠研究』Vol.15、No.1(2005年)、1-7頁
- 2) 小長谷有紀『世界の食文化3モンゴル』農山漁村文化協会、2005年、69頁
- 3) 小長谷有紀『モンゴルにおける農業開発史』国立民族博物館研究報告、Vol.35、No.1(2010年)、60頁
- 4) 石井智美、鮫島邦彦「家畜に依存するモンゴル遊牧民の食事の雪害による変化」『日本栄養・食糧学会誌』第57巻、第4号(2004年)、173-178頁
- 5) トウシンバット ダワースレン・新沼勝利「市場経済移行に伴うモンゴル農業経営の変化 - 都市近郊における酪農経営を事例として」『農村研究』第106号(2008年3月)、99-100頁
- 6) 石井智美「モンゴル国の伝統的な発酵乳製品に関する微生物学的検討」『Milk Science』Vol.50、No.1(2001年)、25-30頁
- 7) 石井智美「モンゴル遊牧民の製造する乳製品の性質と呼称に関する研究～先行研究と比較して」『J. RakuNo. Gakuen Univ.』Vol.31、No.2(2006年)、197-213頁
- 8) 白鵬翔『相撲よ!』角川書店、2010年、25-30頁
- 9) トウシンバット ダワースレン・新沼勝利「市場経済移行に伴うモンゴル農業経営の変化 - 都市近郊における酪農経営を事例として -」『農村研究』第106号(2008年3月)、100-101頁
- 10) 中江利孝・片岡啓・宮本拓「モンゴルの乳及び乳製品の科学的性状について」『岡山大農学報』Vol.48(1976)、64-65頁
- 11) 大谷元「チーズの起源と歴史」『New food Industry』Vol.49、No.10(2007)、25-36頁
- 12) 石井智美「モンゴル国の伝統的な発酵乳製品に関する微生物学的検討」『Milk Science』Vol.50、No.1(2001年)、27頁
- 13) 中江利孝・片岡啓・宮本拓「モンゴルの乳及び乳製品の科学的性状について」『岡山大農学報』Vol.48(1976)、64-65頁
- 14) 小長谷有紀『世界の食文化3モンゴル』農山漁村文化協会、2005年、133-134頁
- 15) 白鵬翔『相撲よ!』角川書店、2010年、57頁
- 16) 上掲書、36頁

第2節 教育の状況

1 モンゴルの教育

(1) 国家の歴史的変遷

白鵬(モンゴル名、ムンフバト・ダヴァジャルガル)の幼少期、モンゴル国では社会主義国から資本主義国への転換という非常に大きな影響を与える現象があった。英雄チンギス・ハーンを尊敬する白鵬の考え方、そして歴史的変遷によって大きな変革期に生きた家族の考え方を知る上でも、モンゴル国の歴史を理解する必要がある。そこでモンゴル国の歴史を、大きく以下の6つに分類し、チンギス・ハーンに始まる800年余りの史実、変遷の概要をまとめた。

「モンゴル帝国期」1206年～1368年 チンギス・ハーンがモンゴル高原を統一し民族形成を開始してから元朝¹⁾が滅亡するまで

「モンゴル高原での独立時代」1368年～1636年 西のオイラトモンゴルと東モンゴルの対立期

「清朝の支配下時代」 1636年～1911年

「ボグドハーン制モンゴル時代」 1911年～1921年 モンゴル革命の混乱期

「社会主義時代」1921年～1991年

「資本主義時代」1991年～現在

1162年に生まれたチンギス・ハーンは1206年にモンゴル帝国を建国し、テムジンと名付けられた。1189年に諸部族統一を果たした彼のモンゴル帝国支配地域は、アジアからヨーロッパ(シナイ半島東部)に及ぶ広大な地域に及んでおり、言うまでもなくチンギス・ハーンが大モンゴル帝国の礎を築いたことになる。1220年にはハラホルムをモンゴル帝国の首都として定め、一世を風靡するが、その7年後である1227年秋、チンギス・ハーンは波乱と栄誉に満ちた生涯を閉じた。その後、モンゴル帝国は様々な対立に翻弄されながら分裂を始め、勢力の弱体化に伴い万里の長城より北方地域への撤退に至る。1368年の元王朝崩壊後、北元²⁾を建国するものの、領土は東モンゴルとオイラトモンゴルに分裂する。1500年前後、東モンゴルの支配者ダヤンハーンの軍はオイラトを撃退し、モンゴルは再統一を果たしたが、17世紀に入ると、満州族がモンゴル東部で勢力を拡大し、1636年、中国に清王朝を樹立した。その後、南モンゴルを支配し、約半世紀後には北部のハラハモンゴルを支配下に置いた。ところが、ラマ教に理解のあった清王朝のチベット・モンゴル仏教優遇政策の結果、モンゴルにおけるチベット仏教が勢力を伸ばしていく。1911年、清国で辛亥革命が勃発し満州帝国が崩壊すると、外モンゴルが独立を宣言し、チベット人であるジャイブツンダンバ・ホトクト第8世を皇帝としたボグドハーン政権が樹立されるが、長くは続かなかった。1912年、清国が倒れ、中華民国が成立し、1915年には中華民国・ロシア・モンゴルの3国によるキャフタ協定が締結されたことにより、モンゴルの独立は取り消されることになった。この協定は中華民国を盟主とする宗主権下で外ハラハモンゴルに限定した自治権を認めるもので、権益はロシアが握るというものであった。この協定の影響は大きかったが、独立したばかりのボグドハーン政権には2大国による干渉を拒絶する力は無かった。さらに、1917年のロシア革命に始まる3年間は激動の時代ともいえる苦難の始まりであった。1919年、ロシアの混乱に乗じて中華民国がダー・フレー(現在のウランバートル)に進軍し、ハラハモンゴルの自治権を撤廃。その後、ロシアでの内戦で敗れた白軍のウルゲン・シュテンベルグ男爵は、ボグドハーンを皇帝とする傀儡政権を樹立して恐怖政治を展開する。一方、スフバートル、ボドー、ダンザンらが率いるモンゴル人民党は、ボグドハーンの下承を得て、ソビエト赤軍と協力してウルゲン・シュテンベルグ軍を1921年に撃破し、ダー・フレーを解放した。ボグドハーンが1924年に死亡すると、政権は立憲君主国から人民共和制に移行し、「モンゴル人民共和国」となり、ソビエト連邦の指導によ

り世界で第2番目の社会主義国家として歩み始めることになった。その後、モンゴル人民共和国は半世紀を超えて国民に社会主義を浸透していく。それまでの立憲君主国家での生活から社会主義国家への急激な変化は僧侶や遊牧民を始め、文化・知識人等、理由は様々であるが多くの国民の反発を招く。そのため、ソ連は軍事・教育・文化等で顧問団を派遣して、モンゴル人民共和国は実質的に従属状態に置かれることになった。

厳しい社会統制が続く中、ますますモンゴルに社会主義が浸透しつつあったが、1986年に開放化政策「ペレストロイカ」が始まると、モンゴルでも1990年、80年にわたる近代史の中で初めて自由選挙が実施され、新たな時代の扉を開けることになる。しかし、実際の所、選挙法が制定され様々な政党が公認されて総選挙が行われるようになったのは、わずか四半世紀前のことである。修正憲法では、大統領制の他、思想・信教の自由などの基本的人権の保障条項が盛り込まれ、1991年、人民革命党は一党独裁を放棄して、複数政党による民主政治へと移行した。また、禁止されていたチンギス・ハーン崇拝や仏教への信仰も許され、経済面では市場経済が導入されて、資本主義である西側諸国との関係も強化されるようになった。1990年から1991年は、まさに1985年生まれである白鵬が小学校に入学する時期と重なり、学校教育現場でも社会主義から資本主義への移行に伴った教育観の転換による混乱があったと考えられる。

(2) モンゴルの学校教育制度と教育環境

日本の教育制度は義務教育が9年間、高等学校が3年間となっているが、これに相当する1990年当時のモンゴルの初等中等教育は10年制となっており、そのうち義務教育は8年間である。2008年度から2009年度にかけて6・3・3制に移行しているが、白鵬自身はその影響を受けていない。

経済体制が社会主義体制から市場経済体制に移行後、モンゴルの経済社会状況は急激な変化に対応しきれず、教育環境もその大きな影響を受けている。特に初等教育の就学率は非常に低く、「体制移行後10年を経過しても初等教育(幼児教育)の就学率は、全国平均30%、ウランバートルでも60%程度に留まっていた」と松村(2004)³⁾は述べている。就学率の低さは、後で掲げる表13「2002/03年 モンゴルにおける15歳以上人口の最終学歴割合」に見る数字からも明らかである(最終学歴が前期中学校までの割合が全国平均で49.4%)。

日本とは異なり出生率が高く、都市部への人口流入が激しいため、ウランバートル市内では慢性的ともいえる学校不足に悩まされている。多くの学校では2部制を

採用しており、早朝から昼までと昼から夕刻までに分けることで、多くの児童・生徒が学ぶ環境を維持している。訪問調査の印象では、校舎の外見からは想像できない校舎内の快適さが感じられ、卒業生を褒め讃えるパネルが展示されるエリアがあるなど雰囲気は良好であり、児童たちが学ぶ姿勢も真剣であった。2部制での授業展開が恵まれた環境とは決して言えないが、先生も児童も与えられた状況のもとで精一杯努力している姿が印象的である。

表9はWorld Bankの統計(2007)によるものであるが、2005年時点でモンゴルの就学率など教育関連の指標を中央アジア諸国やアジア諸国の指標と比較することができる(いずれも対GDP比)。ただし、この種の考察は本来時系列による経年変化によって行うべきであり、単年度比較の限界があることをお断りしておく。これによると、モンゴルの初等教育への財政支出の割合が高くなっているが、基礎数字となっている生徒数が就学年齢に達した人口全体なのか、実際に就学している生徒数なのか判然としていない。なお、教育への財政支出の割合が他の国々と比較して多いのは、モンゴル政府の教育立て直しへの熱意の表れであろう。

表9 「教育関連指標の国家比較」(2005年)

国名	一人当たり		生徒当たり 財政支出(%)対GDP比			教育への 財政支出(%) 対GDP比
	GNI 国民総所得 USドル	GNI/PPP(購買 力平価ベース GNI)USドル	初等教育	中等教育	高等教育	
バングラディシュ	470	2,090	7.0	14.7	49.7	2.5
カンボジア	430	2,490	6.1	—	77.5	1.9
カザフスタン	2,940	7,730	10.0	7.9	5.7	2.3
キルギスタン	450	1,870	7.6	14.3	20.8	4.4
ラオス	430	2,020	8.6	4.0	22.4	2.3
モンゴル	690	2,190	14.3	13.2	22.8	5.3
パキスタン	690	2,350	7.0	11.0	—	2.3
タジキスタン	330	1,260	8.7	11.3	14.1	3.5
ウズベキスタン	520	2,020	—	—	—	—
ベトナム	620	3,010	—	—	—	—

出所：駿河輝和 アマルジャルガル・ダイリー「モンゴルにおける教育と労働市場」国際協力論集第16巻第3号、2009年、56頁。原出所：World Bank, World Development Indicators 2007.

初等中等教育の就学率が低いとはいえ、一旦高等学校(後期中学校)へ進学した者の卒業後の大学への進学率は高い。それを示す数表が表10であり、大学進学率は86.8%となっている。また、2010年に大学を卒業した者のうち62.6%が女性で、このことから女性の高校から大学への進学率も高いことが推察される。訪問調査を行った小学校で面接した教諭(校長を除く)全員が女性であったことも、女性の進学率

の高さを裏付けているといえよう。社会主義時代に培われた女性の向学心は、今でも引き継がれている印象を受けた。モンゴルの体制移行は、その内部から沸き起こった体制変革欲求ではなく、ソビエト連邦の解体によるペレストロイカの流れによるものであった。急激な変化から様々な分野に混乱を引き起こしたが、女性をはじめモンゴル人に宿る向学心は脈々と受け継がれており、初等中等教育への低就学率などの教育上の課題は今後速やかに改善されていくことが期待される。

表 10 2010 年における卒業生数と進学率

9 年生 52,216名	11年生(高校) 34,521名	合計 86,737名	専門学校 17,836名	大学 31,651名
	大学進学率 86.80%			女性の割合 62.60%

出所：外務省『諸外国・地域の学校情報』2013 年 5 月更新情報に記載された内容をもとに執筆者が一覧表を作成。

(3) モンゴルの家庭教育

白鵬に影響を与えたモンゴル時代の教育環境を考察するには、モンゴルの家庭教育について深く理解しなければならない。モンゴルの家庭教育は、知育教育と生活教育の両面を担うものである。読み書きやモンゴル文字は家庭で学ぶものという古くからの概念⁴⁾があり、学校で学ぶのみならず家庭での学びを大切にしており、親、兄、姉などが教えるのが現在も慣例となっている。表 11 は、読み書き以外で一般的に家庭において教えられる知育教育内容をバーサンジャブ・バトゲレル(2013)⁵⁾が整理・記述した内容を参考に簡易にまとめたものである。

表 11 家庭での知育教育内容

音楽芸術	長い歌(オルティン・ドー)、民族音楽、滑稽歌、馬頭琴、伝統舞踊と歌、ヨウチン(民族楽器)
造形芸術	刺繍、貼り絵、フルム(銅や真鍮、皮を材料とした手工芸品)装飾模様、絵画、彫刻
医学教育	人間や家畜の病気を治療する方法、薬草の使い方、食品の効能
口承文芸	民話的英雄叙事詩、格言、民話、伝統文化

出所：バーサンジャブ・バトゲレル「モンゴルの教育における伝統的価値観とソビエト社会主義価値観の葛藤」佛教大学教育学部学会紀要第 12 号、2013 年、116 頁に記載された内容をもとに執筆者が一覧表を作成。原出所：国立歴史中央アルヒーフ、第 6 部第 21 章。なお、バーサンジャブ・バトゲレル氏は、佛教大学教育学部博士課程に在籍中。

例えば、「医学教育では家畜人間の病気を治療する方法が教えられる。遊牧民族として知られるモンゴル人にとっては欠かせない知識の伝承、生きる知恵であり、祖先から受け継いだ経験ある年配者によって家庭教育で教えられた。」⁶⁾という記述からも明らかのように、モンゴル国の長い歴史の中で家庭教育は生きる術を伝承する重要な学びの場であったことがわかる。

パーサンジャブ・バトゲレルは、「家庭教育では、モンゴル文字、算数、化学、物理学、気象、医学、各種工芸、地理、牧畜、家政学などの学科を、自分たちが日常従事する経済や仕事と密接に関連づけて教えていた。こうした読み書きそろばんを教える教育を家庭教育だというのは歴史に残っている」⁷⁾と述べている。

次に生活教育を簡易にまとめた表 12 をみてみよう。

表 12 家庭での生活教育内容(主に郡部・地方でのゲル生活環境)

家畜の飼育、乗馬技術、食事の作り方、
搾乳、乳製品の加工(チーズや馬乳酒等の製造)、馬乳酒製造、保存技術
民族衣装製作(裁縫や刺繍)、家畜の毛を刈る、家畜の毛で糸を紡ぐ、縄作り、縄の結び方、皮を鞣す、皮の加工、馬具(鞍や尻帯)の製作
鞍の装飾、蹄の調整、伝統的装飾の一種チョルドの結び方、馬車の部品を作る、修理する、ゲルを作る、ゲルを移動させる、狼などから家畜を守る、観望天気に加え気象情報を得る、冬营地や夏营地を選別する

出所：パーサンジャブ・バトゲレル「モンゴルの教育における伝統的価値観とソビエト社会主義価値観の葛藤」佛教大学教育学部学会紀要第 12 号、2013 年、116 頁に記載された内容をもとに執筆者が一覧表を作成。原出所：国立歴史中央アルヒーフ、第 6 部第 21 章。

生活教育には職業教育と専門教育があり、家庭生活に生活の手段である職業専門教育が行われるのである。つまり、遊牧民として生きる家庭では、遊牧に必要な知識や技術が子どもへと伝えられる。乗馬技術、家畜の飼育方法、搾乳、乳製品(チーズ)の製造方法、そしてモンゴル人にとって欠かせない馬乳酒製造など、内容は多岐にわたる。

モンゴル文化の研究者である小長谷(2008)⁸⁾は「年齢に応じた仕事があり、年齢に応じた学びがある。大人が学ばせようとプログラムしているのではなく、ただそこにそのような生活が存在している。人はそれを見るだけでも大いに学ぶところがあるだろう。」と述べている。草原にあるゲルでの家庭教育はまさしく生きる術を自ら学ぶ場であり、家畜の解体から保存まで、出来ることは何でも子どもが担う。水汲み、運搬など列記しきれないほどの仕事がそこにはある。「子どもたちはそうした死を直視することで、食がまさに命をいただいていることと同義であると知る」⁹⁾と小長谷が言うように、利便性の中に生きる現代日本の子ども達とは、全く異なる成長過程をモンゴルの子ども達は生きている。草原のゲルで生きること、それは生き抜くための価値観そのものを形成しているのは明らかである。

都会に居住している者にとっては、遊牧民であるモンゴル人の伝統的生活教育の内容を享受、経験するのは環境的に難しいが、地方に居住する親類の家(ゲル)の近くに移動式のゲルを家族一緒に持ち込み夏季休暇期間の生活を共にすることで、親や祖父母が幼少期に体験したであろう生活教育内容や体験は子どもへと受け継がれていく。詳細は後で述べる

が、白鵬の幼少期の生活パターンはこのケースにあたる。

勿論、知育教育や生活教育内容について、教わった者全員がすべての知識を習得できる訳ではない。才能や興味、積み重ねた努力によっても結果は違って来る。当然、家庭によって教え方や知識の量が異なるため習得に差はみられるものの、例えば、疲労を回復するためのマッサージや傷ついた筋肉の回復方法を教わり、子どもたちは何度も経験を積む。そして別の家畜の怪我や症状を観察することで、さらに経験を積んでいく。それから人間の健康を維持する様々な薬草の知識や使い方、効能について学び、実際にそれらを用いて治療する大人の姿から、実践的に処方と対処方法を学ぶ。こうして、家庭教育は、子どもたちの経験を通して知識として定着していく。

(4) 都市と地方の格差

表 13 は、2002 年から 2003 年の 15 歳以上人口の最終学歴割合を示したものである。最新の統計を用いなかったのは、地域的な差異を明らかにする統計として、白鵬がモンゴルで過ごした時期により近いものを用いたからである。これによると、まず 15 歳以上人口の 50.6% は高等学校以上を卒業していることがわかる。次に特徴的なのは、先にも述べたが男性より女性の学歴が高いことである。全国の男女別データから明らかなように、高等学校卒業以上の学歴を持つ男性の割合が 47.2% であるのに対し、女性は 53.7% を示している。この傾向は、都市部と地方を比較しても同様に女性の割合が高いことがわかる。加えて、ここで最も明らかにしたかった地域間格差ともいえる差異が顕著にみられる。

都市における高等学校以上の卒業者の割合は、男性が 66.9%、女性が 70.2% であるのに対し、地方では男性が 24.8%、女性は 32.3% となっており、都市と比較して地方の進学率が著しく低いことがわかる。

表 13 2002/03 年 モンゴルにおける 15 歳以上人口の最終学歴割合 %表示

	全国			都市		地方	
	男女計	男性	女性	男性	女性	男性	女性
教育なし	4.8	4.6	5.0	2.0	2.6	7.8	8.1
小学校	16.9	17.8	16.2	8.7	9.1	28.6	25.3
前期中等学校	27.7	30.4	25.1	23.4	18.0	38.8	34.3
後期中等学校	24.3	22.9	25.7	31.1	31.7	13.1	17.8
初期職業学校	5.1	5.7	4.5	6.5	5.0	4.6	4.0
職業専門学校	9.3	7.2	11.2	9.5	13.9	4.5	7.7
大学	11.9	11.4	12.3	19.8	19.6	2.6	2.8
高卒以上の小計	50.6	47.2	53.7	66.9	70.2	24.8	32.3

出所 駿河輝和 アマルジャルガル・ダイリー『モンゴルにおける教育と労働市場』国際協力論集第 16 巻第 3 号、2009 年、56 頁より執筆者がタイトルの表記を補足して作成。

原出所：「National Statistical Office of Mongolia (2004) Main Report of Labour Force Survey」

ガンバト(2004)¹⁰⁾が、「地方での工業生産と投資がほぼ停止状態にあり、ウランバートルへの一極集中が生じており、経済やインフラなど様々な面で都市部が恵まれている一方、地方では進学したいと考えても大学を中心とした高等教育機関の多くはウランバートルに集中している」と述べているように、モンゴルは都市に移住・転居しなければ進学することができない状況にある。このことが、都市と地方の最終学歴に決定的な格差を生じている要因の一つであると考えられる。

2 実地調査の方法と内容

ここまでモンゴルの教育制度、教育環境、家庭教育、地域の差異などについて述べたが、白鵬の知性、教養、向学心などはどのように育まれたのだろうか。白鵬の教育面、特にモンゴルで過ごした16歳までの教育環境や人的影響等を考察するため、以下の日程で日本(東京)とモンゴル(ウランバートル市)において長時間に及ぶ関係者へのヒヤリング調査を実施した。なお、以下の調査方法は、他の面(食育面、語学面、体育面)担当研究者も同様(同時)に実施している。

(1) 調査方法

モンゴル時代に白鵬に影響を与えた、もしくは親交の深かった者を対象として、対象別にヒヤリング日程を設定した。モンゴルでのヒヤリングについては、質問の意図をより正確に伝えるためモンゴル語に翻訳した質問紙を用意し、通訳を介して各質問に対する個別のコメントを日本語で得た。質問紙を使用しているため半構造化ヒヤリングに相応するが、回答できる対象が限定されているため、回答者がサンプリング理論によって選定されておらず、フォーカスインタビューの性格を持つ質問方法となった。結果として、質問紙に記載されていない内容についても多く聞き取ることが可能となった。教育面でのヒヤリング内容は、これまでに出版された書籍等で紹介されていない事実を知ることが目的であるが、紹介されている内容の事実確認という要素も含んでいる。なお、父親への聞き取り調査は残念ながら実施できなかった。

(2) ヒヤリング(国内)

期日：2013年12月24日 14:00～15:00

場所：近隣のホテルラウンジ 対象者：宮城野親方

同日：17:00～17:40 場所：宮城野部屋 対象者：白鵬

同日：17:40～18:10 場所：宮城野部屋 対象者：岩崎マネージャー

期日：平成26年10月14日 19:00～20:00

場所：北海道深川市内(プラザホテル板倉) 対象者：白鵬

(3) ヒヤリング(ウランバートル)

期日：2014年3月4日から9日までの期間

場所：モンゴル国ウランバートル市

調査対象者：①初等教育・中等教育学校での恩師・同級生 ②母親 ③長兄 ④次姉
⑤母親の妹 ⑥父親系(白鵬の)伯父の孫 ⑦幼少期からの友人たち(遊び仲間)

ヒヤリング日程とヒヤリング対象者の詳細は以下の通り。

3月4日(火)10:30~13:00 場所：第1学校

ヒヤリング対象者：ダビさん(白鵬の母親)、バスカさん(白鵬の次姉)、オクチューブリさん(小学時代のモンゴル語教師)、ツェベンさん(中学時代のモンゴル語教師)、バットフオヤグさん(小学1年の担任教員)、アンスクさん(体育教師)、セルフオ教頭(小学3、4年の担任教諭)、校長、友人女性(同級生)2名、男性1名。

3月4日(火)15:00~17:00 場所：ケンピンスキーホテル ラウンジ

ヒヤリング対象者：白鵬の長兄、次姉、母親。

3月4日(火)19:00~21:00 ケンピンスキーホテル SAKURA

ヒヤリング対象者：アパート時代(1995年に転居後)の親友 男性5名。①3才年上、②2才年上、③同級生(幼稚園から第7学年まで一緒)、④3才年上、⑤1才年上。

3月6日(木)14:00~16:00 ケンピンスキーホテル ラウンジ

ヒヤリング対象者：トブシャンバヤルさん(白鵬の父の2番目の兄の3番目の娘の子(白鵬の伯父の孫))37才。白鵬に影響を与えた人。夏休みを一緒に過ごす。白鵬の父がトブシャンバヤルさんのウランバートルの大学進学を応援し、父の家に預かり、一緒に生活する。現在はウランバートルのトヨタ関連会社に勤務。

3月9日(日)19:30~21:00 ケンピンスキーホテル SAKURA

ヒヤリング対象者：母親・次姉。

3 教育環境と教育の実際(ヒヤリング調査の結果から)

聴取・録音したヒヤリング内容を文字化し、客観的に内容を整理、分析を行った結果は、以下の通りである。

(1) 幼少期のダヴァジャルガル(通称ダヴァ、以下教育面の記述においてのみ通称にて表記)

ダヴァは人の集まるところが好きな明るい少年だった。幼稚園の劇でチンギス・ハーンの役を誇らしげに演ずる映像が残っており、テレビでも放映された。幼稚園を転園した

後、今度はスフバートルの役を得る。2度もモンゴルの英雄の役を演じることになり、母親は微笑みながら当時の思い出を語った。ダヴァは学校での出来事を母に詳細に報告している。些細なことでも話していた。指の間にとげが刺さり、モンゴル相撲の力士になれなかったらどうしようかと打ち明けられたこともあるという。怖い場面では良く泣く子だったようだ。明かりのついていない部屋は入れない程の恐がり屋。そして何よりも人を悲しませることが嫌だったようだ。

(2) 両親の教育観と家庭の教育環境

両親はダヴァの興味関心を尊重し、決して親が描いていた進路を強要することはなかった。母親は大学まで進学させたいと考えていたようだが、ダヴァの興味関心を尊重した。従って、本人の自主性、考えを尊重するという至ってシンプルな教育観を両親は持っていたことがわかる。父親(ジグジット・ムンフバト)は、20歳の時モンゴル相撲で全国優勝し、5連覇を含めて優勝回数は6回に及ぶ。また、52連勝という大記録も樹立している。加えて1968年のメキシコシティーオリンピックでは、レスリングのフリースタイル87キロ級の選手として銀メダルを獲得した父親の教育観¹¹⁾は、ダヴァのみならず、全ての子ども達の考え方や意思、熱中しているものを尊重し、自由に育てるというものであった。外科医でもある母親(ウルジーウタス・タミル)も父親と同じく子どもたちの自主性を重んじ、過干渉になることはほとんど無かったようである。それでも、甘えん坊で泣き虫だったことを自称するダヴァが親元を離れて一人で日本に旅立つまでの間、ダヴァは両親とともに川の字になって寝ていたという。「お母さんは私が日本に行った後、3日間も部屋から出ずに泣き続けたそうです」¹²⁾。両親の教育観の根幹に、溢れんばかりの愛情があったことは容易に想像できる。過干渉はしないという母親だったが、「母は、私が人のために力を尽くす医者や研究者になってくれたら、と考えていたようです。でもそのために勉強を無理やりやられることはありませんでした。私は家族のおかげで、伸び伸びとした少年時代を過ごせたんです」と白鵬自身が述べているように、母親の思い描く将来像は確かに明確にあったようである。しかし、それをダヴァに強いることは決してなかった。一方、過干渉にならないよう心掛けていた両親ではあるが、長兄と歳が離れて生まれたダヴァの相談教育役として、父親の兄の孫を郊外から呼び寄せるとともにダヴァをウランバートル市内の大学に進学させるなど、経済的にも大きな負担をしてでもダヴァの成長環境を良好に保ちたいという思いがあった。同時に母親はダヴァより少し年上の彼(白鵬の伯父の孫)と一緒に生活することで、ダヴァの指導や援助をお願いできると考えていた。中等学校のバスケット

トボール部に入部したダヴァが大きな体格の先輩にしごかれるのではないかと心配した母親は、彼に部活動の時間、ダヴァを見守って欲しいとお願いしたほどである。この点に限っては過保護とも思える心配りだが、先にも述べた通り偉業を達成した父親の息子であるダヴァの体格は決して大きくなかったこと等が大きな心配要因であった。彼は、両親、兄姉とともに家庭教育での指導者として知育のみならず、地方での生活経験者として蓄積した多くの生活教育を、ダヴァの興味が生まれるように配慮しながら指導していた。

長姉、次姉らが海外の大学に留学するなど、言葉や文化が異なる海外で生活することが、いわば当たり前のような家庭環境に育ったダヴァもまた、リビングに置いてあった日本の相撲雑誌に目をとめる。曙関が雲龍型で土俵入りする姿に衝撃を受け、傾倒していたバスケットボールと同じくらい相撲に心惹かれていったという。子ども達を海外に留学させたり、外国の雑誌を自由に手に取ることができたり、海外放送を受信できる環境が、ダヴァの家庭にはあった。

(3) 兄姉の教育状況

長男は父親の期待を強く感じながら、モンゴル相撲の選手として指導を受け、大学を選ぶ時、ブルガリアの体育大学を希望したが、それは叶わず、87年に士官学校を卒業した。長姉と次姉は幼稚園以降の義務教育をソビエトのシステムで展開されているウランバートル市内の学校で学んだ。その後、長姉は北朝鮮の大学に留学する。次姉は時代の変化に伴い、イギリス、ロンドンの大学に進んだ。三姉に対しては両親の指導はなかったようだが、先生から医学の道を勧められたものの弁護士を志しモンゴル国内の大学法学部に進んでいる。

当時のモンゴル経済の状況を鑑みると、兄も姉もそれぞれの見識と学びを十分に深めることが出来る大変恵まれた教育環境に育ったと言えよう。

(4) 少年時代(ウランバートルでの学校教育)

ダヴァが学んだ初等学校、中等学校はモンゴル市内中心部に位置し、当時としては珍しく給食体制も完備されていた。ダヴァは家庭の事情で転居するが、自身の意向もあり転校することなく通学し、同校を卒業している。

バスケットボールに熱中しスポーツ面では活発だったが、日常生活では「優しくおとなしい」タイプで、行動は大変思慮深かったようである。また友人関係をととても大切にしていたようで、恩師や友人、家族の話によると、友人関係が構築されていたことが大きな要因で転校することをダヴァは好まなかったのではないかと、慣れ親しんだ環境から離れたくないという思いがダヴァには強かったのではないかと、というコメントが多かった。

学校での成績は特に目立って優秀という訳でもなく、それでいて指導に手がかかるという子どもではなかった。興味を持ったことには没頭する面が当時から顕著だったようで、運動系、特にバスケット以外への興味は無かったのではないかと恩師や同級生たちは一様に述べているが、来日直前、最後の試験においてダヴァは歴史の答案を誰よりも早く提出し、優秀な成績を修めていることがわかった。これについては、考察部分で後述する。モンゴルの初等中等学校は午前と午後の2部制になっているため授業時間外に課外活動等に没頭できる環境にあったといえる。興味のあることにはとことん没頭し、それ以外の事は目に入らないという白鵬自身の性格的特性はこのような教育環境にも支えられた。

(5) 父親の親族と毎夏過ごしたゲル生活で受けた家庭教育

遊牧的牧畜は、人間と家畜と自然環境の相互作用と循環によって成り立っている。草原の草を家畜が食べ、草は家畜の体内で乳・肉・毛・皮・糞となる。それら全てを人間が利用し、糞や死体は微生物によって分解され土に還る。全てが化学的に変態し不要なものはひとつもない。閉鎖的な地球という環境の中にある共生を草原の生活は教えてくれる。つまり、自他を守り共存する自然観を智慧として学んでいるのだ。当然、ゲルでの生活から子どもが学ぶこと(礼儀・生活の知恵・働くこと)は多い。それは生きるための知恵の獲得でもある。ダヴァは家族と毎年夏、家族専用のゲルを移動設置して親戚と生活していた。そこで、草原の雄大さに出会い、モンゴル民族としての自覚を育み、親族や友人たちとの切磋琢磨の中で様々な能力と感性が育まれていったに違いない。特に、白鵬自身が述べているように、草原で狼と出会ったことは大きなインパクトがあったようで、神として崇められている狼の目線、その迫力、畏敬の念とともにわき上がる恐怖心との闘いなど、ウランバートル市内では体験できないゲルでの家庭教育による学びと体験が少年ダヴァにはあった。

注記

- 1) 元は、1271年から1368年まで中国とモンゴル高原を中心とした領域を支配した王朝である。正式の国号は大元で、元朝とも言う。中国王朝としての元は、北宋崩壊(1127年)以来の中国統一政権であり、元の北走後は明(1368年-1644年)が中国統治を引き継ぐ。
- 2) 明朝の中国人は北元政権を「蒙古」と呼ばずに「韃靼」と呼んで、元朝の後裔であることを否認した。
- 3) 松村美智子「モンゴルにおける幼児教育の現状と課題－JICA海外シニアボランティアとしての活動から－」お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター国際教育協力セミナー講演記録、2004年5月19日、1頁。www.ocha.ac.jp/intl/cwed_old/eccd/...seminer/.../matsumura040519.pdf
- 4) バーサンジャブ・バトゲレル「モンゴルの教育における伝統的価値観とソビエト社会主義価値観の葛藤」『佛教大学教育学部学会紀要』第12号、2013年、114-118頁。原出所：国立歴史中央アルヒーフ、第6部、第21章
- 5) 上掲論文、114-118頁
- 6) 上掲論文、114-118頁

- 7) 上掲論文、118 頁
- 8) 小長谷有紀『食農教育』農山漁村文化協会、2008 年 4 月 No. 61、9 頁
- 9) 上掲書、9 頁
- 10) ガンバト、ジャミアン「モンゴルにおける地域格差に関する一考察」『比較経済体制学会年報』41、2004 年、72-84 頁
- 11) 小松成美『横綱白鵬 試練の山を越えて はるかなる頂へ』学研教育出版、2013 年、34 頁
- 12) 上掲書、26 頁

第 3 節 日本語からみる白鵬関の強さ

1 白鵬と日本語

相撲界には 2014 年 10 月現在 39 人の外国人出身力士がいる。幕内だけ見ても平成 26 年九州場所には横綱 3 人を筆頭に 16 人がひしめいている。あまりの外国人力士の目立ちぶりに危機感を抱いたか、相撲協会は平成 22 年 2 月 23 日付で「一部屋に外国出身者一人」との申し合わせを行うにいたった。今後は外国人力士の数は減少傾向になることが予想される。白鵬の入門した

表14 平成26年九州場所外国人力士番付

国籍	内訳 \ 計	幕内	十両	幕下	三段目	序二段	序の口
モンゴル	26	10	7	7	1	1	
ブルガリア	1	1					
ブラジル	1	1					
エジプト	1	1					
ゲルジア*	2	1	1				
ロシア	2	1			1		
中国	3	1			2		
ハンガリー	1			1			
韓国	1				1		
米国	1				1		
計	39	16	8	8	6	1	0

相撲協会発表番付表により筆者が作成
*平成27年4月22日以降「ゲルジア」から「ジョージア」へ変更

宮城野部屋にも、白鵬入門時に入門一年経った同じモンゴル出身の兄弟子・龍皇が存在した。龍皇の存在が白鵬の日本語の成長に一定の役割を果たした。龍皇は、入門時日本語がまったくわからなかった白鵬に対しては、龍皇が親方、兄弟子のお話を通訳するなど、日本語を覚える手助けをした¹⁾。白鵬も「最初は大変でしたが、龍皇さんに助けてもらいながら、日本語を話すと、『それほど難しいものではないな』と思えました。」²⁾と語っており、日本語習得、さらには相撲社会に馴染んでいく上で大きな助けになった。今後は白鵬に対して龍皇が果たしたような同部屋での同郷の外国籍兄弟子からの有形無形のサポートは期待できなくなりそうだ。この点で白鵬は良い時期に入門したと言えよう。

さて、相撲協会の方針はさておき、外国人力士が目立つのはその強さだけではない。これらの日本語能力の高さも注目される場所である。宮崎里司や石王敦子³⁾が、イメージョン・プログラム(本章第3項を参照)にことよせながら、相撲界を一種の理想的な外国語学習環境とみなしているのも、外国人力士の日本語能力の到達度の高さを認めているからにほかならない。そうした日本語能力の高さは相撲の強さに結びついている。白鵬自身、「言葉が上達してくると相撲も強くなった。親方の教えが理解できるから」⁴⁾と語っている。また、「しっかり日本語を覚え、自分の気持ちを日本語で話せるようになったとき、はじめて、相撲の心や力士のほこりも、しっかり自分の物にできたのだと思います。」⁵⁾とも述

べている。このように白鵬自身、日本語力が相撲の強さに密接に結びついていることを強く意識している。現在の白鵬の日本語がどのようなものであるかについては次章で音声面を中心に検証していくが、TVに流れる白鵬のインタビューの対応を聞いたことのある人は誰しも「上手な日本語だな」と思うであろう。あるいは、白鵬自身「今は、モンゴル語と、日本語、その両方が、私にとっての母国語ですね。」⁶⁾と語っているが、実際白鵬の話す日本語はすでに日本人の話す日本語に遜色ないものであると筆者は感じている。また、白鵬の日本語習得を支えてきた宮城野部屋関係者も大関昇進のころ(2006年5月場所に新大関)から日本語についての注意をあまり行わなくなったという(宮城野部屋関係者アンケート 2014年12月)。特に発音は、モンゴル出身力士の中でもきれいである。宮城野部屋の岩崎マネージャーは、大相撲の外国出身力士の中でも同部屋の白鵬と兄弟子・龍皇の日本語は発音がきれいと言っている(宮城の部屋インタビュー 2013年12月)。

そのような白鵬も、入門当初は当然ながら日本語初心者であった。先輩・後輩という上下関係に不慣れな上、モンゴル語には敬語の概念もないため、敬称を付けずに兄弟子を呼び捨てにして怒られた、あるいは、ちゃんこの際に兄弟子に持ってこいといわれた物を間違えて怒られた⁷⁾など、日本語の未熟さに起因する入門当初の失敗エピソードには事欠かない。その後、現在のような高度な日本語能力を獲得するまでには、相撲における精進同様に、相当な上達のため努力を積んだはずである。しかし、白鵬の日本語上達に有利な点があったのも確かである。その一つがモンゴル語と日本語の類似性である。次項では、モンゴル語を母語とする白鵬が日本語を習得する際に有利な点、不利な点を確認する。

2 モンゴル語と日本語

まず、言語系統上、モンゴル語は、モンゴル諸語に属し、チュルク諸語、トゥングース諸語とともにアルタイ語族に分類される。アルタイ語族の特徴には、膠着語であること(下記(1)形態的類型論を参照)、後置詞(日本語では「助詞」)を使うこと、R音で始まる語がほとんどないこと、などがある。これらの特徴は日本語にもみられるため、20世紀前半に日本語に注目したアルタイ諸語研究者のG.ラムステットやE.ポリワールノフらにより、日本語はアルタイ語族の内のトゥングース諸語の流れを汲むという仮説が提示され、日本でも一時期同説が広く流布した。ただし、その後日本語の音声・語彙にはオーストロアジア諸語などの南方系言語との関連があると示され、現在では日本語はトゥングース諸語系の北方系言語とオーストロアジア諸語系の南方言語が混合したものという見方が有力になっている。しかしそうであっても、トゥングース諸語系言語の要素とされるいくつか

の点で日本語とモンゴル語の間には共通性が認められるのは間違いない。

(1) 形態的類型論から見た共通性

日本語の動詞、形容詞、形容動詞にはいわゆる活用とよばれる語尾の変化とともに、語の意味を拡張する要素(接辞)を次々に付けていく。例えば、「罰としてそうじをさせられているようだった」の「そうじをさせられているようだった」は、基本の動きを表す動詞「(そうじを)する」が「させる」「させ・られる」「させ・られ・ている」「させ・られ・ている・ようだ」「させ・られ・ている・ようだ・った」と活用しながら形態変化したものである。そして、形態変化とともに、「する」という基本の語彙的意味に「使役(させる)」「受け身(られる)」「進行中(ている)」「推測(ようだ)」「過去(た)」と次々と意味が付け加わっていく⁸⁾。形態的類型論によるタイプ分けでは、この日本語のように、動詞語幹と接辞による語形変化をとめないながら意味拡張を行う言語を膠着語という。そして、モンゴル語も日本語同様の膠着語である。これに対して、語の活用がなく、「使役」「可能」などの意味要素も単独の語として現れるのが、中国語を代表とする孤立語と呼ばれる言語である。「吃(食べる)」という基本の語の意味に要素を付け加えるには、「(我)給(孩子)吃(好吃的東西)」「(我)能給(孩子)吃(好吃的東西)」「(我)不能給(孩子)吃(好吃的東西)」「(我)不能給(孩子)吃(好吃的東西)了」のようになる。意味の基本を担う動詞「吃」は常に元の形のままであり、「給(孩子)：(子どもに)させる」「能：できる」「不：ない」「了：～た」の要素がそれぞれ独立して文に加わっている。また、ヨーロッパ諸語、特にラテン系の言語に代表されるのが、単語そのものが人称、時制、格などに従って複雑に変化する屈折語である。白鵬の母語であるモンゴル語が日本語同様の膠着語であるということは、発想を日本語として発話する際には、モンゴル語で行っていたのと同じように意味要素を積み重ねていけばよいわけで、その発想を日本語で表現する際には有利に働いたはずである⁹⁾。

(2) 統語的類型論から見た共通性

形態類型論的に日本語もモンゴル語もともに意味要素を積み重ねる膠着語という点で共通することをみてきた。同様に、統語類型論的にも、日本語とモンゴル語は、

①S(主語名詞句)、V(動詞句)、O(目的語名詞句)の3要素の配列がSOV型

②名詞の後に後置詞である助詞を使用するN+ad position型

③名詞を修飾する部分が名詞の前に来る Modifier+N型

といった共通点がある。一方、英語や中国語などのSV0の配列はSV0型で、名詞の前に前置詞を使用する(ad position+N)¹⁰⁾。学習言語の語順が母語と同一であれば、母語の発想

の順をそのままに文を生成できる。いろいろなところで語順を入れ替えなければならない異語順とくらべ、やはり一手間少ないほうが発話しやすいはずである。白鵬も語順について、「言葉の順番が日本語とモンゴル語ではとても似ているんです。『わたしは相撲を取りたいです。』というのをモンゴル語に訳したら、順番はそのまま、単語を日本語からモンゴル語になおすだけでいいんですよ。」と述べており¹¹⁾、同語順の利点を享受している。このように文法の点では、モンゴル語を母語とする者が日本語を学習する際にかなり有利であるといえる。

しかし前述したように、言語の重要な要素のうちの形態・統語構造以外の部分、つまり音声や語彙の面では、日本語は南方系言語であるオーストロアジア諸語との関連が言われている。実際、音声、語彙の点では日本語とモンゴル語には類似性がない。モンゴル語を母語とする者が日本語を学習する際には不利に働く部分である。次に、音声・音韻について見ていく。

(3) 音声・音韻

まず、音声の面から日本語の特徴を見ていくと、日本語は有声・無声の対立を持ち、拍(モーラ)を音の単位としている。有気・無気の対立を優先する中国語や韓国語を母語とする学習者には、日本語の濁音・清音の聞き分けは間違えやすいところだ¹²⁾。また、長音「ー」、撥音「ん」、促音「っ」などの特殊拍も日本語では、他の音同様に一定の長さを持つ拍として扱う。「こんご(今後)」「コース」「コップ」は、日本語ではそれぞれ3拍として、ほぼ同じ時間間隔で「/ko//N//go/」「/ko//H//su/」「/ko//Q//pu/」¹³⁾と3音素の組み合わせで発音される。一方、英語、中国語、韓国語など、音節が音の単位となる言語を母語とする学習者には、この「ー」「ン」「ッ」の特殊拍を日本語話者並みの時間間隔で発音することが難しく、「/kon//go/」「/koo//su/」「/ko//pu/」と2音節で発音しやすい。このように2音節的に発音すると、「ー」「ン」「ッ」部分の発音時間が極端に短くなる。近藤真理子¹⁴⁾は、日本語教師たちの観察をもとに、音節を発音単位とするさまざまな言語を母語とする学習者がいずれもこれら特殊拍の発音を苦手に行っていることを示している。結果的に、日本語母語話者からすると、音節言語を母語とする話者の話す「こんご」「コース」「コップ」は、それぞれ「こんご」「コ・ス」「コ・プ」ときこえてしまう。モンゴル語も開音節(母音終わり)、閉音節(子音終わり)を基本の音単位とする音節言語であり、表 15

表15 モンゴル語の音節構造

開音節		閉音節	
1	V	1	VC
	VV		VVC
	Vv		VCc
2	CV	2	VvC
	CVV		CVC
	CVv		CVCc
V : 短母音		2	CeVC
VV : 長母音			CVVC
Vv : 二重母音			CVvC
C : 子音			CVCcc
Cc : 二重子音			CcVCC
Ccc : 三重子音			

バトモンクほか(2011)による

に示すように実に多様な音節構造を持つ。しかし、この構造の中では、日本語の特殊拍「ン」「ッ」は閉音節の一部として発音され、また特殊拍「一」は、長母音の一音節の一部になってしまう。日本語母語話者並みとってよいほど発音のこなれた白鵬でさえ、この点が発音を出してしまうことがある。以下の図1は、白鵬の発話の一部「おもってもみませんでした」¹⁵⁾を解析したものである¹⁶⁾。特殊拍「ッ」と「ン」が含まれるが、どちらの拍も他の拍に比べてかなり短くなっている。白鵬のほかの発話も同じ傾向である。この傾向は、白鵬にかぎらず、他のモンゴル人力士にほぼ共通に見られる。比較対象に日本人の発話の図2を示すが、両特殊拍「っ」と「ん」にあたる時間長の違いは一目瞭然である。

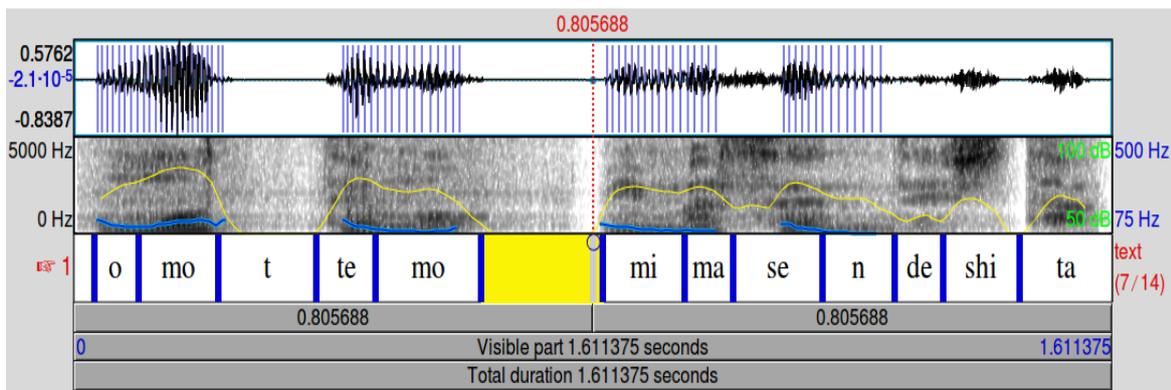


図1 白鵬の発音(特殊拍)

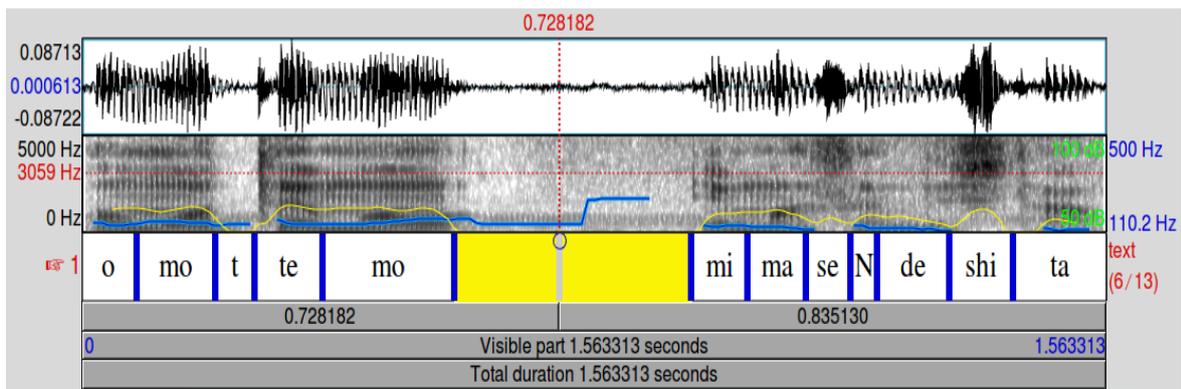


図2 日本人話者の発音(特殊拍)

一方、白鵬の母語、モンゴル語も音声的にいくつかの特徴を持つ。日本語を話す上で利点となるのは、モンゴル語母語話者は、日本語母語話者に見られる母音の無声化が比較的起きやすいという点である。日本語では、先行子音が摩擦音(/s//h//f/など)、破擦音(/ts//ch/など)で、狭母音(/i//u/)を挟んで後続子音が破裂音(/p//k//t/など)のときに狭母音が声帯の振動なしに発音される(無声化)ことが多い¹⁷⁾。たとえば、「失敗」「すっぱい」はsi p pa i/su p pa iのはずだが、多くは「し」「す」の部分で母音が無声化しsh p pa

i/s p pa iのように発音される。蘇迪亜¹⁸⁾は、先行子音に摩擦音/s/または破擦音/ch/ts/を持ち狭母音/i//u/を挟み、破裂音子音が後続する単語を集め、日本語母語話者24名、モンゴル語母語話者19名、中国語母語話者23名に発音させ、どの程度の確率で母音の無声化が起こるかを実験した。その結果、日本語母語話者には94%という高い確率で母音無声化が起きた。一方、中国語母語話者が母音無声化を起こす確率は20%、モンゴル語母語話者は43%であった。モンゴル語母語話者は日本語母語話者ほどではないにしても、中国語母語話者よりもはるかに母音の無声化を起こしやすいことが示された。母音を無声化させずに有声のまま話すと、一般に重く、強く聞こえる。日本語母語話者にとって「より自然な」日本語に聞こえるためには適度な無声化が必要となるが、モンゴル語母語話者はこの点で有利となる。白鵬の発話の一部「はつばしょ つかめのあさ(初場所五日目の朝)」¹⁹⁾の音声スペクトログラムを図3に示す。文字の最下段に母音発声部分を示した。同じ「つ」でも、一つ目の「初場所」の「つ」/tsu/の/u/は無声化せずに有声のまま発音されている(破擦音/ts/の後も/u/の音声エネルギーがある)。この部分は日本人でも有声で発音することが多い。一方、日本人なら無声化することの多い二つ目の「五日目」の「つ」/tsu/の/u/は、きれいに無声化されている(破擦音/ts/の後に音声エネルギーの空白帯がある)。白鵬の発音がよいということがうかがえる一例である。

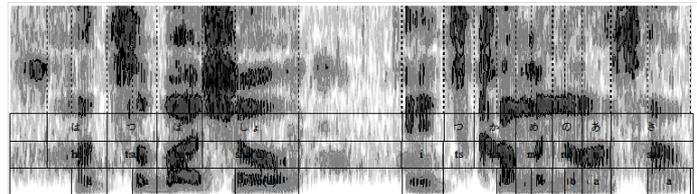


図3 母音の無声化

3 相撲社会という言語習得環境

しかし、モンゴル語母語話者がみな、白鵬と同じぐらいに日本語が上手なわけではない。モンゴル出身の留学生の中には、日本に4年、5年と住んでいながら、話をしてみるといかに外国人という日本語を話す者もめずらしくない。小林幸江²⁰⁾は、モンゴル人日本語学習者の助詞の誤用例を採集し、その背景にモンゴル語と日本語の助詞の使用範囲の差があるとした。母語と学習言語の間で似ているところは、学習の容易さにつながる面もあるが、一方で母語の影響による誤用をもたらす。しかし、白鵬に限らず、大相撲のモンゴル出身力士はいずれもまず助詞の誤用などはほとんどなく、また発音も流暢な日本語を話す。モンゴル出身力士にかぎらず、かつての小錦などのハワイ出身者、東欧出身の琴欧洲、把瑠都、最近ではエジプト出身の大砂嵐など外国出身の力士はいずれも流暢な日本語を話している。外国出身のスポーツ選手といえば、プロ野球やJリーグにも多くいるが、大相撲の力士ほどに話せる選手がどれほどいるであろうか。元阪急で活躍したアニマルや、関西

弁をあやつる元近鉄のローズなど、滞日年数が長く日本語が上手だと評判の選手も何人かいるが、その彼らでさえ相撲界の外国出身力士の話す日本語とは雲泥の差である。ましてやその他の多くの野球界の外国人選手は、通訳に頼ることから抜け出せないまま1、2年で帰国してしまう。

ここで注目したいのが、相撲界という外国人力士が身を置く日本語習得環境である。

語学教育において史上最も成功したと考えられるプログラムに Army Specialized Training Program(陸軍専門訓練計画、以下 ASTP)の語学教育プログラムがある。第二次大戦中にアメリカ軍は、効果的な軍の運用をするために様々な分野の専門家を養成するために実施したプログラムが ASTP である。そこでは、医療、財政などの専門家と同時に交戦国や軍隊駐留地についての情報収集をするために現地の言語に精通した専門家も養成されていた。この言語学習プログラムからは、ゼロから学習しはじめた者が、わずか半年から1年後には専門家として実務に就いたという例が頻出している。史上最も成功したと言われる所以である。この成功にはどのような理由があったのであろうか。まず、そこで使われた教授法(Army Method)は、大戦後に一般の語学学習者への教育方法に転用され、Audio-Lingual Method として知られることになる。母語話者インフォーマントを相手とした口頭による、集中的なパターン反復練習を基本にしていた。しかし、オーディオリンガルメソッドそのものは、退屈で創造性のない練習として批判されることもあるように、理想的な教授法とは言えないものであった。それにもかかわらず ASTP の語学教育が成果をあげられた理由は、教授法そのものの優位性ではなく、学習者の学習動機の高さに求めるべきであろう。ASTP で訓練を受ける軍人は学習適性を認められて特別に選抜されていた。ASTP で学習成果を示すことは、自身の能力の高さを示すことになり、それは自身の昇進に直結していた。さらに重要なのは、ASTP での学習に不的確と判断されれば、もとの所属舞台に戻され、銃弾の飛び交う危険な前線勤務に就かされる²¹⁾。命の危険を回避したければ²²⁾、ASTP で成果を示さなければならず、それこそ死にもものぐるいで学習したはずである。ASTP であったような、言語能力を高めることが自らの昇進につながり、十分な言語能力を持たなければ命運が尽きるかもしれないという言語学習の背後にある環境は、外国人力士の日本語学習の環境にも通じるものがある。外国人力士にとっても、すみやかに日本語に精通することで所属部屋に馴染み、親方の相撲指導もよく理解でき、それが自身の出世につながる。もし、それらがうまく行かなければ、相撲界から出ていかなければならない。白鵬も入門当初から「(日本語を)覚えなければ、日本で生きていけないし、力士としても強く

なることができない。」と日本語上達への決意を持っていたようだ²³⁾。これは力士の日本語学習を強く動機付けるものだろう。

また、宮崎里司²⁴⁾は、相撲界という学習環境をイマージョン・プログラムに比しながら、それが理想的な言語習得環境であると説明している。イマージョン・プログラムとは、学習言語をフルに使いながら何らかの課題を達成するものである。カナダの英語とフランス語のバイリンガル教育の中で開発された語学教育プログラムであるが、言語知識の習得のためではなく、その背景にある文化的要素も含めた言語使用そのものに慣れることを目的としている。このプログラムは学習者をして、母語や媒介言語に頼ることなく集中的、全面的に学習言語に浸り切る(immersion)ように準備される。イマージョン・プログラムは近年、学習効果の高い有効な言語教育プログラムとして注目されるようになってきている。

表 16 イマージョン・プログラムと日本語習得環境としての相撲社会

	イマージョン・プログラムによる 外国語教育	相撲社会における 日本語習得
目的	設定された課題について日本語を使って 処理、解決する	相撲社会への定着と生き残り
習得する能力	言語能力(文法)+社会文化的能力の習得	相撲社会のしきたり、人間関係の修得
学習の場面	教室+実社会での日本語使用	稽古場、国技館、後援会の集まりなど日 常の中での使用
学習活動の参加者	教師+ゲスト、インタビュー相手など	兄弟子、親方、おかみさん、部屋関係者、 後援会など
学習行動	プログラムの過程で起こる課題、問題の 調整・解決	疑問発生時には上記参加者に随時アプ ローチ
学習様態	総てを日本語で処理 = 浸りきる (immerse)	24時間、生活すべてが学習

宮崎里司²⁵⁾は、このイマージョン・プログラムが期せずして相撲界という環境で稼働しているという。表 16 にまとめたように、学習者の学習意欲を高めるトピック(相撲)と学習の場面(相撲社会)、プログラムの参加者(相撲協会、部屋、タニマチなどの相撲関係者)、修正・学習の機会(24時間相撲部屋での共同生活)などの点で、外国人力士の学習意欲を掻き立てる理想的な言語習得環境がそろっているとしている。先に、ASTP においては同プログラムに生き残るという動機づけが学習成果につながったことを見たが、相撲社会に定着し、生き残るという外国人力士たちの日本語習得の動機付けも同様に高い学習成果を生むことになったはずである。白鵬も、日本語習得が十分に進んだ十両昇進後であっても「あいさつも、言葉づかいも、力士の名にはずかしくないよう、気にかけた」²⁶⁾と、相撲社会に身を置くものとしての覚悟を強く意識している。このような意識が強い動機付けとなり、

絶え間ない日本語能力進歩につながっているのだろう。

このように相撲界は、日本語習得環境としては外国出身力士の日本語習得に好影響を及ぼす要素に満ちた環境である。白鵬も、ほかの外国出身力士と同じように、この環境の中で日本語を上達させていったのであろう。しかし、白鵬の日本語が他の外国出身力士以上であるのなら、そこには環境に頼るだけではない、白鵬自身の努力もあったはずである。次に、白鵬の日本語習得への取組みについて確認したい。

4 白鵬の日本語習得方法

前項で見たように、相撲社会は理想的な言語習得環境とみることができる。そこでは親方による指導も相撲界の人々との交流もすべて音声によって行われる。であれば、そこで自然に上達するのは話す・聴くといった音声によるコミュニケーション能力である。一方、読む・書くについては、いくらよい言語習得環境であるといっても相撲界に身を置くだけで上達はしまい。従って、文字言語については、目的意識をもった学習が必要になる。特に日本語の場合は漢字という、非漢字圏の外国出身者にはやっかいな文字がある。ダンザンニヤム ブレンチメグ・馬場久志²⁷⁾は、モンゴルの4大学で日本語を学習する277名の学習者を対象に、日本語学習においてどのような困難を感じるかについて調査を行った。その結果、回答者の49%が漢字の学習を困難としている。漢字の学習が困難であることは相撲界の外国出身力士も一様に口にすることである。そして、彼らの対策が日本語の歌を謳うことである。白鵬もCDの歌詞カード、あるいはカラオケの字幕に出てくる漢字を読もうと努力することで読める漢字を増やしてきたという²⁸⁾。なお、カラオケは歌詞と心情がシンクロしやすく、意味理解と異文化理解に効果があり、日本語学習、日本理解にも有効である²⁹⁾。

白鵬の場合は、携帯電話でのメール交換も漢字学習に役だったようである。熊ヶ谷親方は、白鵬が夫人との交際時代(2004年3月～)に毎日やりとりしたメール理解のためはかなり勉強したと述べている³⁰⁾。白鵬自身「彼女とメールしているうちに、ドンドン新しい日本語や漢字を覚えましたよ。」と言っている³¹⁾。意志を伝えあいたい人とメール文でやりとりしたい、理解したいという思いは強い学習の動機付けになったであろう。

また、夫人との交際は、漢字以外でも日本語上達に役に立った。デートで使うために、当時はやっていたテレビドラマ「冬のソナタ」のセリフを相当研究したようである³²⁾。テレビドラマを言語学習に利用することは、文化への気付きを生み、言語運用能力の向上への効果が大きい³³⁾。使用する場面を想定しながらのセリフ研究は、きわめて実践的な言語

学習方法である。しかも、その結果がデートの成否に直結するのであるから、学習意欲も高まるはずである。「冬のソナタ」そのものは韓国のドラマであるが、そこでの日本語は大いに役だったはずである。

漢字を読みたい、知らなければという思いは、番付表や取り組み表を見るときにも生まれるはずである。もちろん、より高度な文章を読むということにも白鵬は挑戦していく。大関昇進のころから白鵬は、昭和の大横綱と言われる双葉山を意識しはじめ、その著書『相撲求道録』を読みはじめた³⁴⁾。周囲の人にことばの読み方や意味を尋ねながらの読書であったようだが、まとまった文章を読みとおした体験は、読むことへの大きな自信につながったことであろう。

注記

- 1) 小松成美『横綱白鵬 試練の山を越えて はるかなる頂へ』学研教育出版、2013年、44頁
- 2) 上掲書、152頁
- 3) 宮崎里司『外国人力士はなぜ日本語がうまいのか』明治書院、2001年。石王敦子「外国語学習に影響する要因」『追手門学院大学地域支援心理研究センター紀要』2005年、18-28頁
- 4) 白鵬翔『相撲よ!』角川書店、2010年、82頁
- 5) 小松成美『横綱 試練の山を越えて はるかなる頂へ』学研教育出版、2013年、45頁
- 6) 上掲書、45頁
- 7) 白鵬翔『相撲よ!』角川書店、2010年、42頁
- 8) 細かく言えば、「使役」と「受け身」は出来事を見る視点(ヴォイス)、「進行中」は活動の過程の捉え方(アスペクト)、「推測」は内容についての話者の態度(モダリティ)、「過去」は現在時点との前後関係(テンス)と、それぞれの役割は異なる。
- 9) 小林幸江は、日本語学習3か月目にして「日本語の文法はやさしいです」と言い切るモンゴル人日本語初学者の例を紹介している。またウランバヤムは、自身の学習経験を踏まえ「モンゴルの日本語学習者にとって日本語の文法の習得はそれほど困難ではない」としている。小林幸江「モンゴル人に対する日本語教育の研究」『日本語学校論集』8号、東京外国語大学外国語学部附属日本語学校、1981年、25-38頁；ウランバヤム、ツェツェグドラム「モンゴルにおける日本語教育：高等教育における漢字教育に着目して」『言語文化と日本語教育』Vol.41、お茶の女子大学日本言語文化研究会、60-69頁
- 10) 名刺の修飾については、中国語は日本語同様に修飾部分が名詞の前に位置するが、英語は関係代名詞を使い名詞の後から修飾することもあれば形容詞が名詞の前から修飾することもなど、いろいろではある。
- 11) 小松成美『横綱白鵬 試練の山を越えてはるかなる頂へ』学研教育出版、2013年、152頁
- 12) 吉田則夫は、VCV(Vは破裂音 t/d、k/g、p/bの組み合わせ)の無意味単語の発音について、中国人の誤聴が際立っていること(/k/を/g/と誤聴する以外の割合は20%強~40%超)を示している。吉田則夫「清音と濁音の区別—日本人・中国人の場合—」『講座 日本語と日本語教育3 日本語の音声・音韻(下)』明治書院、1990年、198-218頁
- 13) 「ん」は前後の音により、[n、m、ŋ]など多様な音価の異音をもつが、日本人には/N/という同一音素として認識される。「一」「っ」についても同様であり、「ん」「一」「っ」はそれぞれモーラ音素/N/ /H/ /Q/と表記される。
- 14) 近藤真理子「日本語学習者の音声習得における第一言語特有の干渉と普遍言語的干渉：日本語教師へのアンケート調査から」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第3分冊57、2011年、21-34頁
- 15) TBS テレビ「白鵬と大鵬 最後の会話」、2013年2月24日放送
- 16) 本稿での音声解析にはすべてpraat(linux版)を使用した。
- 17) 関東、東北、九州地方で顕著だが、関西、中国地方では無声化率は少ない。前川喜久雄「母音の無声化」『講座 日本語と日本語教育2』明治書院、1989年、135-153頁
- 18) 蘇迪亞「日本語学習者における日本語母音無声化について：中国語話者とモンゴル語話者を対象に」『ことばの科学』v.25、2012年、47-62頁
- 19) TBS テレビ「白鵬と大鵬 最後の会話」、2013年2月24日放送

- 20) 小林幸江「モンゴル人に対する日本語教育の研究」『日本語学校論集』8号、東京外国語大学外国語学部附属日本語学校、1981年、25-38頁
- 21) ASTPは、1943年の12月に約14万人(ASTP全体)を対象にはじまったが、翌年4月には11万人が原隊に戻され、上級と認定された約3万5千人だけがプログラムを継続した。
- 22) ASTP各校では、”My Bonnie Lies Over the Ocean”をもじり、/Some Mothers have sons in the Army, /Some Mothers have sons on the sea, /Take down your service flag, Mother, /Yourson’s in the ASTP/TS, TS, TS for the ASTP!/と歌われていたように、ASTPにいることは安全であることを意味した。
- 23) 小松成美『横綱白鵬 試練の山を越えてはるかなる頂へ』学研教育出版、2013年、44頁
- 24) 宮崎里司『外国人力士はなぜ日本語がうまいのか』明治書院、2001年
- 25) 上掲書
- 26) 小松成美『横綱白鵬 試練に山を越えてはるかなる頂へ』学研教育出版、2013年、104頁
- 27) タンザニヤム プレンチメグ・馬場久志「モンゴルにおける日本語学習者の現状と課題」『埼玉大学紀要 教養学部』58、2009年、145-157頁
- 28) 白鵬翔『相撲よ!』角川書店、2010年、82頁
- 29) 寺内弘子「歌を教材とした日本語教育と異文化コミュニケーション」『法政大学教養部紀要』95号、225-237頁
- 30) 熊ヶ谷誠志『白鵬 「山」を越える男』主婦と生活社、2010年、201頁
- 31) 小松成美『横綱白鵬 試練の山を越えてはるかなる頂へ』学研教育出版、2013年、163頁
- 32) 白鵬翔『相撲よ!』角川書店、2010年、90頁
- 33) 張文麗「学習者はドラマ視聴で何に気づいているか：プロトコル分析を通して」『日本語教育方法研究会誌』17(1)、2010年、30-31頁
- 34) 小松成美によれば三役昇進のころ。小松成美『横綱白鵬 試練の山を越えてはるかなる頂へ』学研教育出版、2013年、137頁

第4節 身体状況

1 大相撲力士の体力と精神力

(1) 大相撲力士の体力の概要

2014(平成26)年1月場所において、白鵬はこれまで誰も成し遂げていない33回目の優勝を全勝で飾った。「調子は絶好調とはいえなかった。」と舛田(日本相撲連盟常務理事)は言う。確かにその場所は安定した強さではなく危ない場面も何番かあったし、同体で取り直しの末に勝った一番もある。「格で相撲を勝っていった。相手の事はよく見えていたのではないか。」とも語った。

この「格」とはなんだろうか。その昔、横綱とは相撲界において別格の神様に近い位置付けとして臨時的に置かれたものだったが、相撲は大相撲という名称で興行として発達し、横綱はその番付の最高位として定着していった。そのような伝統的な、または興行の延長としての立場から見る「格」といわれるものは本論文では扱わず、厳然とした事実である「勝敗」の差としての力士たちの番付の差のみ扱うこととしたい。従って本論文の「格」とは、スポーツの立場からみた相撲競技に関わる全ての科学的要因のレベルのことである。

相撲のみならずスポーツは心技体がバランス良く必要になるとよく言われるが、白鵬の相撲の「格」は心技体のレベルが他力士と比べ格段に高かったのではないかと考えられる。2014年1月場所では危ない場面が何度もあったがその度に勝利し、そのうちライバル力士

が我慢しきれず負けていったという状況だったのではないだろうか。

さて、スポーツのコーチングにおいて心技体は一つ一つを切り離して言及することはナンセンスであるとされる。なぜならば仮に無尽蔵の体力(体)を備えている力士がいたとしても、それを発揮するのは力士本人の意志の力(心)であるし、あるレベル以上の体力(体)を身につけた後でなければ獲得できない技術(技)が沢山ある。また体力(体)が豊富だと精神的(心)に余裕が生まれる。だから心技体は複雑に絡み合って統合され力士のパフォーマンスとして表れる。さらに、球技の得点系やタイムレース系のスポーツと違い、相撲は直接対戦相手に触れて行うものである。自分だけでなく、刻一刻と動きが変わる相手と自分の動作がお互いに直接的に影響を受け合う情報処理のスポーツでもある。「相手の動きが良く見えている」というフレーズがスポーツではよく使用されるが、相手の動きが良く見えるためには情報処理能力が高く、かつ自らの総合的な運動レベルが相手よりも上であることが必須である。なぜなら、自らの運動レベル以上の相手の動きは余裕をもって見ることはできないからだ。それを「格」が上ということもできるだろう。

他方、大相撲の力士のパフォーマンスを理解するためには正確な身体測定と多角的な視点における体力測定が必要である。しかし、現役の力士にそれを課すのは酷というものだ。なぜなら自分の体力の強み弱みを白日のもとに晒すことになるからである。プロではなくアマチュアの柔道やレスリングの選手でさえも、現役時は同じ理由から全力で体力測定は受けない傾向にある。体格は比較的容易だが体力は難しい。これは本論文の体力面の限界でもある。

(2) 大相撲力士の精神力の概要

相撲は、極めて簡潔でかつ短時間で決着する競技である。コンタクト系の格闘技(柔道・レスリング)と比較すると、その違いは大きく二つあげられる。

一つは試合場である。相撲の試合場は土俵と呼ばれる直径 4m55cm の円である。レスリングは直径 9m 円、柔道は 8～10m 四方の正方形であるが、それらに比べて圧倒的に面積が小さい。

二つ目は勝敗の決定方法である。相撲の勝敗は、得点の積み重ねではなく、相手を土俵の外に出すか、もしくは足の裏以外を土俵の土に付けることで決する。つまりサドンデス方式である。これに対してレスリングではフォール勝ち、柔道では一本勝ちのサドンデス方式を採用しているが、ポイントの積み重ねで勝負を決める方法を併用している。これは、レスリングと柔道がオリンピック種目であるので、観客が見てわかりやすく面白いという

要素を取り入れなければならなかったからである。それと同時に、試合時間を決めてスケジュール通りに試合進行する必要があったからである。しかし、相撲にはそれらの要素がない。以上の理由から、相撲は勝負がつくのが他の格闘技と比べて早いと同時に、勝敗の行方に意外性が出る競技であると言える。そして、このような競技特性上、相撲で勝ち続けるためには、身体的な逞しさだけでなく心理的な能力も必要とされる。

白鵬は、2016年1月31日現在、歴代1位の優勝35回と現役力士の中では飛び抜けた成績を残している。この事実からは、白鵬が体力面だけでなく、心理面においても優れた能力を有していることが想像される。では、白鵬は、どのような心理的な能力を有しているのだろうか。本論文では、この白鵬の心理的な能力について検討する。

徳永・橋本¹⁾は、スポーツ選手の競技場面での実力発揮に必要とされる心理的な能力が「精神力」といった抽象的な言葉で扱われていたことを問題として、「精神力」を「心理的競技能力」と呼び、その内容を明確にした。そして、それらを測定・評価するための心理的競技能力診断検査(Diagnostic Inventory of Psychological Competitive Ability for athletes : DIPCA)を開発した²⁾。さらに、その後も改良を続け、最終的にDIPCA. 3を開発した³⁾。

DIPCA. 3は、国内における競技スポーツに関係する心理検査の中で最も使用されている検査の一つであり、現在では、例えば、柔道⁴⁾や剣道⁵⁾など様々な競技種目の心理的競技能力の特徴が明らかにされている。そして、それらは指導者が指導場面で活用できる基礎資料としての活用が考えられている(例えば萩原ら⁶⁾)。しかし、これまで相撲の心理的競技能力は明らかにされていない。

そこで本論文では、白鵬の体力面と心理面の二つの要因について言及する。体力面は白鵬の身長と体重の縦断的推移から先行研究にある大相撲力士の形態、体力と比べて白鵬がどうであったかを明らかにする。心理面についてはDIPCA. 3を用いて相撲の心理的競技能力の一般的な傾向を明らかにした上で、白鵬のDIPCA. 3データとの比較・検討を行い、白鵬の「心理的競技能力」の特徴を明らかにする。また、白鵬が自分自身の心理的な能力をどのように捉えているかについて、DIPCA. 3データに関する面接調査を行い、白鵬自身の語りからDIPCA. 3データを補完し、白鵬の心理的な能力に迫ることとする。

2 研究方法

(1) 大相撲力士の体力の概要

日本の国技である相撲の力士は、相撲の歴史が始まってからずっと非常に大きな体格を

していることが知られている。この伝統は現在まで引き継がれており、一定以上の大型の体格を所持していることが要請されている。例えば大相撲の新弟子検査では身長 170cm 以上かつ体重 70kg 以上が必須であり、それらを満たさないものは大相撲の新弟子にはなることはできないことからわかる。

さて、相撲の競技の特徴を鑑みながらパフォーマンス向上に必要な要件を検討すると、巨大な体格とそれを動かすための大きな筋力が必要であることは容易に想像できる。そこで先行研究を調べてみると、大相撲力士の体格計測(身長および体重)に関する研究は、古くは三輪⁷⁾によって試みられてから今日に至るまで多くなされてきている^{8,9,10,11,12,13,14)}。また力士の肥満に伴う疾病等については数多くの研究報告^{15,16,17)}があるが、筋力や運動能力に関する体力科学的研究^{18,19)}は極めて少ない。なぜか？それは前述したように、大相撲の力士はプロであるから全員勝つことが求められるので、自分の体力を正しく測定して敵に知られることは、自分の武器を知られることに他ならない。引退した後ならばいざ知らず、現役力士が体力測定を全力で行うことはほとんどないと推測できるからである。正確な体力データが得られないのであれば、力士のパフォーマンスを正確に評価することはできない。

現在オープンソースで得られる力士のデータは、身長と体重のみである。しかし近年、アマチュア相撲や学生相撲の上位者がその成績を評価され、角界入りしているケースが多く見られる。アマチュア相撲ではスポーツ化が進み、伝統的な相撲のトレーニング(四股、テッポウ等)の他に相撲のパフォーマンス向上に必要な体力を科学トレーニングで補うようになっている。そのために体力測定を正しく定期的に行い、評価してフィードバックしている。従って、角界入りしたアマチュア力士達その後どこまで出世したのかを見ながら、彼らの体格と体力の関係を力士たちに当てはめればある程度の体力の評価は得られると考える。

(2) 心理面における研究方法

調査対象：白鵬(調査時の年齢 29 歳)、和歌山県 M 高校相撲部員 10 名、年齢 16.4 ± 1.3 歳(以下高校グループとする)、拓殖大学相撲部員 19 名、年齢 19.8 ± 1.1 歳(以下大学グループとする)、宮城野部屋大相撲力士 12 名、年齢 21.2 ± 5.9 歳(以下大相撲グループとする)であった。

調査日：白鵬は 2015 年 10 月 29 日、和歌山県 M 高校相撲部員は 2014 年 7 月 10 日、拓殖大学相撲部員は 2014 年 6 月 4 日、宮城野部屋大相撲力士は 2014 年 7 月 9 日であった。

調査内容：

①質問紙調査

相撲の「心理的競技能力」の特性について検討するために、徳永・橋本²⁰⁾が開発した DIPCA. 3 を実施した。本検査は、競技場面でスポーツ選手に必要とされる心理的な能力に関する 52 の質問で構成され、5 因子 12 尺度の得点から、総合的な「心理的競技能力」を測定することができる。具体的な因子、尺度は表 17 のとおりである。なお、各質問項目に対する回答は、「いつもそうである(90~100%)」、「しばしばそうである(70%)」、「ときどきそうである(50%)」、「ときたまそうである(25%)」、「ほとんどそうでない(0~10%)」の 5 段階である。

表 17 評価因子

因子	下位尺度	質問項目の例
競技意欲	忍耐力	苦しい場面でもがまん強く試合ができる。
	闘争心	大試合になればなるほど闘志がわく。
	自己実現意欲	自分の可能性へ挑戦する気持ちで試合をしている。
	勝利意欲	試合前には「絶対負けられない」と思っている。
精神安定・集中	自己コントロール能力	試合になると自分をコントロール(管理)できなくなる。
	リラックス能力	勝敗を気にしすぎて緊張する。
	集中力	落ち着いたプレイ(動き)ができなくなる。
自信	自信	プレッシャーのもとでも実力を発揮できる自信がある。
	決断力	ここという時に、思いきりのよいプレイ(試合)ができる。
作戦能力	予測力	作戦はうまく的中する。
	判断力	判断力はすぐれている。
協調性	協調性	チームワークを大切にする。

(出所)心理的競技能力診断検査(DIPCA. 3)より(トーヨーフィジカル製)

②面接調査

白鵬が自分自身の「心理的競技能力」をどのように捉えているかを検討するために、白鵬に直接面会し面接調査を行った。期日は 2015 年 10 月 29 日(於福岡市)であった。

注記

- 1) 徳永幹雄・橋本公雄「スポーツ選手の心理的競技能力のトレーニングに関する研究(4)－診断テストの作成－」『健康科学』10 卷(1988 年 8 月)、73-84 頁
- 2) 徳永幹雄・金崎良三・多々納秀雄・橋本公雄・高柳茂美「スポーツ選手に対する心理的競技能力診断検査の開発」『デサントスポーツ科学』12 卷(1991 年 6 月)、178-190 頁
- 3) 徳永幹雄「スポーツ選手に対する心理的競技能力の評価尺度の開発とシステム化」『健康科学』23 卷(2001 年 3 月)、91-102 頁
- 4) 徳永幹雄・細川伸二・西田孝宏・高橋幸治・小野沢弘史・村松成司「全日本柔道選手の心理的競技能力に関する研究」『柔道科学研究』3 卷(1995 年 3 月)、9-12 頁
- 5) 植田史生・福本修二・吉田泰将・石手靖・望月康司・大嶽真人「剣道における心理的競技能力調査について」『慶応義塾大学体育研究所紀要』44 卷(2005 年 1 月)、25-33 頁
- 6) 萩原正大・米倉礼子・藤原昌・千足耕一「セーリング競技における国内一流選手およびユース選手の心理的競技能力」『スポーツパフォーマンス研究』6 卷(2014 年 4 月)、51-61 頁
- 7) 三輪徳寛「力士測定の成績」『人類学雑誌』4 卷 35 号(1989 年 12 月)、120-122 頁
- 8) 田中喜代次他「新弟子力士の形態および身体形成」『体力科学』28 卷(1979 年 9 月)、257-264 頁
- 9) 香原志勢「相撲力士の人類学」『遺伝』19 卷 11 号(1966 年 1 月)、16-21 頁
- 10) 森嶋久・長田宗徳・浅見正彦・伊藤国子「スポーツ(相撲)による体型変化について」『民族衛生』

- 26 卷 4 号(1960 年 7 月)、365-369 頁
- 11) 須田昭義「相撲力士の体格」『人類学輯報』18 卷(1957 年 11 月)、259-286 頁
- 12) 須田昭義「相撲新弟子の将来性について」『人類学雑誌』66 卷(1958 年 1 月)、227-240 頁
- 13) 鈴木文子「Sheldon の三角図形法による体型及び体格の判定に関する研究 第 2 編各種スポーツマンの体型と体格」『体力科学』7 卷 1 号(1957 年 7 月)、19-39 頁
- 14) 吉田章信「力士の身体測定成績(第一報)」『体育研究』5 卷(1937 年 10 月)、1-11 頁
- 15) 入江実・葛谷健「力士および肥満者の糖代謝」『糖尿病』12 卷 5 号(1969 年 9 月)、311-317 頁
- 16) 上井一男・志場正光・林光「力士年寄の糖尿病」『糖尿病』12 卷 5 号(1969 年 9 月)、318-325 頁
- 17) 仁木豊「力士の糖代謝」『糖尿病』12 卷 5 号(1969 年 9 月)、307-310 頁
- 18) 小川新吉・古田善伯・山本恵三・永井信雄・中嶋英昭「相撲力士の体力科学的研究(新弟子の体格・体力に関する研究)」『体力科学』21 卷(1972 年 6 月)、118-128 頁
- 19) 小川新吉・古田善伯・山本恵三・永井信雄「相撲力士の体力科学的研究(その 2)(関取の体力と発達)」『体力科学』22 卷(1972 年 6 月)、45-55 頁
- 20) 徳永幹雄「スポーツ選手に対する心理的競技能力の評価尺度の開発とシステム化」『健康科学』23 卷(2001 年 3 月)、91-102 頁

第 3 章 本論(考察編)

第 1 節 食生活をめぐる考察

1 モンゴルの食が胎児や乳幼児の身体づくりに与える影響

モンゴルの乳幼児は抱いてみると、日本の乳幼児に比べよりずっしりとした重みが伝わってくるという。モンゴルの人々は乳製品からカルシウムを含む多くの栄養素を日常的に摂取していることから、胎児は母親の胎内でカルシウムを十分に吸収できると考える。モンゴルの乳幼児は、母親の胎内にいるときから、骨格形成に必要なカルシウムをはじめとした養分補給が的確に行われ、身体の各部位が頑丈に形成されると推察できる。白鵬は、モンゴル相撲横綱の父親と医者である母親の間に 5 人兄妹の末っ子として 1985 年 3 月 11 日にウランバートルで誕生している。父親の頑健さは言うに及ばず、母親の家系もモンゴル相撲と無縁ではなく、母親の曾祖父及び祖父がモンゴル相撲の力士である家系に白鵬が誕生していることから、白鵬は頑強な骨格を形成して誕生したと考える。

モンゴルでは母乳で育てることを基本とし、卒乳は 3 歳という。生後 4~6 か月後、モンゴルの乳児が最初に口にする離乳食はタラグ(ヨーグルト)だという。このモンゴルのヨーグルトは食べやすいだけでなく整腸作用があり、栄養価も高い。やがて、幼児は食事とおやつを兼ねてアロール(乾燥チーズ)をおしゃぶりの代替として食べるようになるという。このアロール(乾燥チーズ)は、堅い食材であることから歯並びを整える効果があるほか、優れた栄養素を摂取することができる。タラグ(ヨーグルト)やアロール(乾燥チーズ)には乳酸菌や酵母が含まれており、これら微生物が体内に入ると腸内細菌叢等に良い影響を与えている。また、離乳食には、牛乳で炊いた粥に、砂糖を混ぜるか、ウルムやツツギー(ワークリーム)を添えた食べ物を摂取するなど、モンゴルで誕生した子供は乳製品の摂取を

常とする食生活が始まる。白鵬も慈愛に満ちた母親の手作りの「白い食べ物」に馴染むとともに、草原の生活の中で「白い食べ物」を通して充実した身体づくりができたものと推察される。特に、白鵬が生後6か月の頃、発熱が続いたことから、父親の兄と妹が住む草原において転地療養し、毎日、搾り立ての牛乳を飲むことを日課として約70日間過ごしたことがある¹⁾。この草原での「白い食べ物」と生活環境が白鵬の発熱を解消し、元気を取り戻すことができたのである。

2 草原での生活体験が身体づくりに与える影響

モンゴルでは子供のとき草原(牧畜地域)で過ごした経験をもつ人が多い。実際に、現在各年代の人が都市と草原(牧畜地域)の間で季節的に移動していたことに関する調査報告²⁾がある。都市部に住むモンゴルの子供達は、草原にある親の実家や親戚のゲルで夏休みを過ごすという。子供達が体験する草原(牧畜地域)での生活では、草原の大人たち、兄姉や従兄などを含む多くの年長者の指導のもとで、家畜の世話と家事をはじめとした草原(牧畜地域)での生活技術を総合的に学ぶことができる。都市に住む子供達も、草原で生活技術を体得し、「白い食べ物」を中心に摂取する食生活を体験している。白鵬は、夏季における乳幼児期から草原での生活を通して「白い食べ物」に親しみ、草原での生活技術を体得する中で健康な身体づくりを補完した。

3 乳製品摂取が身体づくりに与える影響

(1) タラグ(ヨーグルト)の効用

モンゴルでは、夏になると家畜の泌乳量が増えることから、搾乳量が増え、一年で最も乳製品の豊かな夏季を迎える。モンゴルの遊牧民には「冬の間の肉食で疲れた胃を乳製品によって白くする」という伝承がある。ここで「白くする」は胃を「休ませる」または「掃除する」と同義である。

乳酸発酵の進んだ乳は、固形成分としてチーズを抽出するための原料であると同時に、そのものが人びとにとって食料でもある。タラグ(ヨーグルト)を毎日摂取すると、腸内細菌のうち健康作りに役立つ菌(善玉菌)が増え、便秘を解消し、免疫力を向上させるなどして風邪を引かないなどの効用がある。

タラグ(ヨーグルト)には蛋白質(必須アミノ酸は牛乳より多い。)、ビタミン A、B₂、カルシウム、マンガンなどを含んでいる。また、乳酸菌の働きで蛋白質や脂肪が分解され、消化吸收し易い成分に変化している。タラグ(ヨーグルト)に含まれる乳酸菌は、腸内のビフィズス菌などの有用菌を増加させ、整腸作用、大腸ガン予防、腸内のウイルス抑制因子(イ

ンターフェロン)を増加させ、ガンやインフルエンザの抑制効果があるといわれている。こうした微生物学的な機能や医学的な効用を遊牧民たちは経口摂取の長い経験から獲得してきたことが推察される。このほか、タラグは日焼けによる皮膚の炎症を鎮静するなどの効用があるという。

一方、「便秘の時はシャルオス(ホエー)を飲むとよい」と言われている。シャルオスは、腸管では吸収できない乳糖含有量が多いため、腸の動きを活発化させる働きがあることを利用している。また、火傷や虫刺されにはツツギー(サワークリーム)が塗られるなど、モンゴルの乳製品は、薬の役割を一部果たしているといえる。モンゴルでは、微生物の働きを利用して乳中の各種成分を分離するという方法で製造されているため、それぞれの成分がもつ機能を生かしたり、微生物のもつ機能を生かしたりすることができる。

日本では、厚生労働省が身体に良い働きをする食品を「機能性食品」として認可しているが、草原では紀元前から乳に関する機能性食品が利用されてきた。発酵した乳製品は、微生物の働きによって乳糖が原乳の半分程度にまで減少していることから、乳糖不耐性であるモンゴル人にとっても好都合な食品となっている。

白鵬は乳幼児の頃から、タラグ(ヨーグルト)をはじめとした発酵食品の効用を十分に享受してきた。

(2) 微量成分の効用

エーズギー、アロール及び馬乳酒の微量成分の分析結果について石井らの報告がある³⁾。近年、栄養学の進歩に伴って、微量元素が重要な働きをしていることがわかってきた。中でも、亜鉛は不足すると口内炎、味覚障害や皮膚障害などが生じるといわれている。また銅や鉄なども重要で、銅が不足すると白血球異常が生じ、鉄が不足すると鉄欠乏性貧血になる。他にセレン、マンガン、モリブデン、コバルト、ヨウ素なども人間にとって重要な微量元素であることが報告されている。これらの微量元素は身体によって適正量に調整されており、多すぎても少なすぎても不適切であることがわかってきた。三大栄養素だけが

表 18 乳製品の微量成分値

	Na	Ca	P	Fe	K	Mg	Zn	Cu	Se
	mg/100g						µg/100g		
エーズギー	277	1,166	877	12.4	1,063	110	3,062	56	検出せず
アロール	83	295	512	5.0	362	31	1,959	56	検出せず
市販ゴーダチーズ*	800	680	490	0.3	75	-	-	-	検出せず
馬乳酒	13	70	37	0.2	51	5	284	10	検出せず

* 食品成分表 5 訂から

石井智美、鮫島邦彦「家畜に依存するモンゴル遊牧民の食事の雪害による変化」『日本栄養・食糧学会誌』Vol. 57、第 4 号(2004 年)より引用

摂取すべき栄養のすべてではない。微量元素は身体にとって不可欠なものが多いのは当然であり、それらの機能がようやく明確になってきた。エーズギーとアロールの場合、カルシウム、リン、鉄、カリウム、マグネシウム、亜鉛が豊富で、これらの微量成分は栄養摂取を助ける働きをしているという。中でも亜鉛の含有量が多いことは、摂取可能な食材が限られているモンゴルにおいては、味覚を認識するうえで不可欠な成分であり、肉の微妙な風味を認識する能力を支えていると考える。

乳製品には、微生物による代謝産物が含まれているほかに、家畜の食べた草の違いが微妙に乳質に影響している。つまり、乳加工は、モンゴルにおける土壌、気候、植生など連続した物質循環の中で絶妙に営まれてきたといえる⁴⁾。

白鵬は好き嫌いが極めて少ないが、この体質はモンゴルでの食生活を通して獲得したものであり、入門後の相撲部屋の食事や日本の食習慣を率直に受け入れることができた基盤は「白い食べ物」などからの各種ミネラルの摂取が関与しているものと考えられる。

(3) アイラグの効用

アイラグ(馬乳酒)の発酵には、モンゴルの清浄な空気と、経験的に選抜されてきた複数の菌の能力が大きく関与しており、乳酸菌株は15℃でも旺盛な菌数の増加、酸生成を示すとの報告がある。モンゴルの冷涼な気候に適応した結果である。アイラグの大量飲用により大量の菌体が腸管に入ることから、コレステロールの吸収阻害の働きをしている可能性があるほか、菌体内外の遊離アミノ酸、菌体の細胞壁の浸透性、腸管免疫など、微生物の成長を刺激する見地から菌体の機能性について注目すべき点が多い。大量に摂取された菌体の役割として食物繊維の摂取が少ないモンゴルで、乳製品中の乳糖と共に、菌体が腸管内の老廃物を吸着し、体外に排出している可能性がある。これら菌体の効果が微弱なものであっても、経口で摂取する食品がこのような機能性を持つことは大きな意味がある⁵⁾。

アイラグには、他の乳製品を卓越する薬効があることが知られている。その薬効には、血中脂肪の減少、免疫効果、食欲増進・消化機能の活性化、腸内細菌叢の調整、肺結核の予防治療などがあり⁶⁾、モンゴルの人々は乳児から老人に到るまでこのアイラグを十分に摂取していることに注目したい。白鵬が生後まもなく、体調を崩した際、両親は心配をして、草原の生活に触れさせる試みをしている。このときのアイラグは、発酵半ばの乳酸菌や酵母さらにはその代謝産物が薬として働いたことが推察される。

4 入門後の食生活が体づくりに与えた影響

白鵬は入門当初(2000年12月～)は、体づくりに専念し、ちゃんこを食べ、牛乳を多量に摂取する生活が続き、2001年3月の新弟子検査に合格する体格に成長した。その後、2004

年の十両時代から新入幕の時期に、宮城野部屋の近くにモンゴル系料理店ができ、この料理店に通うようになってから、急激に体重が増加している。その急激な太りすぎが「睡眠時無呼吸症候群」を発病し、呼吸を容易にする医療器具(CPAP)を用いて十分睡眠を確保できるようになった⁷⁾。

白鵬は結婚後の大関から横綱に昇進する時期、多くの相撲人が不足しがちなマグネシウム(Mg)、亜鉛(Zn)等のミネラルや硫黄(S)の摂取をトレーナーから奨められた。そこで、これまでの肉や脂から、魚肉を多くし、穀物や豆類、野菜を豊富に摂取する食事内容に変更している。また、サプリメントの服用もしている。ビタミン類やミネラル及び硫黄(含硫アミノ酸)の効用及び宮城野部屋の食事内容からその補給に関与している食材について表 19 にまとめた。ビタミンは、副腎皮質ホルモンと似た働きをし、神経を落ち着かせ、脳細胞を活性化してくれるといわれている。また、ミネラルは、神経・筋肉を機能させるためには欠かせない成分である。こうしたことから、ビタミン・ミネラルが不足していると、脳の働きが悪化し、気分の浮き沈みがあり、うつ状態になりやすいといわれている。ビタミンやミネラル類を補給するとしても、一種類だけの摂取ではなく、バランスのとれた食生活を心がけ、食事を通してビタミンやミネラル等を偏りなく補給することが必要といわれている。白鵬は魚肉、穀物、豆類、野菜の摂取を多くすることで、必要な栄養素を万遍なく補給できた。

表 19 宮城野部屋の食事から摂取できるビタミン類、ミネラル、硫黄の主な働きとその食材

種類	体内での主な働き	ちゃんこ鍋等の食材	
ビタミン類	ビタミン B ₁	エネルギー生産の援助、疲労の蓄積防止、中枢神経・末梢神経の機能維持	豚肉・鶏肉・牛肉、豆腐・油揚・納豆、ダイコン
	ビタミン B ₂	皮膚・粘膜の正常維持、エネルギー代謝に関与、成長の促進に関与、過酸化脂質の分解に関与、他のビタミンの生合成に関与	つみれ、鶏肉・牛肉、牛乳・乳製品、
	ナイシン	エネルギー生産の補助、脂質の代謝の促進、多くの酵素反応に関与、アルコール分解作用、抗酸化作用	つみれ、鶏肉
	パントテン酸	エネルギー代謝に関与、脂肪酸合成に関与、善玉コレステロールの増産、抗ストレス作用	つみれ、鶏肉、牛乳・乳製品
	ビタミン B ₆	蛋白質の代謝に関与、蛋白質のエネルギー代謝、神経細胞の興奮を抑制、動脈硬化の予防	つみれ、豚肉、ニンニク、豆腐・油揚・納豆
	ビタミン B ₁₂	核酸の合成、赤血球の合成に関与、ホモシステイン濃度の低下、エネルギー・脂質の代謝に関与、神経機能の維持・改善	つみれ、レバー
	ビオチン	ブドウ糖の再合成補助、核酸の合成の促進、皮膚形成に関与、	つみれ、レバー、豆腐・油揚・納豆、牛乳・乳製品
	葉酸	赤血球の合成に関与、成長の維持、粘膜の健康維持、動脈硬化の予防、ガン予防	ニンニク・ニラ・ネギ、豆腐・油揚・納豆、レバー、キクラゲ
	ビタミン C	コラーゲンの生成援助、老化・病気から体を保守、免疫力の向上、発ガン・動脈硬化の防止、抗ストレスホルモンの生成に関与、アルコールの分解に関与、肝臓の解毒作用に関与	ネギ、ジャガイモ
主要	マグネシウム(Mg)	エネルギー代謝を援助、蛋白質の合成に関与、骨の構成成分、細胞膜内外の濃度勾配維持、虚血性心疾患の予防	豆腐・揚げ、昆布、つみれ、煮干し、キクラゲ

ミネラル	リン(P)	骨や歯を形成、核酸の成分、エネルギー代謝に関与、ビタミンB群の働きを補助、体液のpH値や浸透圧の調整	煮干し、つみれ、牛乳・乳製品、豆腐・揚げ・納豆、豚肉・鶏肉・牛肉、キクラゲ
	カリウム(K)	体液の主要成分、生体内での情報伝達に関与、浸透圧の調節 高血圧の降圧作用、酸塩基平衡の維持	野菜、ジャガイモ、豆腐・揚げ、煮干し、キクラゲ
	カルシウム(Ca)	蛋白質の合成に関与、骨の構成成分、細胞膜内外の濃度勾配維持、興奮や緊張を緩和、筋肉の収縮、血液の凝固	牛乳・乳製品、煮干し、昆布、豆腐・揚げ・納豆、ニラ・人参、キクラゲ
微量ミネラル	鉄(Fe)	不足に備える貯蔵鉄、エネルギー代謝に関与、筋収縮に関与、肝臓の解毒作用に関与	豆腐・油揚げ・納豆・味噌、昆布、ニラ・人参、キクラゲ、ニンニク
	亜鉛(Zn)	多くの酵素の組成に必要、細胞分裂に関与、コラーゲンの生成に関与、味覚機能の維持、抗酸化作用、生殖機能の維持、成長に不可欠、アルコール代謝、免疫機能・血糖値の維持	ご飯、豆腐・揚げ・納豆、煮干し、つみれ、豚肉・鶏肉・牛肉
	セレン(Se)	抗酸化作用、甲状腺の生理活性の向上	煮干し、つみれ、豚肉・鶏肉・牛肉、キクラゲ
	モリブデン(Mo)	酸化酵素の補酵素、糖質・脂質の代謝を援助、貧血の予防	豆腐・揚げ・納豆・味噌、ご飯、レバー
硫黄(S)** (含硫アミノ酸)	糖質・脂質の代謝の補助、貧血の予防、腎臓の血液ろ過・有害物質の除去	豆腐・揚げ・納豆、ご飯、牛乳・乳製品、豚肉・鶏肉・牛肉、つみれ	

本表は取材した資料・情報から執筆者が作成

* 舌にある味蕾細胞の中の味細胞は新陳代謝が活発で30日で新しい細胞に生まれ変わる

** 硫黄(S)はミネラルに属さないが、含硫アミノ酸を通して摂取できる必要な栄養素

注記

- 1) 白鵬翔『相撲よ!』角川書店、2010年、54-55頁
- 2) 風戸真理「草原と都市を往還するノマド:20世紀モンゴルにおける居住地と職業選択」楊海英編『中央ユーラシアにおける牧畜文明の変遷と社会主義』アフロ・ユーラシア内陸乾燥地文明研究叢書Vol.8(2014年)、156頁
- 3) 白井智美・鮫島邦彦「家畜に依存するモンゴル遊牧民の食事の雪害による変化」『日本栄養・食糧学会誌』第57巻、第4号(2004年)、173-175頁
- 4) 小長谷有紀『世界の食文化3モンゴル』東京印書館、2005年、144-145頁
- 5) 石井智美「モンゴル国の伝統的な発酵乳製品に関する微生物学的検討」『Milk Science』Vol.50、No.1(2001年)、28-29頁
- 6) 小長谷有紀「モンゴルの馬乳酒治療」石毛直道編著『モンゴルの白いご馳走』チクマ秀版社、1997年、224-233頁
- 7) 白鵬翔『相撲よ!』角川書店、2010年、131頁

第2節 教育をめぐる考察

1 仮説

第2章では、モンゴルの歴史、とりわけ教育分野についてモンゴルの学校教育制度と教育環境の実情を明らかにするとともに、家庭教育、草原でのゲル生活からの影響を明らかにするためにモンゴルでの現地ヒヤリング調査を実施し、白鵬に関与した多くの関係者によるコメントを得た。それらを分析、考察し、白鵬の知性、教養を育んだ要因を明らかにするために以下のような仮説を立てた。

仮説：学校での学習環境は白鵬の知性や教養面の成長を促す大きな要素にはなっていない。家庭教育、特に草原での生活、日々両親から受けた薫陶、両親の教育観こそが白鵬の感性と能力を大きく育んだ。両親家族から十分な愛情を注がれ精神的に安定していたダヴァ

は、興味あることのみに没頭できる環境に育った。同時にアスリートとしてモンゴル相撲最強の父と外科医の母によって政界にも通じる親族の流れを持ついわば名門の家庭に育ち、留学する姉たちの成長を見ながら将来の夢(バスケットボール選手)を抱いた。しかし、相撲という世界に一歩足を踏み入れた日本の摂津倉庫¹⁾での試練によって、父親の手前このままでは終われないという強い闘争心が醸成されたことにより自身を奮い立たせ、関取になるまで帰国しないという決意を持って相撲道に精進する。そこでの知恵と研究熱心さは、興味あることに没頭できる環境に育ったことと、一度足を踏み入れた相撲の世界で評価されなければ親に顔向けできないという、名家に育った白鵬の強い思いに支えられている。何よりもモンゴルの家庭教育を代表するゲル生活で学んだ「生の尊厳」を支配する規則や行動、態度への関心、これこそが目標達成のためには緻密な分析と反省を怠らない白鵬の知性と熱心さの根源なのではないか。

2 ヒヤリング調査の分析と考察

(1) 学校教育が本人に与えた影響(恩師・友人の記憶から)

先にも述べた通り、当時のモンゴルでは生徒数に対する学校数が不足しており、モンゴル市内の初等教育現場においても2部制で展開されていることが通常であり、ダヴァは午前中は授業を受け、午後からは部活動(バスケットボール)等に没頭した。当時の担任教諭、授業を担当した教諭、同級生たちのヒヤリング調査結果を分析すると、ダヴァが学業面で突出した能力を見せたことはほとんど記憶に無いようで、聞き取り調査の中では誰からも言及は無かった。性格面ではやんちゃな性格ではなく、どちらかと言えば無口。考えてから意見や考え方を短い言葉で話していたというのも共通した印象として残っている。照れ屋でもあり発する言葉も少なめだったダヴァだが、スポーツ大会等ではリーダー的存在として周囲に指示を発し、大いに活躍していたことがわかった。興味を持ったこと、好きなことに関わっている時は、水を得た魚のように輝いていたことが窺える。つまり、白鵬が初等教育課程での学習生活で突出した知的能力を発揮し、幼少期から読書を好み、そこから教養と知性を育んだと思われる実態は、後述する1事例のみが該当するだけで、他にはみられなかった。

ヒヤリング調査を性格面から分析すると、物静かな反面、スポーツ大会ではその存在は突出しており、指導にあたった全ての教師、クラスの友人たちも「無くてはならない存在だった」と述べる一方、粗野な行動をとることが無く、力強さとともに素直で優しさが際立っていたと述べている。また、女子との会話は羞恥心が強かったのか苦手のような

と同級生は述べている。学校生活において友人関係がダヴァに与えたと思われる影響は特段見当たらない。

しかしながら、来日直前となる最後の試験において、ダヴァは歴史の答案を誰よりも早く提出し優秀な成績を修めていることを聞き取り調査の直後に思い出した級友がいた。これについては、白鵬自身の記憶にも鮮明に残っており、白鵬と面談した折に証言を得ている。白鵬は、「何故かわからないが、突然、歴史に興味を持った。誰よりも早く答案を出して、やった、という感じだった」と述べている。周囲が驚くほど学生生活最後のダヴァは歴史に強い興味を示した。興味関心があることに集中するダヴァの気質が形となって現れた瞬間を恩師、級友の記憶から明らかにすることができた。

(2) 両親及び兄弟から受けた影響

親戚の中には外交官が多く、在日本大使館員に白鵬の親戚がいる。母の友人にも科学アカデミー総裁やモンゴルアカデミーの関係者がおり、幼少のダヴァの周りには知識経験が豊富な人たちがいた。モンゴル貴族の流れを汲む家系であることから、しつけはしっかりしており、「よく考えてしゃべりなさい。頭に飛んできたことをすぐに出すな。整理をして話せ」と指導されていたことを兄、姉たちは口にした。少年ダヴァにも少なからず影響があったことは簡単に推測できる。

しかしながら、白鵬の知性を育んだ欠くことの出来ない要因のひとつ、それは両親、家族、特に母親の深い愛情が十分に注がれたことではないだろうか。知性豊かな母はやさしく、ダヴァは一見甘えん坊に育つ。長兄とは16歳も離れていたこともあり、兄はダヴァにとって常に尊敬できる存在であり、兄もまたダヴァを可愛がった。長女は大変な勉強家、努力家であり、2人の姉たちもまた、歳が離れているダヴァをととても可愛がった。ダヴァのおむつ交換は姉たちが進んで行った仕事だったようだ。ハローによる「ハードマザーとソフトマザーの実験結果」²⁾によれば、人は必要な時期に適切な保護と教育を与えられないと、本来の発達を遂げることができず、後で取り返すには非常な努力を要することが明らかになっている。母親の愛情と養育が、幼少期に必要な安心感や社会性の素地を養う上で決定的な役割を果たしているのは言うまでもない。また、ウィニコット³⁾は、子どもの健全な自我の基盤形成に、母親の全身全霊をこめた愛情が非常に大切であると説いている。彼は、子どもの成長に抱っこが果たす役割の重要性に注目し、「抱っこ」が「共に生きる」原点であり、他者との関係を築く出発点であることを強調した。ダヴァは日本に渡る前まで両親と川の字で寝ていたほどで、両親から十分な愛情を注がれていたことが心理学的側面から

みても知性と人間性を育む上で非常に重要かつ大きな要因だったことがわかる。

家庭環境において加えて注目したいのは父の兄の孫の存在である。第2章第2節で触れた通り、彼は、夏の間、白鵬一家が訪れる草原で暮らしていたが、ウランバートル市内の大学に進学しようとした際、白鵬の母親から「我が家で一緒に暮らしましょう」と声をかけられ、様々な面で大学生活の援助を受けた。母親は、単に親類を実家で世話しようとしたのではなく、ダヴァより少し年上の彼と一緒に生活することで、ダヴァの指導や援助をお願いできると考えていた。中等学校のバスケットボール部に入部したダヴァが大きな体格の先輩にしごかれるのではないかと心配した母親は、彼に部活動の時間、ダヴァを見守って欲しいとお願いしたほどである。過保護とも思える心配りだが、モンゴル相撲の勇者である父親の影響は大きく、周囲も期待を寄せてダヴァを見ていた反面、経済的にも恵まれていた彼の家庭環境を羨ましく思う者がいても不思議ではない。筆者は、それを危惧した母親の配慮かと想像していたが、実は違った。息子であるダヴァの体格は決して大きくなかったことが母親にとって大きな心配要因であった。白鵬自身が述べているように、父親には大きな威厳があり白鵬にとっては絶対的存在であり、心から尊敬する存在でもあった。また、母親や姉たちによると、白鵬が幼少の頃、モンゴル相撲に強い興味を持ったものの、父親は白鵬の将来的成長を見越し、成長過程である幼少期の白鵬の怪我等を回避するためモンゴル相撲をやらせなかったようだ。このことは、白鵬の肉体的成長への配慮であると同時に、両親及び家族(家庭環境)が成長過程における適期教育を強く意識していたからだと言えよう。この教育観はモンゴル相撲で5連覇、通算6回制覇を果たした英雄ともいえる父親を持つダヴァがバスケットに没頭できた所以でもあり、チームプレーヤーとして俊敏な判断が要求される個人競技ではないバスケットボールで様々な学びを深めることが出来た要因でもあろう。ダヴァは、溢れんばかりの愛情を全身に受け、精神的に安定した状態の中、身体的成長過程を配慮されながら最高の適期教育を受けてきたのだ。その適期教育とは、関取になるためのものではなく、大人になった時に父に並び、また超えることが出来るモンゴル相撲の選手として大成すべく配慮されたものであった。

3 学校教育とモンゴルでの環境が人格形成に与えた影響

(1) 変革期にあった学校教育

1991年、モンゴルは複数政党による民主政治へと移行した。また、禁止されていたチンギス・ハーン崇拝や仏教への信仰も許され、経済面では市場経済が導入されて、資本主義である西側諸国との関係も強化されるようになったことは先に述べた。1990年から1991

年は、まさに 1985 年に生まれである白鵬が小学校に入学する時期と重なり、学校教育現場でも社会主義から資本主義への移行に伴った教育観の混乱があったと考えられる。このことから、白鵬自身が社会主義独特の厳格さを残す学校教育環境に育ったことは、容易に推測できる。しかしながら、幼少期のダヴァにとってはイデオロギーの影響を大きく受けることは無かったと言える。これは、白鵬自身の言葉、現地でのヒヤリング調査の分析からみても、全く影響は見られなかったからである。少年ダヴァの興味関心はスポーツ分野にのみ傾注されていたようだ。

しかしながら、ここで重要なのはチンギス・ハーン崇拜や仏教への信仰が許された時代に白鵬は初等教育を受けることができたことである。来日直前、歴史に強い興味関心を持ったダヴァが猛烈に歴史を学んだことは先に述べた。白鵬はチンギス・ハーンに始まるモンゴル国家の歴史的変遷に精通しており、同時にチンギス・ハーンを尊敬している。「スーホの白い馬」を初めとする民話や寓話にも詳しく、そこから様々な教訓や教えを学んでいたことは明らかである。旧体制下での教育環境であればチンギス・ハーン崇拜は許可されておらず、モンゴル国民であることを自負することも公には難しかったに違いない。その意味においては、時代の変化は幼少期のダヴァの学びにモンゴル人としての誇りを育むことを許容し、同時に自他を守り共存する自然観を智慧とするモンゴル人としての考え方を正統的な糧とすることも可能にした。来日直前、歴史に強い興味を持ち、自分でも驚くほど勉強することができたのは、チンギス・ハーンに対する畏敬の念があったからだと言える。

(2) 友人たちとの関係(バスケットボール仲間、近隣の幼馴染)

一見甘えん坊に育ったと前述したが、ダヴァの負けん気の強さが人並みはずれていたようだ。父親の姿を見て育ったことも欠かせない大きな要因であろうが、とにかく勝敗にはこだわりが強かったようで、近隣の友人たちとバスケットボールをしていた時にも、負けると何度も挑み勝つまでやめなかったという。近隣の友人たちは同年齢というよりは少し年齢が上の友人が多く、ダヴァは年上の友人と遊ぶのが好きだった。年上に囲まれた環境で過ごしたことが、年上が出来た事を自分も出来るようになりたいという思いに繋がり、ダヴァの向上心を高めていった要因のひとつであると考えられる。また、この当時の仲間を日本に招待するなど、白鵬は仲間をととても大切に。「友人たちとの時間は横綱である私がダヴァに戻れる時でもある」と白鵬が述べているが、友人たちと一緒に過ごす時間における序列は昔のままで、白鵬が自分を自慢するようなことは全くない。関取になるまで帰国しなかった白鵬が何年もの歳月を隔てて再会できた友人たちとの時間は、白鵬が原

点に還ることができる貴重な時間でもあり、お世話になった方への礼儀と恩を欠かさない白鵬の人格と品格を証明する事例ともなっているといえよう。

注記

- 1) 来日した際、相撲の合宿を行った場所
- 2) サルの母親の人形を2体、針金などの金属で形成。どちらも胸からミルクを飲むようにしたが、一方にだけやわらかい布をかぶせた。つまり金属むきだしのハードマザーと、やわらかな肌触りのソフトマザーの2体を用意した。そこに生まれたての子ザルを入れると、ハードマザーには寄りつかず、ソフトマザーにばかり抱きついた。それまでアメリカの心理学者シアーズは、赤ちゃんが母親に愛着を持つのは乳を飲ませてくれるからだと言っていた。生きていくのに欠かせない生理的欲求を母親が満たしてくれるために母親に愛着を抱くようになると考えられていたからである。これに対してアメリカの霊長類研究所所長ハーロウが反論し、ハードマザーとソフトマザーの実験を行った。ハーロウ(浜田寿美男訳)『愛のなりたち』ミネルヴァ書房、1988年
- 3) ドナルド・ウッズ・ウィニコット(Donald Woods Winnicott)は、イギリスの小児科医、精神科医、精神分析家

第3節 白鵬の日本語

1 話者の性格印象を形作るパラ言語情報

2014年11月の九州場所で32回目の幕内優勝を果たした白鵬は、「昭和の大横綱」大鵬の持つ史上最多優勝記録に43年ぶり並んだ。平成以降に横綱に昇進したのは旭富士、曙、貴乃花、若乃花、武蔵丸、朝青龍、白鵬、日馬富士、鶴竜の6人であるが、白鵬は優勝回数、勝率ともに一頭地抜き出ている。まさに「平成の大横綱」としての評価を固めつつある。戦績からすると朝青龍も白鵬に次ぐのだが、朝青龍には毀誉褒貶もあり、大横綱という評価には至っていない。この両者の評価の差には、相撲の戦績だけでなく、二人のパーソナリティーも大きく影響しているとおもわれる。ここでいうパーソナリティーとは、本人の本当の性格、人格が実際にどうかということではなく、人々にどう受け取られているかという対人的な性格印象である。それでは、対人的な性格印象はどのように決まるのだろうか。

人と人が出会ったとき、互いに自らの意図を相手に伝え、また相手の意図を受け取ることによってコミュニケーションは成立する。この意図を伝える／受け取るために用いられる媒体には、言語情報、パラ言語情報、非言語情報の3種類がある。言語情報は、ことばの意味そのものである。パラ言語情報は、言語情報をどのように表すかで伝わる情報である。声の大きさ、高さ、間などから話者の意図や感情を読み取るならば、それはパラ言語情報による伝達が行われたことになる。大きな声でまくし立てている人がいれば、その人が興奮状態にあると判断するであろうし、小さな声でぼそぼそと話していれば意気消沈状態だと判断するであろう。一方、非言語情報は、表情やジェスチャーなどより身体的な情報である。コミュニケーションと言語情報による部分が大きいと思われているが、

実は8割が言語情報以外により伝わるとする説もある¹⁾。つまり、どのようなことばで伝えるかは確かに重要であるが、その伝え方、つまり音声表現や身体表現がそれ以上に重要なのである。内田照久²⁾によれば、聞き手は話者の音声から、

- ① 個人についての情報：誰なのか？
- ② 性格についての情報：どんな人なのか？
- ③ 情緒についての情報：どんな気持ちでいるのか？

の3相で情報を獲得し、話者についての印象判断をしている。次項以降では、白鵬の発話音声解析し、そのパラ言語情報が人々に、特に白鵬の性格と情緒についてどのような印象を与えているのかを検証する。

2 白鵬の発話の特徴

表20 白鵬・朝青龍・鶴竜の発話解析

			モーラ 数 (拍)	発話時 間 (秒)	ポーズ 回 数	ポーズ 時 間 計 (秒)	ポーズ 割 合 (%)	発話 速 度 (拍/秒)	調音 速 度 (拍/秒)	ピッチ 中 央 値 (Hz)	平均 ピ ッチ (Hz)	Voice Break 率 (%)
白鵬	H1	HT02	28	5.16	2	0.55	10.7	5.43	6.07	129.3	131.2	33.0
	H2	HT03	36	5.95	3	1.02	17.1	6.05	7.30	119.9	150.9	36.1
	H3	HT04	32	5.05	3	1.02	20.2	6.34	7.94	113.2	125.3	44.6
	H4	HT11C	122	22.89	9	6.73	29.4	5.33	7.55	96.0	104.0	52.7
	H5	HT14C1	57	7.87	3	1.51	19.2	7.24	8.96	98.9	110.1	43.2
	H6	HT14C2	91	13.56	6	3.85	28.4	6.71	9.37	91.7	102.7	52.1
	H7	HT24C1	47	8.87	4	2.68	30.2	5.30	7.59	110.7	111.0	48.1
	H8	HT24C2	35	5.21	3	1.50	28.8	6.72	9.43	97.1	97.9	50.2
	H9	HT24C3	42	5.29	1	0.18	3.4	7.94	8.22	99.3	100.6	23.2
	H10	H Intv01 3	66	12.03	6	2.66	22.1	5.49	7.04	92.0	121.9	55.0
	H11	H Intv01 4	31	2.87	0	0.00	0.0	10.80	10.80	109.3	127.8	23.0
	H12	H Intv02 1	31	3.57	1	0.29	8.1	8.68	9.45	102.3	131.5	34.4
	H13	H Intv02 3	47	6.05	3	1.42	23.5	7.77	10.15	107.7	116.1	54.8
	H14	H Intv02 4	57	8.78	5	1.47	16.7	6.49	7.80	88.5	141.5	48.8
	H15	H Intv02 5	27	3.42	1	0.64	18.7	7.89	9.71	104.4	137.3	55.5
	H16	H Intv04 1	47	7.65	3	1.89	24.7	6.14	8.16	94.1	119.1	47.8
	H17	H Intv04 2	29	3.3	1	0.44	13.3	8.79	10.14	83.3	113.8	53.1
	H18	H Intv04 3	46	6.18	2	0.93	15.0	7.44	8.76	83.0	128.6	51.9
	H19	H Intv05 1	40	5.23	1	0.85	16.3	7.65	9.13	101.5	119.3	48.9
	H20	H Intv05 2	48	7.11	4	1.90	26.7	6.75	9.21	81.5	131.4	56.7
	H21	H Intv11	123	22.92	9	6.32	27.6	5.37	7.41	96.0	104.01	52.6
合計/平均			959	146.04	61	31.53	21.6	6.57	8.37	95.6	121.1	45.6
朝青龍	A1	AN101	49	5.55	3	1.06	19.1	8.83	10.91	137.1	140.4	39.3
	A2	AN102	59	7.75	3	0.80	10.3	7.61	8.49	166.6	182.2	53.2
	A3	AN1031	62	6.29	2	1.20	19.1	9.86	12.18	129.8	141.6	43.0
	A4	AN1032	52	5.57	2	1.21	21.7	9.34	11.93	107.3	107.5	43.9
	A5	AN104	26	1.99	2	0.23	11.6	13.07	14.77	123.2	151.8	39.8
	A6	A Intv1 5	35	4.34	1	1.15	26.5	8.06	10.97	155.8	164.67	31.1
	A7	A Intv1 6	36	4.76	2	1.38	29.0	7.56	10.65	219.4	223.3	37.7
	合計/平均			319	36.25	15	7.03	19.4	8.80	10.92	148.5	158.8
鶴竜	K1	K Intv1	40	6.79	1	1.67	24.6	5.89	7.81	92.3	122.0	57.7
	K2	K Intv2	53	8.96	5	2.59	28.9	5.92	8.32	105.5	106.5	62.2
	K3	K Intv5	82	15.93	6	3.58	22.5	5.15	6.64	96.5	113.1	36.9
	合計/平均			175	31.68	12	7.84	24.7	5.52	7.34	98.1	113.8

表 20 に白鵬の発話音声について praat を利用して解析した結果を示す。比較のために、朝青龍、鶴竜の発話音声データもいくつか載せた。白鵬の発話データ H1～H9 は、TBS テレビ番組『白鵬と大鵬 最後の会話』から比較的背景音の小さな部分を選んだ。モノローグと対話の療法が含まれる。同 H10 から H21 は、拓殖大学白鵬研究チームが白鵬にインタビューを行った時の録音から抽出した会話である。朝青龍の音声データ A1～A5 は元プロ・ボクサー内藤大助との対談から、同 A6、A7 は 21 回目優勝(平成 19 年名古屋場所)時の土俵横インタビューからそれぞれ抽出した会話である。鶴竜の音声データは初優勝(平成 26 年大阪場所)翌日のインタビューから抽出した。それぞれの発話を文字化したものは本節末にまとめて示す。それぞれの抽出部分はできるだけ背景雑音の小さいところから選んだが、雑音は多少なりとも解析に影響を与えている。なお、鶴竜の発話はサンプル数が少なく、あくまでも参考程度に見てもらいたい。

(1) 発話速度

白鵬の話し方はかなりゆったりとした印象である。これは表 20 の数値からも裏付けられる。まず、話し方の早さを表す数値には、発話モーラ数を発話時間で割った数値である発話速度と、発話モーラ(拍)数を実際の発声時間(発話時間－ポーズ時間)で割った数値である調音速度の二種類がある。丸島歩³⁾は、発声部分だけ(ポーズは除外)で計測した調音速度よりも、ポーズも含めた発言時間をもとに計測した発話速度のほうが、聞き手の感覚的な速度感に一致していることを示している。ポーズ(発話中断区間)については、Praat が機械的に音声以外の区間として計測した Voice breaks の数値があるが、これは、人間の聞き手が発話が区切られていると判断できない微小な無音区間もすべて含んでいる。本稿では、人間の聞き手が、区切りがあると知覚判断できるものをポーズとする。これは人によって判断の違いがでてくるところではあるが、今回は筆者の聴覚印象をもとにポーズを確定した。およそ 1 拍到相当する時間以上のものであった。

白鵬の 21 の発話サンプルの発話速度を見ると、ほとんどが 5～8 (拍/秒)に収まっている。一方、朝青龍は 7 つのサンプルすべてで発話速度が 7 (拍/秒)以上であった。福盛貴弘⁴⁾は、TV ニュースのアナウンサー・キャスターの発話を調べ、1 分あたり約 450 モーラという数値を出している。これは秒あたりに換算した発話速度では 6.5(拍/秒)である。白鵬の各発話サンプルの発話速度はちょうどこの周辺にあり、21 サンプルの平均値も 6.57 (拍/秒)とほぼアナウンサーたちの発話速度に一致している。一方、朝青龍の発話サンプルの発話速度は、すべて 6.5 を大きく上回るもので、平均でも 8.80 と約 35% 増しのモー

ラ数となっている。日本人にとってもかなりの早口と受け取られる速さである。

また、福盛貴弘⁵⁾は、アナウンサーたちの発話1分のうち約20%がポーズであることを示している。白鵬の発話でも、発話時間に閉めるポーズの割合は21.6%とほぼ一致している。従って、発話時間からポーズ時間を差し引いた実発声時間をもとにした調音時間でも、白鵬の発話はアナウンサーたちと同等の速さなのである。発話時間、調音時間、ポーズ率、どれをとっても白鵬の発話は日本語母語話者にとっては非常に聞きやすい速さといえる。

同時期に横綱であった白鵬、朝青龍、両者の発話速度の違いは、相対的に白鵬をゆったりとした話し方であると印象づけたはずである。内田照久⁶⁾によれば、特にゆったりとした発話速度は「情緒が安定している」という印象を与えるという。つまり白鵬の話し方は、より情緒が安定していると聞き手には受け取られるものとなったであろう。それは横綱らしい落ち着きとして好意的に受け止められることにつながる。また、勝負に臨むものとしては、精神的な安定感として横綱の強さを印象づけるものとなろう。

白鵬の発話速度は、日本語だけでなく、モンゴル語で話すときにもゆったりとしているようである。白鵬が小学校3、4年生のときの担任教師であったツェレンフ氏は白鵬について、

- ・無口ではあるが、きっかけがあれば話す。
- ・ことば遣いに敏感で、頭の中で整理してから話す印象であった。
- ・落ち着いた話し方であった。

と述べている。同じく白鵬の通った小・中学校で7年にわたって体育の担当をしていたガンスフ氏も、

- ・自分から話すことは少なかった。
- ・こどもにしてはむずかしい言葉を使っていた。
- ・話し方はゆっくりしていた。

と印象を語っている。(いずれも、モンゴル現地教師・友人インタビュー 2014年3月)ここから、慎重にことばを選びながら話す少年・白鵬の姿が浮かんでくる。これは、白鵬の母親が子供の頃から、考えてから話すようにと指導していたためである。(モンゴル現地家族インタビュー 2014年3月)このようにもともとモンゴル語でも考えながらことばを選びつつ話していた白鵬であれば、外国語である日本語を話すに際しては、より慎重に話すであろう。そのような言葉に対する態度が白鵬の日本語発話の発話速度に現れているので

はないだろうか。実は、白鵬の発話サンプルの中で発話速度が唯一 10 を超えたサンプル H11 の発話内容は、他と比べてかなりくだけた口調のものになっている。素の白鵬の発話速度は案外速いのかもしれない。それを取えてことばを選び、慎重に話している可能性もある。

なお、サンプル数は少ないが鶴竜の場合は、発話速度が 5.52 とかなり遅い。また、発話に占めるポーズの割合も 24.7%と白鵬、朝青龍に比べかなり大きいので、ゆっくりしすぎて聞こえるきらいがある。聞き手にとってはあまり遅すぎる発話速度は、外向性、勤勉性、協調性などの点でマイナス印象となる⁷⁾。その点でも、白鵬の発話速度は適度なものである。

(2) 声の高さ(ピッチ)

発話速度、調音速度以外の要素も話の速さについての聴覚印象に影響する。丸島歩⁸⁾は、ピッチ中央値が高いと聞き手の耳にはより速く聞こえるとしている。この点では、朝青龍の発話のピッチ中央値が、107.3~219.4Hz⁹⁾(平均 148.5Hz)と高さが目立つ。朝青龍の発話は、もともと速度が高い上に、ピッチ中央値も高いために相当な早口に聞こえるのであろう。一方、白鵬のピッチ中央値は、81.5~129.3Hz に分布し、平均も 95.6Hz とかなり低い。コントロール可能な発話速度に対し、声のピッチはある程度生得的なものであるが、白鵬の声はあきらかに低い。内田照久・中畝菜穂子¹⁰⁾によれば、ピッチの高い発話は聞き手に対して外向性(陽気、外交的、話し好きなど)の高い性格印象を与える。白鵬と朝青龍では、やはり後者にその印象が強いだらう。

(3) ピッチ変動

白鵬と朝青龍の発話のピッチ変動の様子を図 4、5 に示す。これによると、白鵬の発話は全体的にピッチが低いだけでなく、出だしの一部を除いてはピッチ変動幅が小さいことが見て取れる。これとは対照的に朝青龍はおよそ 200Hz の幅の中で常に大きくピッチが変

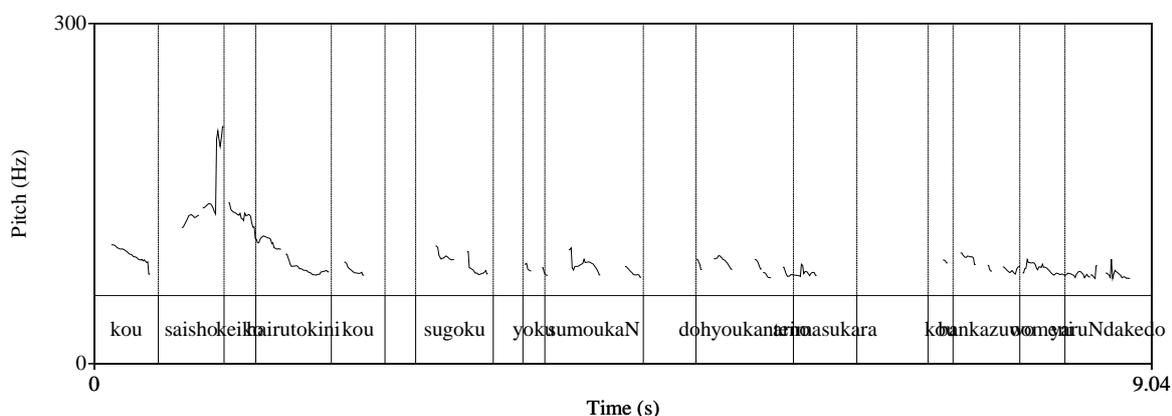


図 4 白鵬 (H_Intv02_4)ピッチ変動

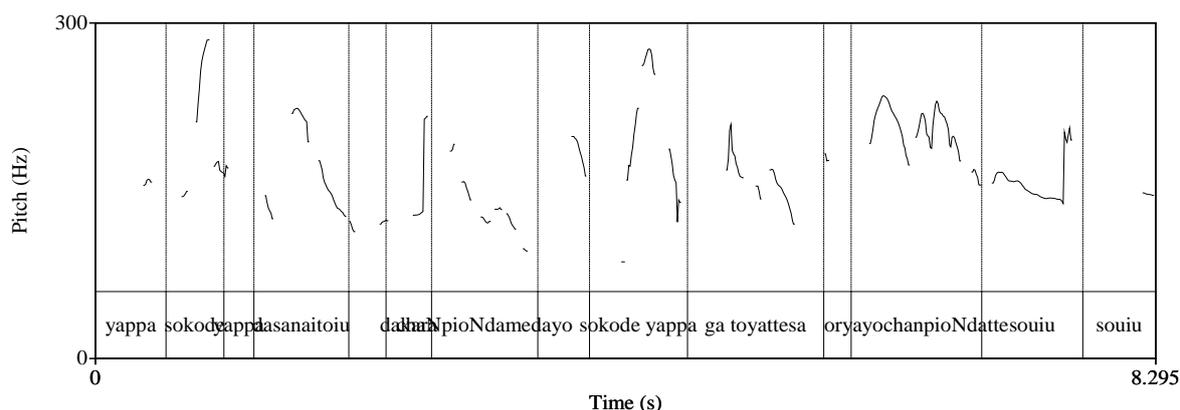


図5 朝青龍(AN102)ピッチ変動

動している。

丸島歩¹¹⁾は、ピッチ変動の大きい音声のほうが、聞き手には感覚的に速く聴こえることを確認している。すると、先の発話速度とも合わせて、朝青龍の発話がより早く聴こえる可能性を示している。逆に、白鵬はここでもゆったりとした発話速度を演出している。また、内田照久¹²⁾によれば、ピッチ変動が大きくなるにつれ、外向性の印象が強くなる。この点で、朝青龍の性格印象と白鵬の性格印象は大きく異なることが予想される。

(4) 白鵬の音声的特性と性格印象

以上、白鵬の発話の特徴を見てきた。白鵬は、発話ピッチが比較的低く、その変動も緩やかであることに加え、ゆったりとした発話速度で話す。これらはいずれも聴く人に対して、安定した性格を印象づける。「横綱らしさ」を明確に定義することは難しいが、軽々しさのない重厚さを期待する人は多いのでないだろうか。白鵬の話し方はそうした人々が横綱に仮託する性格印象に合致するものとなっているようである。

横綱らしさにつながる性格印象は、身体的な強さと同時に、精神的な強さを印象づける。白鵬自身は、心酔する双葉山の言「未だ木鶏足りえず」にある木鶏の心境を目指したいとたびたび語っているが、発話音声からはすでに十分な冷静さ、沈着さを聴く人に与えていることがうかがえる。横綱としての安定感抜群と言われる白鵬であるが、その発話特徴も安定感を形作る一要素であると言えよう。

以上、白鵬の発話の持つパラ言語情報が人々に対して落ち着きある横綱らしさを印象付けている可能性があることを見てきた。しかし、発話の意図、つまり言語情報も発話者の人となりを判断するための重要な要素であるのは間違いない。次節に白鵬の発話の言語情報の豊かさを簡単に見ておこう。

3 白鵬の日本語と情報収集力

稲盛和夫・白鵬¹³⁾に見られる稲盛和夫氏との対談内容からは、白鵬が日常のできごとからかなり思索的なことまで、多岐にわたる内容について高い日本語文生成能力を持つことが見て取れる。記事となっている対話が実際に話されたそのままではなく、読みやすい形に編集されていることは承知の上で、同対談中の白鵬の発言部分を取りまとめた部分を「日本語文章難易度判定システム(J-Readability)」¹⁴⁾を利用して判定してみたところ、「上級」文章と判定された。聞き取りには、一回かぎりであり遡っての聴き返しができないという制約があり、読み取りにくらべ困難度が高い。そこで通常、話し言葉では、一文が短くなる、漢語の使用が減る、修飾句による複雑な修飾関係が排除されるなど、書き言葉にくらべより理解容易な形で表現される。その会話体でも上級レベルと判定されるように、白鵬の語彙力、文生成能力は高く評価できるのではないだろうか。

これだけの対話対応能力があるからこそ、「いろいろな分野で活躍している人の話を聞くのが好きです」¹⁵⁾と言えるのだろう。実際、白鵬は各界のリーダーと対談する機会が多いようだ。

そして、対談が白鵬の日本語能力をさらに高める好循環が生まれる。対談ではないが、優勝インタビューについて白鵬は、千秋楽を待たずに優勝した時は、千秋楽での優勝インタビューに備え、あらかじめいろいろな質問を想定し、それにどう答えるかをシミュレートしていると証言している(研究チームインタビュー)。優勝インタビューにもこのように臨む白鵬であれば、対談の際にはより入念な準備をしているはずである。宮城野親方は日本人との交流が日本語の上達に役立った(宮城野親方へのインタビュー2013年12月)と語っているが、交流そのものに加え、このような特定の場面を想定しての仮想対談も白鵬の言語能力向上に大きく寄与していると予想できる。

また、各界リーダーと対談しても、対談相手に遜色のない語彙と文生成能力を有する白鵬であれば、実りある対談が可能になるはずである。こうした対談は白鵬にとって、日本人、日本文化についての情報収集の機会となる。対談を重ねることにより日本への理解をさらに深めることができる。また、積極的に相撲界以外の著名人と交流し知見を高めようとする姿勢は、自らの価値を高める向上心の現れであり、それも白鵬の「横綱らしさ」の一部になっているのではないか。

- H1 HT02 そこは わたしが につぼんの ちちと したう／だいよこづな／たいほうさんの
じたく M
- H2 HT03 このひから／たいほうさんが／けんさにゆ(う)いんすると きき／おみまいに
うかがったのです M
- H3 HT04 しかし／たいほうさんには／これが さいごだと／わかっていた かもしれません
M
- H4 HT11C きょうかいなのか／また へやの その かんけいしゃの／かたなのか わかりませ
んが／きのう きょう はいってきた その わかものに こんな くだいな なまえは だめでしょ
と／ていうこと なりまして／あの／ま いろが しろかったもんですから／じゃ その かしわど
さんの／きを とって いまの はくほう なったんですよ C
- H5 HT14C1 やっぱり こういう よこづなずもうって いうんですかね／こう あいてに すも
う とらしながら こう／じぶんが こう／もう いいかって いうね C
- H6 HT14C2 だから そういう いみで その ね／にくたいてきにも せいしんてきにも ね／ひ
とつ ふたつ うえじゃないと こう／おきれながら／こう すもう とることは できないです
から／ただ／ちから ある あっただけで そういう こと できません からね C
- H7 HT24C1 おやかたの ことばの なかで／とくに／いんしょうに のこっているのが／わた
しが／よこづなに しょうしんした ときです M
- H8 HT24C2 よこづな というのは／かって あたりまえ／かてなくなったら／いんたいしか
ないんだ M
- H9 HT24C3 わたしは よこづなに しょうしんした／どうじに いんたいの ことを かんがえ
たと いわれた ことばです M
- H10 H_InTV01_3 で なんと／そこで いきなり にしゅうかんご／(ほん)とに あの／たいかいが
ひらかれて／よんじゅうごきろきゅうだった かな／じゅうにさいの ときに／で いきなり よ
んいになって C
- H11 H_InTV01_4 で そのときに おやじに ちと ばれちゃったんだよ がっこう やすんでたから
C
- H12 H_InTV02_1 やりたいって言う きもちが／おさえることも だいじなんでしょうね たぶん
C
- H13 H_InTV02_3 いまじぶんの／おもったことなんですけど／いまはじぶんも／あさげいこやって
いるときいちばんなんですよね C
- H14 H_InTV02_4 こう／さいしょ けいこ はいるときに こう／すぐく／よく すもうかん／どひよ
うかん ていうの ありますから／こう ばんすう おおめに やるんだけど C
- H15 H_InTV02_5 ばしょ ちょうど こう／ちかずいてくると ばんかず へらすんですよ C
- H16 H_InTV04_1 やっぱり きたころ こう まったく／にほんごも わからなかったですし／ま こ
の にほんの ことは し／ま してましたね C
- H17 H_InTV04_2 もう おとうさんも／ろくじゅうよねん とうきょうおりんぴく きてるし C
- H18 H_InTV04_3 ま とうじ あと／にほ もんごるでも おしんとかね／しちにんさむらいとか そ
ういう だらまも やってましたしね C
- H19 H_InTV05_1 で そんなかで にゅうもんしたときは／やっぱり こう ことばのかべって言うの
あったんですよ C
- H20 H_InTV05_2 ま とくに この すもうかいというのは みなさんが してるとおり／こう／ど
くのくのね／こう／せかいでもありますし C
- H21 H_InTV 1 1 C きょうかいなのか／また へやの その かんけいしゃの／かたなのか わかりませ
んが／きのう きょう はいってきた その わかものに こんな くだいな なまえは だめでしょ
と／ていうこと なりまして／あの／ま いろが しろかったもんですから／じゃ その かしわど
さんの／きを とって いまの はくほう なったんですよ C

朝青龍

- A1 AN101 やあ やるとき やっぱ こうなってね／くに だいひょうして／きてるもんだから
／あの せなかに おもいもの ありますからね C
- A2 AN102 やっぱ そこで やっぱ ださないと／だから チャンピオン だめだよ／そこ
で やっぱ がーっと やってき／おりゃーよ チャンピオンだって そういう C
- A3 AN1031 あれですよ それでは かんべきな にんげんなんて パーフェクトな にんげん
なんて ないんですよ／じょうずに それ ながして いけないと いけないですよ C
- A4 AN1032 さいしょから これ もう ずっとね／なんちゅうの くろうが ない にんげん
て ないんですよ／しろいにんげんなんて ないんですよ C
- A5 AN104 いきているうちに／きろく のこさないと／にんげんらしいこと C
- A6 A_InTV1_5 そうですね もう どんどんね／いっしょうけんめい やらないと いけないな と
ころです C

A7 A_InTV1_6 ほんとに みなさん しょにちから せんしゅうらくまで／おうえん ありがとうご
ざいました C

鶴竜

K1 K_InTV1 そういう こと おもわないで とにかく／じぶんの すもう さいごまで とりきろ
う っていう きもち C

K2 K_InTV2 やっぱり どうしても／あの どっかで おもっちゃうんですけど／それを／おさ
えて／じぶんの すもうを とることが できて／よかったと おもいます C

K3 K_InTV5 いや もう ぜんぜん／もう はるかに すごかったですね ほんとうに／はじめて
の たいけんだったし／もう／テレビでしか みたこと なかったんで／そのばに いま じぶんが
じぶんがいるっておもうと すごく／うれしくおもいました C

*発話内容の「／」は聴覚上のポーズの位置

*発話内容末尾の「M」はモノローグ、「C」は会話

注記

- 1) A. メラビアンによれば、会話で伝えられるメッセージのうち非言語情報が93% (声の調子38%、表情55%)を占める。御手洗昭治『異文化にみる非言語コミュニケーション』ゆまに書房、2000年
- 2) 内田照久「未知のイントネーションから想起される話者の性格印象と方言地域の特徴」『音声研究』第10巻3号、29-42頁
- 3) 丸島歩「音声言語のテンポに関する一考察-時間構造とピッチ構造に着目して-」『言語学論叢』28号(オンライン版第2号)、2009年、48-56頁
- 4) 福盛貴弘「ニュース番組におけるアナウンサー・キャスターの発話速度-2006年5月3日のニュース番組を資料として」『大東文化大外国語学部創設三十五周年記念論文集』2008年、191-209頁
- 5) 上掲論文
- 6) 内田照久「音声の発話速度と休止時間が話者の性格印象と自然なわかりやすさに与える印象」『教育心理学研究』53、2005年、1-13頁
- 7) 内田照久「音声の韻律的特徴と話者のパーソナリティ印象の関連性」『音声研究』第13巻1号、2009年、17-28頁
- 8) 丸島歩「音声言語のテンポに関する一考察-時間構造とピッチ構造に着目して-」『言語学論叢』28号(オンライン版第2号)、2009年、48-56頁
- 9) ここでピッチ数が一番高かったA7は、優勝インタビューの最後に場内の観客に向けて発せられた言葉のため、一段と高くなっている。
- 10) 内田照久・中畝菜穂子「声の高さと発話速度が和書の性格印象に与える影響」『The Japanese Journal of Psychology』Vol175、No5、2004年、397-406頁
- 11) 丸島歩「音声言語のテンポに関する一考察-時間構造とピッチ構造に着目して-」『言語学論叢』28号(オンライン版第2号)2009年、48-56頁
- 12) 内田照久「音声の韻律的特徴と話者のパーソナリティ印象の関連性」『音声研究』第13巻1号、2009年、17-28頁
- 13) 稲盛和夫・白鵬「心を高め、運命を伸ばす」『致知』致知出版、2012年10月号、8-18頁
- 14) 日本語文章難易度判別システム alpha 版 (<http://jreadability.net/>)。本来は書き言葉による文章の難易度を判別するためのものだが、話し言葉に援用した。
- 15) 熊ヶ谷誠志『白鵬 「山」を越える男』主婦与生活社、2010年、175頁

第4節 身体状況と心理状況をめぐる考察

1 白鵬の体力の評価

(1) 先行研究における大相撲力士の体力の評価

先行研究において大相撲力士の形態と体力及びその関連についてどのように評価されているのかをみていく。

小川らは¹⁾大相撲の新弟子の形態と体力を測定しているが、その中で「形態的には過熟肥満であり機能や運動能力の面においては形態に比し著しく劣弱な青少年の集団である」

と述べており、大相撲の新弟子は形態面では異常に近い発達を示しているが、機能面、特に運動能力の面では同年齢の青少年に比べ著しく劣っており、形態の発達に伴っておらず大きくバランスが崩れていることを明らかにしている。その後の報告²⁾では、現役上位力士の形態と機能の測定と調査を行っている。その中で、機能面ではそれほど著明な差異を認めてはいないが、形態、特に体重と周径囲が優れており、形態の大小が相撲の勝負に大きく関与していると述べている。また、新弟子の形態と体力について江橋ら³⁾は、「新弟子相撲力士は体格的に優れていても筋力の発達はこれに伴わない事が示唆され、相撲力士のトレーニングは体重の増加のみならず筋力発達についても配慮することが重要」と報告し、中嶋ら⁴⁾は「体重の多い方が有利とばかりに、あまりにも太った新人をスカウトするのは避けるべきであろう。」と体力の虚弱さを強調している。

以上のように、大相撲の新弟子の形態は発達しているが運動能力は著しく劣っていることがわかる。その形態の発達においては以下の考察がある。小川ら⁵⁾は、「力士の体重は平均 122.2kg、ローレル指数⁶⁾も平均 210.5 と異常に近い値を示している。周頸囲、特に腰囲は 114.9cm、尻囲は 115.7cm と著しく大きく、皮脂厚(3部位合計)も 109mm と驚くべき厚さを示している力士の体型の特徴は皮脂厚の異常なまでの発達にある。」と言及している。また、田中ら⁷⁾「新弟子は同年齢の一般青少年は他種目スポーツ選手と比べ、機能的体力面では著しく劣っているところがある。これは皮下脂肪の沈着による体重の増加が運動に対して抑制的に働き、実質的な運動器官の発育発達を伴っていないことが原因と考えられる。」と述べている。力士の形態の発達は異常な皮脂厚がその要因であり、運動器官の発育発達に抑制的に働いているようである。

それらを踏まえた上で新弟子から出世していく過程においてどのような変化があるのかを見ていく。田中ら⁸⁾は、相撲競技の成績は、体格要因に依存するところが極めて大きいという立場に立って、新弟子力士の形態及び身体組成の特徴を検討している。その中で新弟子が関取に至る過程で約 15kg の骨格筋組織の増大を予測している。そして、野々宮ら⁹⁾は、「力士の身長と体重は入門後 4～5 年間に急激に増加しその後はプラトー¹⁰⁾となる。」、「下位クラスでは力士の出世に体重が関与するものの三段目以上の上位クラスでは力士の出世と体重の間に統計学的関係は認められなかった。」と述べていることから、「力士の身長と体重は入門後 4～5 年間で急激に増大しその後はプラトーとなるが、三段目以上に出世している力士は体重増加に関しては脂肪ではなく骨格筋で体重増加しているのではないか。」ということが推測される。その上、桑森¹¹⁾は学生相撲選手において「相撲における競

技力は、筋力よりもパワーにより強く依存している。」と述べているし、桑森ら¹²⁾は相撲競技者の全身持久性についても言及しており、「相撲選手と他のスポーツ選手のVO2max¹³⁾を比較すると、絶対値では遜色ない値を示した。」と述べている。骨格筋量が多ければ重いものを速く動かせるはずだから、競技力が上がればそれに伴って骨格筋量が増加することは当然予測される。

(2) 白鵬と他の横綱との形態的特徴の比較からの考察

表 21 は白鵬を含む近年横綱で活躍した日馬富士、鶴竜、朝青龍、武蔵丸の 5 名の身長及び体重を各横綱の初土俵から 2013 年まで、または引退まで経年的に表したものである。武蔵丸

表21 近年の横綱の身長と体重

測定年月日	白鵬関				鶴竜関				日馬富士関				朝青龍関				武蔵丸関			
	身長 (cm)	前年比 (%)	体重 (kg)	前年比 (%)																
2014年11月	193.0	1.0	150.7	-3.3	186.0	0.0	150.0	0.0	186.0	0.0	133.0	-2.0								
2013年11月	192.0	-1.0	154.0	0.5	186.0	0.0	150.0	4.0	186.0	0.0	135.0	2.0								
2012年11月	191.0	-1.0	153.5	4.5	186.0	-1.0	146.0	2.5	186.0	0.0	133.0	5.0								
2011年11月	192.0	0.0	149.0	-4.8	187.0	1.0	143.5	4.0	186.0	1.0	128.0	-1.1								
2010年3月	192.0	0.5	153.8	1.6	186.0	-1.0	139.5	2.9	185.0	0.0	129.1	3.1								
2009年3月	191.5	-1.1	152.2	-1.0	187.0	0.0	136.6	1.8	185.0	0.0	126.0	0.0	184.0	0.0	148.0	0.0				
2008年3月	192.6	0.6	153.2	0.3	187.0	0.0	134.8	2.4	185.0	-1.0	126.0	2.0	184.0	0.0	148.0	0.0				
2007年3月	192.0	0.0	152.9	4.7	187.0	1.5	132.4	6.4	186.0	1.0	124.0	11.0	184.0	0.0	148.0	2.0				
2006年3月	192.0	0.5	148.2	7.2	185.5	0.0	126.0	6.5	185.0	-1.0	113.0	0.2	184.0	0.0	146.0	3.4				
2005年3月	191.5	1.0	141.0	6.0	185.5	0.5	119.5	13.5	186.0	2.0	112.8	-0.2	184.0	-1.0	142.6	2.6				
2004年3月	190.5	3.5	135.0	33.5	185.0	2.0	106.0	10.5	184.0	2.5	113.0	19.9	185.0	1.5	140.0	-0.2				
2003年3月	187.0	1.5	101.5	12.0	183.0	1.0	95.5	12.0	181.5	1.0	93.1	5.1	183.5	0.0	140.2	8.2	192.0	0.0	231.5	4.5
2002年3月	185.5	5.5	89.5	9.5	182.0	2.0	83.5	1.5	180.5	0.5	88.0	1.0	183.5	-1.0	132.0	4.0	192.0	0.0	227.0	7.0
2001年3月	180.0		80.0		180.0		82.0		180.0		87.0		184.5	0.5	128.0	22.0	192.0	0.0	220.0	-10.5
2000年3月													184.0	2.2	106.0	0.0	192.0	0.4	230.5	6.5
1999年3月													181.8		106.0		191.6	0.6	224.0	9.0
1998年3月																	191.0	0.0	215.0	13.0
1997年3月																	191.0	-1.0	202.0	-4.0
1996年3月																	192.0	2.0	206.0	8.0
1995年3月																	190.0	-1.0	198.0	8.0
1994年3月																	191.0	0.0	190.0	7.0
1993年3月																	191.0	1.0	183.0	6.0
1992年3月																	190.0	0.0	177.0	16.0
1991年3月																	190.0	0.0	161.0	8.0
1990年3月																	190.0		153.0	

(出所)大相撲力士会資料(2014年)

* ゴシック体=初優勝時 十両昇進 横綱昇進 最大体重増加

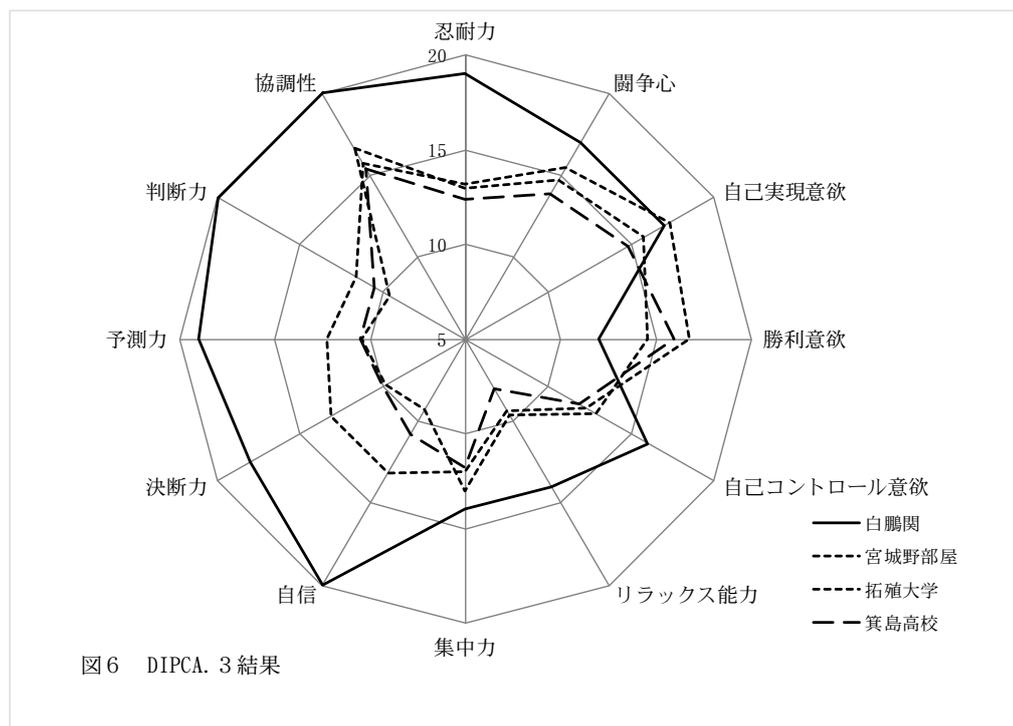
の出身地はアメリカ・ハワイ州で、その他の横綱の出身地はモンゴルである。各横綱の身長及び体重と出世の状況を照らし合わせると、各横綱の体重増加量が最大の年の±1年で全員が十両に昇進しており、かつ身長の伸びが止まっている。これは前述した野々宮らの「下位クラスの力士の出世には体重が関与する。」という報告と合わせて考えると、横綱になる可能性が大きい力士の身長と体重の増加傾向が表れる時期は、一般力士の三段目レベルが十両レベルまでスライドしていると言えるだろう。また、体重の値がプラトーになると横綱昇進がほぼ同時期であることも特徴的である。

白鵬の入門当初からの身長と体重の推移を経年的に見ていくと、体重の増加量が一番大きいのは 2003 年から 2004 年の 33.5kg であり十両昇進と同時期である。また、「横綱に昇進してから現在まで」の身長は 192.0±0.61cm、体重は 152.4±1.74kg であり、これと「初土俵から横綱昇進まで」及び「十両昇進から横綱昇進まで」の身長と体重とをそれぞれ有意差検定したところ、身長において前者では有意差は見られず、後者では 5%水準の危険率¹⁴⁾で有意差が見られた。体重においては両者において 1%水準の危険率で有意差が見られた。

このことから、白鵬の身長と体重においては「横綱に昇進してから現在まで」が一番大きく、それを維持し続けていることがわかる。これは他の横綱4名も同様の傾向であった。

2 白鵬の心理面の評価－白鵬の心理的特徴及び他の相撲選手との比較と考察－

図6は、調査対象者のDIPCA.3の得点をそれぞれグラフに表したものである。白鵬のDIPCA.3の得点は、大相撲グループ、大学グループ、高校グループと比べて全体的に高かった。その中で唯一、「勝利意欲」だけが低かった。「勝利意欲」について、白鵬が「今は確かに勝ち負けの勝負の世界に生きているかもしれないですけど。でもこのやっている今の勝負の世界は短いですからね。第二の人生というのが長いわけですから、最終的には勝ち負けは関係ないですね。」と語っていることから、白鵬が決して目先の勝ち負けだけに拘るのではなく、引退後の将来をも見通しながら競技していることがわかる。また、「勝ち負けより、鬘を結っている力士として、日本人の魂として残るような誇りをもってやっている。それぐらいの相撲道の執念を強くもって、学んだものを、第二の人生とくっつけていくっていうかね。これが勝ち負けというより、ものすごい、大きいものかもしれませんね。」といった語りからは、白鵬が、競技生活の中で強くなる過程で学んだことと「第二の人生」につながりを持たせることを強く意識していることがわかる。このような白鵬の心構えが影響して、「勝利意欲」の得点が低く抑えられたと考えられる。また、大相撲はプロであるが故に勝つことを宿命づけられている世界である。しかし、横綱はたとえ勝ったとしてもその勝ち方まで吟味される。つまり、武道の価値に沿って勝たねばその勝ちの価値



は低いと判断される。その価値とは「正々堂々の精神」、「信義を重んじる心」、「礼儀」、「質実剛健の気風」等である。それらは、勝つことだけを意識しているだけで得られるものではない。白鵬自身がこのような武道の価値観をすべて身につけているかどうかは判断できないが、少なくともその価値観を踏まえた上で横綱という人格を作らなくてはならないと苦慮しているように見受けられた。それが「勝利意欲」の低得点に影響した¹⁵⁾と考える。

また、高校グループ、大学グループ、大相撲グループに比べると高いが、「リラックス能力」「集中力」の得点も、その他の尺度に比べ低かった。「リラックス能力」について白鵬は、「リラックスする暇がない」と語っている。この言葉からは、横綱の本場所、巡業、その他会合等の多忙さが読み取れ、そのことが低得点につながったと考えられる。一方、「集中力」についての「土俵の上にあがると集中できる。土俵からおりれば、いろんな物事を考えなければならない。横綱というものは一つの象徴・代表であるから」といった語りからは、白鵬が土俵の上ばかりではなく、日常生活そのものにも気を配らなくてはならない立場であることを常に意識していることがわかる。このことが「集中力」の得点を低く抑えたのであろう。また、「横綱というものは一つの象徴・代表である」といった語りからは、白鵬が周囲から見られる存在であることを意識していることも読み取れ、こうした気の緩められなさは、「リラックス能力」の低得点にも影響していると推察できる。

白鵬は、面接調査の中で「今から一番強化したい要素」を問われ、「平常心と自己コントロール能力」と即答した。「平常心」はDIPCA. 3の12尺度の中には入っていないが、「自己コントロール能力」は前述した「集中力」と「リラックス能力」とともに「精神安定・集中」の下位尺度になっており、これは「平常心」と密接につながっていると考えられる。これは白鵬が自分自身の心理的な課題や難しさを自覚しており、同時にそれを強化したいと考えていることを示している。言い換えれば、自分をよく知っているということになる。つまり、自分の強みだけでなく、課題や難しさも知っていることが白鵬の心理面の真の強みであり、そのことが、白鵬が土俵上で常に強さを発揮できている一要因になっていると推察できる。

注記

- 1) 小川新吉・古田善伯・山本恵三・永井信雄・中嶋英昭「相撲力士の体力科学的研究(新弟子の体格・体力に関する研究)」『体力科学』21巻(1972年6月)、118-128頁
- 2) 小川新吉・古田善伯・山本恵三・永井信雄「相撲力士の体力科学的研究(その2)(関取の体力と発達)」『体力科学』22巻(1973年6月)、45-55頁
- 3) 江橋博他「新弟子相撲力士の形態的特徴と基礎体力」『生理人類学研究会』第14回大会抄録(1985年10月)、369頁
- 4) 中嶋英昭他「新弟子相撲力士の体力特性」『体力科学』28巻(1979年12月)、374頁

- 5) 小川新吉・古田善伯・山本恵三・永井信雄「相撲力士の体力科学的研究(その2)(関取の体力と発達)」『体力科学』22巻(1973年6月)、45-55頁
- 6) ローレル指数：児童・生徒の肥満の程度を表す指数。115~145が標準。以下の計算式で示される。
ローレル指数=体重(kg)÷身長(cm)3×10,000,000
- 7) 田中喜代次・加藤弘・菊池和夫・長友睦美・中嶋英昭・柴山秀太郎・江橋博・西島洋子・松沢真知子・小川新吉「新弟子相撲力士の形態及び身体組成」『体力科学』28巻(1979年9月)257-264頁
- 8) 前掲論文、257-264頁
- 9) 野々宮広章他「大相撲力士のメディカルチェック」『体力科学』40巻(1991年12月)、985頁
- 10) プラトー：一時的な停滞状態のことをいう。
- 11) 桑森真介「相撲競技者の競技力と形態および筋機能」『明治大学教養論集』通巻273号(1995年1月)、97-110頁
- 12) 桑森真介・佐藤隆「学生相撲選手の体力科学的研究-主に全身持久性について-」『武道学研究』2巻(1989年3月)、141-157頁
- 13) V02max：最大酸素摂取量のこと。
- 14) 危険率：統計処理において、あるデータをある仮説に基づいて有為差検定を行う場合に、その仮説が正しいか間違っているか分からないという検定統計量が危険域内に入る確率をいう。危険率としては具体的に0.05(5%)、0.01(1%)などを用いることが多い。
- 15) 本研究のデータは調査時点(2015年10月29日)のものであり、これらの心理的競技能力が影響して大記録が達成されたのか、それとも大記録の達成によって本研究のような心理(結果)が得られたのかは明言できない。これは本研究の限界である。しかし、調査時点において、白鵬が優れた心理的競技能力を有していることは事実である。

第4章 考察から引き出した白鵬の強さ(結論)

第1節 食生活がもたらした強さ

1 モンゴル時代の食環境から

白鵬は幼少の頃から乳製品を毎日摂ることで、乳製品が有する酸味にも慣れ、乳の味に対する嗜好性が形成されていった。乳製品が摂取できる期間は、1年のうち春から秋にかけて家畜が出産、哺乳の時期となる。白鵬はこの乳製品を摂取できる時期にドゥブ県エレデネサント郡の草原で生活を送っていた。モンゴルの夏休みは6~8月の3か月と長く、これは1年の1/4の期間である。白鵬は0~15歳の15年間草原での生活を体験していることから、45か月、つまり3年9か月分の時間、「白い食べ物」三昧の暮らしを経験したことになる。

白鵬は、生後よく発熱することがあり、心配をした両親は、生後半年の乳児を伯父と伯母が暮らす草原で転地療養し、その後、毎年、夏の草原での生活によって身体が丈夫になったという¹⁾。この草原での生活では、搾り立ての牛乳やアイラグの摂取によって健康を回復したことが推察できる。

白鵬は草原(牧畜地域)では伯父・叔母のゲルに隣接したゲルに住み、これらの大人たちに加えて、兄姉や従兄などを含む多くの年長者の指導のもとで家畜の世話と家事をはじめとした草原(牧畜地域)での生活技術を総合的に学ぶ機会を十分に持つことができた。白鵬

が草原で生活技術を体得し、「白い食べ物」を中心に摂取する食生活によって獲得したものは来日後の身体能力の基礎を育んだものと考え。特に、注目される点は、灰分特に亜鉛の摂取である。

白鵬がモンゴルを離れ、来日したのは2000年10月である。モンゴルではこの年と2001年にソド(雪害)に遭遇し、家畜のうち約30%が凍死したといわれている。従って、白鵬は「白い食べ物」の摂取量が大きく低下する時期を幸いにも経験していない。白鵬は「白い食べ物」の恩恵を着実に享受し、バランスの取れた体質形成ができたと推察できる。

白鵬は、好き嫌いがなく、来日してからも日本の食生活に順応し、バランスの取れた食生活を送ることができる根底には、モンゴルで培った味覚の感知能力があるのではないかと考える。舌にある味蕾細胞の中の味細胞は新陳代謝が活発で30日で新しい細胞に生まれ変わるといわれ、この新陳代謝に欠かせないのが亜鉛である。また、子供の健康な成長においては、細胞分裂が活発な成長期の子供には亜鉛は不可欠といわれている。亜鉛が不足すると身長、体重が正常に増加しない成長遅滞になってしまうという。亜鉛がインスリン様成長因子(IGF)の働きを補助し骨の成長を促進しているという研究²⁾があることから、白鵬は順調な成長ができたと推察できる。このように、白鵬は、モンゴルでの食生活で有用なミネラルを多く含有するアロールやエーズキーをはじめとした「白い食べ物」の恩恵を享受できたことによって、バランスの取れた体格形成ができ、しかも好き嫌いのない体質を形成できたものと推察できる。また、来日後、急激な体重増加を強いられる中で、均整の取れた順調な体格形成に成功したと考える。

2 入門後の食環境から

2000年12月の入門当初、身長175cm、体重68kgと新弟子検査に合格する体格にはなかったことから、ちゃんこの残り汁とともに丼4杯のご飯、1Lの牛乳、そして、プロテインを摂取し、2か月後の新弟子検査では身長180cm、体重80kgの体格に成長することができた。2004年以降、急激な体重増が「睡眠時無呼吸症候群」を引き起こしたが、この病気を克服し、関脇、大関、横綱へと昇進を果たしている。2014年10月末の宮城野部屋における聞き取り調査によると、白鵬はトレーナーから食生活についてアドバイスを受けている。トレーナーは、横綱としての重圧に耐え、怪我をせずに、横綱としての責任を果たすことができるよう精神力や体力の維持に必要とされるマグネシウムや亜鉛、硫黄の摂取³⁾を奨めている。

特に注目したい栄養素の中に硫黄がある。硫黄を多く含む食材は、メチオニン、シスチ

ン、システイン、シスタチオニン、タウリン等の含硫アミノ酸を多く含む食材である。この食材には、牛肉、羊肉、牛乳、小麦粉、大根やニラ、玉ねぎなどがあるが、肉類で含硫アミノ酸を摂取する場合は、他の野菜と組み合わせて摂取することが効果的とされている。硫黄の主な働きは、ビタミンB群と共に糖質・脂質の代謝に働きかけ、有害なミネラルの蓄積を防ぐなどの有益な働きをするという。さらに、体内の代謝を活発にして毒素を取り除く働きもあることから、体力の低下を抑制するには硫黄は欠かせない栄養素といえる。また、含硫アミノ酸欠乏は、皮膚炎やしみ、吹き出物の原因となるほか、爪がもろくなったり、脱毛、関節痛といった症状を起こす可能性があるため、白鵬が含硫アミノ酸を含む食材を摂取できるよう食事内容を変更するなどして対応したことは理にかなっている。

また、マグネシウムは筋肉の動きを調整したり、神経の興奮を鎮めたりする働きがあり、重要なミネラルである。「脳も活性化し瞬時の判断力につながる」、「肉体的にも長く相撲が取れる身体になってきた」と心身ともに良い影響が出るのである。カルシウムとマグネシウムの組み合わせには鎮静作用もある。集中力が欠けることに対しても役立つことになる。つまり「精神的に平常心を与えてくれ、余分な筋肉の緊張を取り除いてくれる」という働きがある。

横綱という重圧の中でもたらされるストレスは身体的・精神的な影響があることが推察できるが、こうしたストレスは日常の食事によって栄養素であるビタミン、ミネラルそして含硫蛋白質を摂取することによって緩和でき、日常の食生活改善が横綱白鵬の強さを形成しているといえる。

注記

- 1) 白鵬翔『相撲よ!』角川書店、2010年、54-55頁
- 2) 小澤修・高井信治・花井淑晃・徳田治彦「骨代謝における亜鉛の役割の解析」『ソルト・サイエンス学術財団平成17年度助成研究報告集Ⅱ』（2007年）、79-84頁
- 3) 『スポーツニッポン新聞』2013年5月27日

第2節 教育環境がもたらした人格形成に関する考察結果

1 モンゴル時代の教育環境から(両親及び家族による家庭教育から受けた影響)

先にも述べたが、都会に暮らしたダヴァにとっては、遊牧民であるモンゴル人の伝統的生活教育の内容を享受、経験するのは日常的、環境的には難しかったが、地方に居住する親類の家(ゲル)の近くに家族とともに移動式のゲルを持ち込み、生活を共にすることで、親や祖父母が幼少期に体験したであろう生活教育内容を体験することができた。特に、野生の狼との遭遇経験はダヴァに大きなインパクトと影響を与えた。草原の神として崇めら

れる存在でもある狼の厳しい野生の視線に威圧されたダヴァはまさしく恐怖心と闘っていたに違いない。このような都会では経験できない体験こそが、ダヴァの人格形成に大きな影響を与えたといえる。狼との遭遇について、白鵬自身が何度もその時の情景を詳細に語り、自身の書籍でも記述していることからいかに大きなインパクトを受けたかがわかる。家訓、そして民話や寓話から学んだ摂理や教訓を白鵬がとても大切にしているのは、まさしくモンゴルでの家庭教育の影響が大きいと考えられる。

2 来日後の自己学習環境から

(1) 発達の最近接領域論による考察

白鵬にとって来日後の環境的变化は大きかった。これまでの聞き取り調査の中で自身が強く変化を意識したのは以下の3点であった。第1に尊敬し溢れんばかりの愛情を注いでくれた両親と離れ孤独感を感じたこと。第2は摂津倉庫での稽古期間において最後までスカウトされず、大きな挫折感を感じたこと。そして何よりも大きな第3の変化は、言葉を理解できない世界へ移り住んだことである。これら3つのネガティブな感情体験もまた、白鵬を成長させる根源として大きな役割を果たしているのではないか。

白鵬の来日後の成長・発達を考察するにあたって、ロシアの心理学者ヴィゴツキー(Vygotsky)(2001)が晩年に提唱した「発達の最近接領域(zone of proximal development: 以下、ZPDと表記)」論は有益な示唆を与えてくれる。

ZPDとは、一般的に「個人で問題解決する現在の発達の水準と、指導者がいたり、より有能な仲間と協働で問題解決するときに現れる潜在的水準との差分である」(ヴィゴツキー)¹⁾と理解されている。ZPDについて、アメリカの心理学者ホルツマン(Holzman)(2008)²⁾は、それを集合的活動によって「頭一つの背伸びが可能となる領域」と解釈すべきであると主張している。つまり、指導者や仲間と「ともに」活動するなかで、いまある自分を超えて別の自分になることのできる領域(プロセス)が、ヴィゴツキーのいうZPDであると述べている。そして、その領域では「模倣」という営みが重要になるという。人間は、すべてのものを模倣するわけではない。いまの自分の水準では不可能であるが、その水準になりたいと憧れるものを模倣する。そのような模倣は集合的活動の中でこそ生じるものであり、それが「頭一つの背伸び」の領域を創り出すのであると、ホルツマンはヴィゴツキーに依拠して論じている。

さて、ヴィゴツキーとホルツマンのZPDの観点から見ると、来日後のさまざまなネガティブな感情体験は、白鵬が「成ろう」とする対象を明確に自覚する契機になったと考え

られる。モンゴルの豊かな大地と豊かな家庭教育のなかで育った白鵬は、苦しい稽古や日本での日々のなかで、父の姿や祖父母の姿、さらにはチンギス・ハーンを、自らが模倣する対象として強く自覚したのではないだろうか。父のようになろうとすることは、いまの自分でありながらも新しい自分に「成ろう」とする創造的模倣の営みである。モンゴルでの経験が、「頭一つの背伸び」を可能とする領域を形作ったと考えられる。

一方で、新たに歩みをはじめた相撲界のなかでも、模倣の対象が存在した。それは、親方や兄弟子、大鵬関である。教えを受けるためには言葉を理解しなければならない。文字、言語を獲得するためには書を読まなければならない。何よりも逃避することが簡単には許されない異国というネガティブな環境の中で生きなければならない。親方を軸として女将さん、関取、兄弟子、同期、後輩が混在しながら生活を共にする場(小さな社会)である相撲界は、白鵬にとって、いわば自己変容のための試練の場であり、集団的活動の場であったといえる。そのような環境のなかで目指すべき憧れの対象を抱き、「頭一つの背伸び」をする領域が形作られ、日々の稽古に邁進したのだと考えられる。

来日までの家庭教育、そして来日後の相撲部屋での生活という集合的活動の場で、ネガティブな感情体験のなか、自分の成ろうとする姿を見据え、稽古を重ね続けたことで、新しい自分へと白鵬は自己形成を遂げたのではないだろうか。白鵬が「夢」という言葉を大切にすることも、今ある自分でありながら、その先の新たな自分に「成ろう」とする営みを実践し続けてきたからだと考えられる。その意味で、来日後のネガティブな感情体験は、自分が目指し「成ろう」とする対象を、その経験のなかから明確に自覚する機会になったのではないだろうか。つまり、仮説で述べた高い向上心を最近接領域論で考察すると、夢という言葉に隠された、頭一つの背伸びをする領域を具体的に形成、自己生成できたことが、白鵬の知の根源であると言える。

(2) 多重知能の理論による考察

これまで知能というものは、たったひとつの指標「IQ」によって示されるものと信じられてきた。しかし、人はそれぞれ異なった能力を持っている。勉強が得意な人もいれば、運動の得意な人、音感の良い人もいる。アメリカの発達心理学者ハワード・ガードナー(Howard Gardner)(2001)は人間には7つの別個の知能が存在するという。それらは、言語的知能(言葉を扱う)、論理数学的知能(数、記号、図形を扱う)、音楽的知能(リズムと音のパターンを扱う)、身体運動的知能(身体と運動を扱う)、空間的知能(イメージや映像を扱う)、対人的知能(他人とのコミュニケーションを扱う)、内省的知能(自己とその精神的リ

アリティーという内的側面を扱う)などであり、知能は単一ではなく、複数あるという考え方である。モンゴル時代の学校教育環境において勉学面における興味関心が決して強くなかったダヴァだが、モンゴルの家庭教育、とりわけ毎夏、家族親類と過ごしたゲルでの生活から学んだことは少なくなかった。ここでは多重知能の理論によって、ダヴァの成長を考察してみる。まず、知能について、筆者はハワード・ガードナーの言葉を引用し「情報を処理する生物心理学的な潜在能力であって、ある文化で価値のある問題を解決したり成果を創造したりするような、文化的な場面で活性化されることができるようなものである。」³⁾と定義したい。ここから示唆されるのは、知能とは見たり教えられたりするものではないという概念である。言い換えると、知能とは、潜在能力のことであり、神経的ともいえる潜在能力である。この潜在能力が活性化されるか否かは、個人や家族、周囲の環境、教師などによる個人的な関与と決定に大きく影響される。同時に、知能のプロフィールには、個人差があるということも理解しておかなくてはならない。私たちの知能の組み合わせはそれぞれに異なり独自のバランスを構築する。そして、どのように自分の知能を使いこなすかを決めるのは、知識量や計算力の問題ではなく価値の問題であるということが、重要な視点である。知能を狭義の概念に拘束することなく人間の持つ潜在能力の繋がりを見ると、少年ダヴァはモンゴルの家庭教育で、またチンギス・ハーンを尊敬したことで、何よりも来日後、逆境ともいえる環境の中で自己を見つめながら潜在能力を研ぎ澄ましていくことが出来たのではないだろうか。逆境とは、ネガティブな感情体験に他ならない。自己を見つめながら潜在能力を研ぎ澄ましていくことは、自分が目指し「成ろう」とする対象を、その経験のなかから明確に自覚できること、つまり成長への努力による能力の活性化ができることでもある。多重知能の理論による考察結果は、発達論の最近接論での考察結果とも一致する。

(3) 広い人間関係の中で培われた自己薫陶

白鵬の著書に、自身が幼少期から教えを受けていた家訓が紹介されている。「1. 嘘をつかない。2. 何事も真実を見極める。3. みんなに優しく。4. 誠意をもって人と接する。5. 土俵にあっては厳しくあれ、土俵を降りたらやさしくあれ」⁴⁾。相撲の世界に入ってから、この家訓の意味について深く考えるようになったと自身が述べているように、白鵬は両親から教えを受けたこの家訓が持つ意味を逆境の中で熟考するようになり、人としてのあり方、そして品格について自己を戒めていることがわかる。つまり、来日後に培われたと思われがちな教養と品格は、モンゴルでの家庭教育によって育まれた芽が自身の

努力と広い人間関係の中で醸成されていると言っても過言ではない。ラルフ・ウォルドー・エマソンは「人格は知性より上に位置する。」⁵⁾と言っている。白鵬を人格者だと言う人は少なくない。その根拠になっているのは、上記の家訓にあるように人としての生き方、在り方を日々自問する姿勢を大切に自身の営みに他ならない。

白鵬は「山が高いからといって引き返してはならない。行けば必ず超えられる。」⁶⁾というモンゴルの格言を自身による著書の最後に綴っている。この山とは、先に述べたように、今ある自分でありながら、その先の新たな自分に「成ろう」とする営みを意味すると同時に、模倣の対象である尊敬できる存在をも意味しているのだろう。

3 総論

仮説を様々な視点から検証し考察を進めてきた。先にも述べたように、決して恵まれていたとはいえない学校での学習環境は白鵬の知性や教養面の成長を促す大きな要素にはなっていなかった。ヴィゴツキー、ホルツマンの理論からも草原でのゲル生活、日々両親から受けた薫陶、両親の教育観こそが白鵬の感性と能力を大きく育んだといえるだろう。両親家族から十分な愛情を注がれ、興味あることのみで没頭できる環境に育ったことも幸いした。相撲という世界でのネガティブな試練もまた、白鵬の闘争心を強く醸成した。そこでの知恵と研究熱心さは、興味あることに没頭できる環境に育ったことと、一度足を踏み入れた相撲の世界で評価されなければ親に顔向けできないという、名家に育った白鵬ゆえの強い思いに支えられている。何よりもゲル生活で学んだ「生の尊厳」を支配する規則や行動、態度への関心、これこそが目標達成のためには緻密な分析と反省を怠らない白鵬の知性と熱心さの根源であるといえよう。

本研究によって明らかになった白鵬の逆境に負けない自己生成力。その先の新たな自分に成ろうとする営みと頭ひとつ上にある模倣対象の存在。感謝と畏敬の念を怠らない生き方を育み、何よりも自己成長の根源となったモンゴル家庭教育と、これを代表するゲルでの共同生活からの学び。不便さと共存している生きるための知恵と伝承された教訓。そして、何よりも尊い家族愛の大切さ。日本人以上に日本人らしいと言われる白鵬の生き方を、私たち日本人は今一度、再考する必要があるように思えてならない。

注記

- 1) Vygotsky, L. S, Mind in Society: Harvard University Press, 1978, p.86
- 2) Lois Holzman, Vygotsky at work and play: Routledge. New York, 2008, P.18
- 3) Howard Gardner(松村暢隆訳)『MI:個性を生かす多重知能の理論』新潮社、2001年、47頁
- 4) 白鵬翔『相撲よ!』角川書店、2010年、186-187頁
- 5) Coles, R.(常田景子訳)“The moral intelligence of children.” New York Random House, 1998, 『モ

ラル・インテリジェンス』朝日新聞社、1998年、1頁「エマソンの言葉を扉に」から引用
6) 白鵬翔『相撲よ!』角川書店、2010年、187頁

第3節 白鵬の日本語に見る「強さ」

白鵬にとって日本語は、異国の地で飛び込んだ相撲界に定着するために、そしてそこで強くなって生き残るために必要不可欠なものであった。それこそが日本語上達の強い動機付けになったことは既にみたとおりである。一方で、日本語の上達は、白鵬に夫人との結婚、後援会や相撲界周辺の人々との交流、さらには各界著名人との交流と、白鵬の世界を広げることになった。白鵬が安心して相撲に打ち込める環境は、自身の日本語上達とともに手に入れたものである。

第2章第3節でみたように、白鵬の日本語も「横綱らしさ」を印象付ける一助になっている。曙、武蔵丸、朝青龍、白鵬、日馬富士、鶴竜とこれまで6人の外国人横綱が誕生しているが、その中で白鵬はもっとも外国人と意識されることなく日本人に受け入れられているようだ。受け入れられている理由には白鵬本人の人格の素晴らしさが根底にあるのは間違いないが、白鵬の使う日本語が周囲の人々の白鵬に対する印象をプラス方向に向ける働きをしているのは間違いないだろう。杉山邦博・宮田修¹⁾によれば、「角界で、白鵬に期待を寄せている部屋の親方が多い／部屋という垣根を超えて、白鵬にいろいろな助言を与えたり、また彼の稽古場に、自分の弟子を通わせている」。前述のように白鵬が近年多くの対談相手に恵まれていることも同様である。これらはいずれも、白鵬が日本人に受け入れられ、それが人を集める強い力となっていることを物語っている。人が集まれば、知恵や助言を得ることができ、応援の後押しも受けられる。それらが白鵬の強さを形作る一部になっているのだとしたら、白鵬の日本語も白鵬を強くした力の一つとってよいだろう。²⁾

注記

- 1) 杉山邦博・宮田修『土俵のチンギス・ハーン 白鵬』新風舎、2007年、144頁
- 2) 語学面(日本語)における本研究において、データ解析に際し、以下のアプリケーション/システムを利用した。いずれも無償で利用可能なものである。開発者に感謝したい。
 - ・praat(linux版)=開発者: Paul Boersma and David Weenink (Phonetic Sciences, University of Amsterdam)
 - ・日本語文章難易度判別システム alpha版=開発者: 科研費研究課題番号25370573「読解教育支援を目的とする文章難易度判別システムの開発」(代表者: 李在鎬)

第4節 体力面と心理面のまとめ

1 白鵬の体力についてのまとめ

本研究では白鵬の心技体のうちの「体」すなわち体力の一面を明らかにしようとした。

体力面から見た結論は、

①身長に関しては、「十両昇進と同時期に身長伸びが止まる」傾向がある。

②体重に関しては、「十両昇進時付近で最大体重増加量」を示す。

近年の横綱達は上記二点を同時に満たしている。横綱以下の力士達はこれらの傾向が三段目で表れているので、横綱は他の力士とはレベルが異なる体力を備えていると言える。白鵬は他の横綱と変わらない身体的な成長をしており、他の横綱と比較しても体力的に明らかな違いは見られなかった。体力の差異と勝負との関連性はこれ以上踏み込んだものは事実としては認められないが、白鵬の競技実績が他の横綱と比較して特別に高いのは、体力以外の因子である「心」すなわち心理面の因子が大きく関連してくるのではないかと推察する。

2 白鵬の心理面におけるまとめ

心理面では、DIPCA. 3 ならびに面接調査によって、白鵬が自分自身の心理的な課題や難しさを認識しており、そのような自己理解の高さが白鵬の強さの一要因になっていると推察された。前項の体力面における考察と合わせみると、他の横綱の DIPCA. 3 のデータがないので横綱同士の比較による言及はできないが、宮城野部屋の力士達との比較から、白鵬の精神的な強さのレベルにおいて「勝利意欲」と「集中力」以外の 10 項目は明らかに高いことがわかり、この全体的なレベルの高さが、言い換えれば精神的なバランスの良さ(健康度)が、白鵬が勝利数及び勝率において頭抜けた結果を残した大きな因子だと推察する。「集中力」は他のグループと比べて決して低いレベルではないが、白鵬のこれまでの勝負において他と比べ明らかに高いレベルが必要とされない項目であると思われる。低いレベルとなって現れた「勝利意欲」においては、白鵬が殊更意識的に勝負にこだわらない姿勢を言葉にしているところから、本論文の DIPCA. 3 の調査にもその意識的な勝利に対する考え方のこだわりが、数値となって表れたものと推察する。

横綱は、無双な強さだけでなく大相撲を代表する品格をも兼ね備えなければならない。品格は勝負だけにこだわってでは達成できないことは自明である。特に「勝利意欲」に関して低い値を示す結果として表れたが、白鵬の場合はそれが品格を形成する因子だと推察する。本研究の DIPCA. 3 の調査において、白鵬の特徴は高い精神的バランス(高い精神健康度)を持つことなので、これが白鵬の高い競技力と密接に関連していると本研究では結論付けたい。

第5節 総合力の発現(仮説の実証)

1 天分を引き出す自己努力

白鵬は体が柔らかで、対戦する力士はみな「ゴムを押しているような感覚で、力を吸収する」というか、押しても力が十分に伝わらない¹⁾と言う。ゴムのような白鵬の体は両親から受け継いでいるが、その体の長をさらに強めたのは、幼年時代と少年時代のモンゴルにおける食生活である。白鵬はモンゴルで過ごした15年間の幼少年時代に通算45か月間草原のゲルで暮らし、「白い食べ物」(乳製品)三昧の生活を経験した。本研究においては、白鵬が草原で生活技術を体得し、乳製品を中心に摂取する食生活によって獲得した体質が来日後の基礎を育んだと結論づけている。白鵬は、モンゴルでの食生活で有用なミネラルを多く含むアロールやエーズキーなどの乳製品の恩恵を受けてバランスの取れた体格を形成し、しかも好き嫌いのない体質を形成できた。

このモンゴルで培った味覚の感知能力が、来日しても好き嫌いなく日本の食生活に順応してバランスの取れた食生活を送ることができている根底にある。また、モンゴルにおける食生活が入門後の厳しい環境に耐え抜く基礎体力を養っている。

何事も最初が肝心と言われるが、白鵬の場合入門時の状況が決定的な意味を持ったと考えられる。宮城野部屋という少人数の力士しかいない部屋に入ったことと、熊ヶ谷親方(現宮城野親方)が師匠になったことが重要である。小さい部屋なので親方や兄弟子たちとの間が極めて親密で、力士ひとりひとりの素質を伸ばしやすい環境であった。そのうえ入門初期に熊ヶ谷親方が下した適切な指導が、その後の白鵬の伸長を決定づけた。その一つは、新弟子に合格させるための体づくりである。「稽古をすると体重が落ちる。稽古はしなくてよいから、一生懸命に食べる!」と言い聞かせて、ひたすら食べさせ、たくさん眠らせた²⁾。その結果入門時(2000年12月末)175cm、68kgの体は、2001年3月の新弟子検査時に180cm、80kgとなり、無事検査に合格した³⁾。もう一つは、「四股」「鉄砲」「すり足」という基本動作に「腕立て伏せ」を加えた鍛練を徹底的に教え込んだことである⁴⁾。この二つの教えが白鵬の相撲人生(まだ半ばであるが)の柱になり、ちゃんこ鍋はもちろんのこと、あらゆる食べ物を受けつけ、大横綱となった今に至るまで、必ず基本動作を熱心に繰り返している。

なぜ白鵬は師匠の初期の教えを忠実に履行でき、その体づくりと相撲道の原点にしているのだろうか。本論文の教育をめぐる考察と考察結果で明らかにしているように、白鵬はその家庭教育や草原での生活を通して安定した精神を養い、興味のあることに没頭できる性格を育んだ。草原のゲル生活で学んだ「生の尊厳」を支配する規則・行動・態度への

関心が、白鵬の逆境⁵⁾に負けない闘争心を生み、名家を構成する両親の教育観が、足を踏み入れた相撲の世界で評価されなければ親に顔向けができないという強い思いを白鵬に持たせたのである。

白鵬が大事にしている父親の言葉がある。「勝つ俺が焦っていないのに、負けるお前がなぜ焦る」、苦境にあるときこそ冷静に自分を見つめるべきだ、という意味である⁶⁾。2005年7月の名古屋場所中に左足首靭帯を損傷して途中休場をし、次の9月秋場所では関脇から前頭筆頭まで番付を落として、白鵬は自暴自棄な気持ちになっていた。そのときに父親からこの言葉をかけてもらい、再び闘志が湧いてきて足首が癒えてからは激しい稽古に励んだ。怪我に加えて白鵬にとって今や宿痾となった病は、「睡眠時無呼吸症候群」である。急激な太り過ぎが直接の原因だが、CACPという呼吸装置をつけてから十分に睡眠がとれるようになった。睡眠時に呼吸装置を付けるようになったのは前述の左足首靭帯損傷の数ヶ月前のことだが、白鵬は父親の言葉や医療器具を味方にして体と心を強くしていった。その後、白鵬は2006年9月秋場所で右膝を負傷し、次の11月九州場所前にも怪我をしたため、同場所は全休してしまった。しかし、2007年1月の初場所には復帰し、西大関の地位で10勝5敗の成績を挙げている。その後は15場所にも及ぶ一人横綱の時期を含めて、2015年7月場所まで白鵬は一度も場所を休んでいなかった。小さな怪我は何度もしているが、それらを克服しながら土俵を務めているのである。「怪我をしないのも実力のうち」と言うが、ここにも白鵬の強さが現れている。

白鵬においては、日本語能力の高さが相撲の強さに結びついている。現在白鵬の話す日本語は日本人の話す日本語に遜色ないが、上達の速度も速かった。白鵬自身の能力もさることながら、入門時の状況に恵まれていた。相撲協会は平成22年2月に「一部屋に外国出身者一人」という申し合わせを行ったが、それ以前にはそのような制限が無かったために、白鵬が入門したとき宮城野部屋には入門後1年経った同じモンゴル出身の兄弟子龍皇が居た。日本語がまったくわからなかった白鵬に対し、龍皇が親方や兄弟子の話を通訳するなど日本語を覚える手助けをし、生活万般についても行動を共にして、相撲社会に馴染むことと日本語能力の向上とが良循環を形成した。

白鵬の日本語習得過程とその結果得られた日本語能力については本論文で詳しく分析しているが、白鵬にとって日本語は異国の地で飛び込んだ相撲界に定着し強くなって生き残るために必要不可欠のものであった。それこそが日本語上達の強い動機付けになったが、一方において日本語の上達は、夫人との結婚、後援会や相撲界周辺の人々との交流、各界

著名人との交流など、白鵬の世界を広げ、安心して相撲に打ち込める環境を作ったのである。白鵬の日本語は「横綱らしさ」を印象付ける一助になっているが、彼の使う日本語が周囲の人々の白鵬に対する印象をプラス方向に向ける働きをしている。白鵬が日本人に受け入れられ、それが人を集める強い力となっており、人が集まれば、知恵や助言を得ることができ、応援の後押しも受けられる。それが白鵬の強さを形作る一部となっていると考えられ、白鵬の日本語も白鵬を強くした力の一つと見なし得る。

2 心技体の充実

白鵬が心から尊敬している横綱は、双葉山関と大鵬関である。2007年5月に白鵬は横綱に昇進したが、そのとき大鵬親方は「白鵬よ、横綱への昇進は宿命なのだよ」と語ったという⁷⁾。その言葉を受けて白鵬は、その宿命を全力でつとめようと誓ったのである。

双葉山関との出会いは、白鵬の関脇時代に大阪の相撲愛好家が集う東西会の長老に「君は双葉山にそっくりだ」と言われ、双葉山関のビデオを見るように勧められたときだ⁸⁾。それ以来、白鵬は双葉山関のビデオを繰り返し見、著書『相撲求道録』を熱心に読んだ。それらから学んだことは、「後の先」の立会いであり、中国の古典に出てくる「木鶏」の話である。双葉山関の連勝が69でストップした1939年1月15日の夜に、同関が安岡正篤先生に「未だ木鶏たりえず」という電報を打ったという挿話は余りにも有名だ。双葉山関は「木鶏」を目標に相撲道に精進したが、それが「泰然自若」「不動心」という土俵態度に現れ、なおかつ現役時代の生活万般にも及んでいたであろう。

このような双葉山関の「心」の前提になっているのが、「技」と「体」に関連する圧倒的な稽古量であろう。双葉山関は横綱在位中、合併巡業では大関以下の幕内力士10人ほどを待たせで続けざまにぶつからせ、1時間以上、1人だけで受けるという稽古を毎日行っていたという⁹⁾。

白鵬が尊敬するもうひとりの大横綱大鵬関は、現役時代1日300回の四股を踏み、1日2,000回の鉄砲を行ったという¹⁰⁾。

白鵬も入門後の2年間位は毎日が猛稽古で、倒れたら頭から水をぶっかけられ、それでも泣きながらついていったという¹¹⁾。しかし、十両となり幕内となってからは双葉山関や大鵬関の稽古量には遠く及ばないと、本人自身が自覚している。白鵬の身体能力は類いまれだと言われており、事実それは科学的な計測でも裏づけられている¹²⁾。踏み込むときの力の強さ(瞬発力)、ゴムのように相手を受けとめる不思議な吸収力は、しなやかに動く上半身をどっしりと下半身が受けとめていることで生まれるという。上半身の筋肉や腹筋に

力を入れずに下半身、特に太ももの筋肉に強い力が加わり、吸収力を支えている。NHK スペシャル(2010年11月放送)では太ももの筋肉を若手力士と比べているが、白鵬の太ももは均等に発達しているが、若手力士のそれには偏りが見られる。太ももの筋肉の差異には天性の相違もあるだろうが、番組では稽古で鍛えられて均等に発達したと解説している¹³⁾。白鵬の身体能力も稽古によって磨かれているのである。なお、瞬発力に関しては陸上短距離の王者ウサイン・ボルト並みの全身反応時間(スタート時の反応時間:ボルト0.146秒、白鵬0.149秒)を実証しているが、反動をつけずに動き出せる能力を持っているためである¹⁴⁾。

白鵬は、このような身体能力に加え、初土俵以来基本に忠実な稽古を重ね、技を磨いていった。得意技は右四つ、寄り、上手投げだが、白鵬の強みは、「型を持ち、型にこだわらない」ところにある。自分に不利な体型でも、そのままの型で、あるいは巻き替えて、最後は勝利する。この相撲は、全盛期の大鵬関を彷彿とさせる。これまで心技体のうち、“技”と“体”について述べてきたが、問題は“心”である。宮城野部屋のトレーナーである内藤堅志氏は「白鵬のメンタルは決して強くない」と言いきっている¹⁵⁾。本来「心技体」は一つひとつ切り離して分析し、それらを足し合わせるものではない。心技体は複雑に絡みあって統合された形で土俵上において発揮されるが、本章第4節第2項で述べているように、白鵬の精神的なバランスの良さがその総合力となって表れている。

白鵬自身「最大の敵は、自分だ」と語っている¹⁶⁾が、この点は心理分析の結果、自己理解の高さが白鵬の強さの一要因になっていることと相通ずるのである(本章第4節第2項)。

注記

- 1) 日本経済新聞(2015年1月11日付け)、元兄弟子西岩親方(元幕内光法)が語っている。
- 2) 熊ヶ谷誠志『白鵬「山」を越える男』主婦与生活社、2010年29-30頁
- 3) 上掲書、28頁、31頁
- 4) 上掲書、62頁
- 5) 本論文第4章第2節「2 来日後の自己学習環境から」によると、白鵬は次の3点を来日後の環境的变化によるネガティブな感情体験としている。①両親から離れ孤独感を感じたこと②摂津倉庫での稽古期間に最後までスカウトされず、大きな挫折感を感じたこと③言葉を理解できない世界へ移り住んだこと
- 6) 白鵬翔『相撲よ!』角川書店、2010年、132頁
- 7) 小松成美『横綱白鵬、試練の山を越えてはかなる頂へ』学研教育出版、2013年、197頁
- 8) 白鵬翔『相撲よ!』角川書店、2010年、116頁
- 9) 上掲書、126頁
- 10) 上掲書、108頁
- 11) 熊ヶ谷誠志『白鵬「山」を越える男』主婦与生活社、2010年、157-158頁
- 12) NHKスペシャル「横綱白鵬～“最強”への挑戦～」2010年11月28日放送では、白鵬の身体能力についてさまざまな視点から科学的に分析している。
- 13) 上掲番組における解説
- 14) 上掲番組における解説

15) 内藤堅志『白鵬のメンタル』講談社、2013年、132頁

16) NHK スペシャル「横綱白鵬～“最強”への挑戦～」2010年11月28日放送

(補論)本研究が繋ぐ学校法人拓殖大学人づくりへの影響

本研究では、「平成の大横綱」と呼ばれ、今なお大相撲史上に残る数々の記録を更新中の白鵬に関して、その強さの秘密を総合的に分析してきた。この研究内容は、学校法人拓殖大学が擁する大学や高校が目指し、現に実践している人材育成の在り様とどのように繋がりが得るのであろうか。以下、補論として述べてみたい。

第1節 設置校の人づくりに関わる教育方針

学校法人拓殖大学は、直系の設置校として拓大、北短、拓殖大学第一高等学校(以下「一高」)を有している。本補論においては、それぞれの設置校について、この研究が繋ぐ人づくりへの影響について論ずることとする。まず、各設置校は人づくりに関してどのような教育方針を掲げているのであろうか。

1 学校法人拓殖大学の掲げる大方針

学校法人拓殖大学は創立以来「積極進取の気概とあらゆる民族から敬慕されるに値する教養と品格を備えた有為な人材の育成」を建学の精神としている。従って各設置校はこの建学の精神を大前提として、それぞれの特色に基づいて教育方針を定めている。

2 拓大の教育方針

拓大は建学の精神のもとで、国際性、専門性、人間性を備えた人材の育成に取り組んでいるが、具体的な教育方針は次の通りである。

- ・世界のあらゆる民族・人種との共存、ならびに相互信頼を実現する柔軟な理解力、豊かな受容力を備えた人材の育成
- ・激動する国内外の情勢下にあつて、事柄の本質を冷静かつ的確に把握し、確固たる信念をもって行動するための洞察力と決断力を備えた人材の育成
- ・人間社会が直面する課題の解決に率先して立ち向かう開拓精神にあふれ、かつ、そのために必要な知力と体力を備えた実践的な人材の育成

3 北短の教育方針

北短は建学の精神のもとで、拓大の伝統である開拓者精神を継承し、実践的な知識や技術と豊かな人間性を兼ね備えた、広く社会の発展に貢献できる有為な人材の育成に取り組

んでいるが、各学科の特色を反映した教育方針は次の通りである。

- ・環境保全型農業を基盤とした地域経済を維持・発展させることができる実践的な知識や技術を身につけ、新しい時代の農業及び地域経済を創造・発展させる人材の育成(農学ビジネス学科)
- ・「感動体験こそ教育の原点」を基本理念に、自己表現力・指導力・社会性を身につけ、こどもの豊かな感性を育むことのできる幼稚園教諭・保育士を養成(保育学科)

4 一高の教育方針

一高は、心身ともに健全で、よく勉強し、素直で思いやりある青年を育成する。この教育方針の意図は次の通りである。

- ・生徒一人ひとりに未来を切り拓くための力を身につけてほしい。
- ・この揺るぎない教育方針を基盤とし、大学進学のために先を見据えた教育をおこない、生徒を育成する。

第2節 海外に開かれた大相撲

大相撲はもともと神前で行われ、神道に基づき神に奉納される神事だったことから、国技とみなされているが、法的に定めた公式の裏づけはない。江戸時代からの古い伝統を持ち、国技と言われるにふさわしい神事の要素を維持しながらも、明治時代から緩慢ではあるが国際化の道をたどり始めた。海外巡業は明治時代末期から行われているし、外国人力士入門第1号は、1913(大正2)年である。保守的と言われる大相撲の世界であるが、第2次世界大戦後は、力士としての人材を広く海外にも求めている。十両以上の外国人関取第1号はアメリカ・ハワイ出身の高見山大五郎だったが、その後外国人力士は急激に増えている。ただし、現在3人の横綱がいずれもモンゴル出身の力士で占められているように外国人力士の活躍が目立つこともあり、外国出身の力士には人数制限が設けられている。また、日本相撲協会は大相撲の海外巡業や海外公演にも熱心で、1960年代から継続的に挙行している。このように大相撲では積極的に海外交流を進めており、その環境の中で育まれた逸材が白鵬である。

第3節 白鵬の幼少時代から成人するまで

1 幼少時代から中学時代まで－白鵬のモンゴル時代

偉大な父と聡明な母を両親に持ち、5人兄弟の末っ子として裕福な家庭に生まれた白鵬

は、恵まれた少年時代を送っているが、その環境から鼻もちならない尊大な性格を帯びる可能性もあったはずである。しかし、白鵬はそうはならず、心身ともに健康な少年として2000年10月に来日するまでの15年7ヶ月間をモンゴルで過ごしたのである。白鵬のモンゴル時代の在り様については本研究において多面的に分析しているが、両親・兄弟・伯父などの家族・親族が愛情たっぷりではあるが、決して過干渉はしない対応が白鵬の本来有している性格を良い方に引き出したと言える。幼少期の白鵬は母親に何でも話す明るい子どもだったが、暗いところを怖がる甘えん坊で泣き虫だったようだ。幼少期から第7学年まで一緒だった遊び仲間など友人にも恵まれ、父親の親族と毎夏過ごした草原でのゲル生活を経験し、成長していく。中学校でバスケットボールに熱中し、卒業間際には歴史に興味を覚え優秀な成績を修めたという。このモンゴル時代の生活には、今日の白鵬の強さに通ずる集中力、負けず嫌い、大事にする人間関係などを養った要素がぎっしり詰まっていたのではなかろうか。幼少時から中学校を卒業するまでの成長期の在り様は、人間のその後の人生に大きな影響を与えることは言うまでもない。大学に入学するためには、その後3年間の高校生活が必要だが、白鵬にとっては未知の国日本における試練の時期に当たる。

2 高校生に当たる時期の白鵬—2000年10月から2003年9月まで

白鵬は2000年9月に高等学校に進学したが、その高校に在籍のまま2000年10月に来日した。その後、同年12月に宮城野部屋に入門し、2001年3月場所で初土俵を踏んだ。その間の白鵬の身長と体重の変化は、175cm・62kg(来日時)、175cm・68kg(入門時)、180cm・80kg(初土俵)である。当時の新弟子検査の合格基準は、身長173cm以上、体重75kg以上だったので、入門時の体重では合格できない。そこで熊ヶ谷親方(現宮城野親方)は、体重が落ちてしまう稽古場での稽古はさせずに、たくさん食べてたくさん寝ることを稽古と心得て実行するように白鵬に命じた。食事ノルマをメニュー付けで与えたのである。この作戦は成功して、か細くか弱かった白鵬は見事に成長し、初土俵前の新弟子検査に合格した。

何と白鵬が入門した最初の試練は、ひたすら食べて寝ることだった。白鵬が新弟子検査に合格できたのは、親方の言いつけをきちんと守ったからだだが、僅か2か月で結果を出すのは非常に苦しかったに違いない。この最初の試練を乗り越えることができたのは、入門時のいきさつによる負けじ魂とモンゴル時代に養った成長しうる基礎体力とが、噛み合ったためではなかろうか。

白鵬は初土俵の際の前相撲で勝ち一番出世となり、2001年5月の夏場所では序の口として番付表に初めて四股名が載った。この5月場所で白鵬は3勝4敗と負け越しているが、

その際に熊ヶ谷親方(現宮城野親方)から受けた指導が今日に至るまでの軸となっている。そのときの白鵬にとって最も大切なことは、本物の体を作ることと、ぶつかり稽古で押す力をつけることだとアドバイスしたうえで、次のような指導をしている。

- 1) 20歳になるまで絶対にダンベルなどの筋肉トレーニングをしてはならない。
- 2) 「四股」「鉄砲」「すり足」は相撲に特有の伝統的で理にかなった基本動作であり、これらに「腕立て伏せ」を加えて、徹底的に稽古すること。

白鵬はこの指導を忠実に実行し、場所ごとにたくましく成長していき、体重も90kg(2002年春場所、身長は185cm)、101kg(2003年春場所、身長は187cm)と増えていった。序の口以降白鵬は、西三段目の2002年名古屋場所(7月)において3勝4敗と負け越しただけで、あとはすべて勝ち越しながら序の口、序二段、三段目と順調に出世した。2003年は春場所には幕下(54枚目)に上がり、モンゴルで高校卒業時に当たる2003年秋場所(9月)には、幕下23枚目に達している。もう少しで十両を窺うような地位まで出世したのである。事実白鵬はその2場所後の2004年春場所に、待望の十両に上がっている(東12枚目)。

このように15歳から18歳、ちょうどモンゴルにおいて高校生に当たる時期に、白鵬は初来日→入門→新弟子検査→初土俵(前相撲)→序の口→序二段→三段目→幕下という過程を歩んだことになる。その間、入門をめぐる危機、新弟子検査に達しない体重、負け越しのショック、ホームシックなど、さまざまな困難に遭いながらもそれらを乗り越えてきた。これらの困難の傍ら、体重と身長は着実に増え、力士としての実力も着実に向上し、番付の地位も着実に上がっていった。相撲の世界では、出世という事実がすべてを雄弁に物語るが、その背景について考えてみよう。

- ・ 幼少時から中学時代までのモンゴルにおける生活で育まれた心身が、基礎となって来日以降の心身の成長に影響を及ぼしている。本研究において詳しく考察し分析しているが、食生活、教育、体育の各面で白鵬の精神と肉体の基礎を作り、来日後3年間の心身ともに危うく脆い時期に悪い方に反転することを阻み、逆にプラスに転じさせている。モンゴルによく電話をかけていた甘えん坊で寂しがり屋の白鵬が、故国に逃げ帰らなかったのは、「厳しい稽古に堪えきれずモンゴルに逃げ帰れば、国民的英雄である父親の顔をつぶすことになる」という切実な思いであった。この退路を断った思いが、ともすれば弱気になる気持ちを逆転させ、精神面を強くする動機にもなっている。体重と身長が僅かな間に著しく増え伸びたのも、モンゴル時代に培われた基礎体力が与かっている。

- ・ 白鵬を大横綱に導いたメンタル面の分析は、内藤堅志『白鵬のメンタル』に詳しいが、その中で白鵬のメンタルを支える4点を挙げている。そのうちの2点は、「稽古をし、相撲を研究すること(相撲が大好き)」及び「探究心を持つこと(相撲道・心技体の追究)」である。白鵬は中学時代にバスケットボールに熱中し、レスリングにも熱心に取り組んだ。いずれもわずかな期間に上達し、頭角を現している。また、トランプ、テレビゲーム、ボウリングなどの勝負事でも勝ちにこだわり、勝つまでやめようとしなない。上述の内藤(2013)が挙げている2点、すなわち研究心と探究心がスポーツやゲームに臨む場合にも頭をもたげ、集中力も養っているのではないか。
- ・ 白鵬はきわめて素直な性格で、疑問に思えばその意図や意味を問うが、一旦納得すれば、とことんやり抜く意思を持っている。ちゃんこ料理など食事をしっかり摂ること、相撲の基本動作を徹底して行うこと、「ぶつかり稽古」に励むことなど、ともすれば手を抜きたくなくなることに真摯に向き合い、決して疎かにしない。

以上のような背景があつてこそ、白鵬は来日後、入門から幕下まで出世を続けることができた。

3 大学生に当たる時期の白鵬—2003年10月から2007年9月まで

2003年11月の九州場所に白鵬は西幕下9枚目で、6勝1敗の成績であつた。この好成績に運も重なつて、2004年の初場所(1月)遂に十両に昇進した。待望の関取になつた白鵬は、体重134kg、身長189cmと、堂々たるお相撲さんの体になつていた。18歳10か月であつた。新十両の初場所で9勝6敗と勝ち越した白鵬は、次の春場所(2004年3月)では12勝3敗で十両優勝し、何とたった2場所で十両を卒業した。新入幕は2004年5月の春場所(東前頭16枚目)であるが、12勝3敗の好成績で敢闘賞を受賞している。同じ年の名古屋場所、秋場所、九州場所はすべて勝ち越し、2005年の初場所には小結に昇進した。この場所の身長と体重は192cm・146kgで、現在に至る身長にまで伸びた。新小結の場所で11勝4敗の成績であつた白鵬は、次の春場所には関脇に昇進している。同年7月の名古屋場所では、中日で左足首のじん帯を痛め休場し、同年9月の秋場所に平幕に後退したが、次の九州場所(11月)に小結に復帰した(9勝6敗)。翌2006年1月の初場所には関脇に復帰し、13勝2敗で殊勲賞に輝いた。同年3月の春場所も13勝2敗で殊勲賞と技能賞を獲得して、場所後に大関に昇進した。新大関で臨んだ同年5月の夏場所は14勝1敗の成績を挙げ、初優勝を遂げている。

このように身長と体重が増え、番付も破竹の勢いで上がっていった白鵬にも深刻な悩み

があった。新関脇になった2005年3月頃には、急激な体重の増加や本場所の厳しい対戦などからくるストレスから大きなイビキをかき、睡眠中に呼吸が止まって良く眠れなくなるという睡眠時無呼吸症候群の症状がピークに達していた。体重が急激に増えた新十両時当たりからこの症状が出ていたらしい。医師の診断でCPAP(シーパップ、Continuous Positive Airway Pressure)という呼吸装置をつけて眠るようになり、それ以来十分に睡眠がとれるようになって相撲も急激に強くなっていった。

白鵬は、大関3場所目(2006年11月、九州場所)の直前のトレーニング中に階段を踏み外して左足親指を剥離骨折してしまい手術をし、九州場所は全休した。かど番場所となった2007年1月の初場所は10勝5敗で凌ぎ、次の春場所(3月)では横綱朝青竜との優勝決定戦に勝って13勝2敗で2回目の優勝を果たした。東大関で迎えた夏場所(5月)は15勝全勝で3回目の優勝を遂げ、場所後に待望の横綱に昇進した。続く同年7月の名古屋場所は11勝4敗、同年9月の秋場所は13勝2敗で4回目の優勝を果たしている。

この間、白鵬は2005年7月頃から結婚を前提に交際していた紗代子さんとの婚姻届を2007年2月に提出し、同年5月長女愛美羽(あみう)ちゃんが生まれた。

上述のように、大学生の時期に当たる白鵬の4年間は、土俵上では幕下から横綱まで昇進し、身長と体重も187cm、118kgから192cm、150kg台まで増えている。このように昇進街道は矢のように早いですが、睡眠時無呼吸症候群で悩み、左足親指の剥離骨折などの苦境も経験している。私生活では日本人女性と結婚し、長女をもうけた。困難に遭いながらもそれらを克服しつつ経過した、何と濃密で充実した18歳から22歳までの4年間であったのだろうか。

第4節 白鵬の22歳に至るまでの成育状況から学ぶ学校法人拓殖大学の人づくり

白鵬は、来日するまで日本とはまったく異なる環境のもとで伸び伸びと育った。その間に享受した食生活、家庭教育、学校教育、草原における暮らしを含めた身体の鍛練、父母・兄姉・親戚・先生・友人などとの人間関係は、本人の心身にわたる人間形成の基礎を作ったことが本研究から明らかとなった。白鵬が小学校に上がる頃にモンゴルの政治経済体制は社会主義体制から市場経済体制へと大きく転換し、経済状況は大きく落ち込み、ストリートチルドレンが激増するなど社会状況も非常に不安定となった。その中であって白鵬は例外的に恵まれた家庭環境に囲まれて成長していったが、通常このような状況は人間形成に大きなリスクを伴うものである。裕福な家庭をめぐる環境を無自覚に享受したうえで、

ともすれば貧しい人々を見くだしがちになる。場合によっては努力を嫌い、怠惰な性格に陥ってしまうかもしれない。ところが白鵬においてはこの恵まれた環境が人間形成に良いかたちで作用し、素直で探究心が強く、負けず嫌いな性格の土台を作ったのである。深い愛情を持ちながらも決して甘やかさない両親や姉妹・縁戚の存在と、白鵬を取り巻く友人や先生の存在が、社会的に不安定な時代状況にもかかわらず、白鵬の性格づくりに多大な良い影響を及ぼした。

設置校を含め拓殖大学に入学してくる大学生や高校生は、どのような幼年から中学生までの時代を過ごしてきたのであろうか。本研究である程度つまびらかとなった白鵬のモンゴル時代と自分の高校に入るまでの生活を照らしあわせながら、今後生きていくうえでの何らかのヒントが得られないだろうか。環境や時代状況が異なるから単純な比較はできないが、来日以降の白鵬の心身にわたる成長の歩みをみると、その基礎をつくったモンゴルにおける人間形成過程が参考になることは確かであろう。

白鵬が来日し宮城野部屋の入門してからの3年間は、モンゴルでは高校時代に当たる。体重と身長が急激に伸び、番付も初土俵から十両直前の幕下まで一気に駆け上がっていった。その背景については既に述べたが、多感な15歳から18歳の時期における白鵬の心身にわたる成長ぶりには、驚嘆するばかりである。体が大きくなり勝負にも強くなっても、心の方がなかなか追いついていかないのが普通だが、白鵬の場合それなりに心も成長しているようだ。一高の教育方針は、「心身ともに健全で、よく勉強し、素直で思いやりある青年を育成する」ことであり、「生徒一人ひとりに未来を切り拓くための力を身につけてほしい」と願っている。この時期の白鵬は稽古に励み、日本語の習得など異国での生活力を高めることに努力したが、このような“勉強”を通じて人格形成も進み、関取(十両以上)への道を切り拓いていった。白鵬が実践した歩みの跡は、教育方針と重ね合わせて一高の生徒には良い刺激になるであろう。

大学生の年齢に当たる18歳後半から22歳までの白鵬の大成ぶりも、驚異的である。十両から幕内に進み、遂に横綱に登りつめたのである。この間日本人女性と結婚し、子どもを設けている。濃密な4年間であるが、何の障害もなく順調に出世したわけではなく、この短い期間に怪我(左足親指の剥離骨折)をしたり、睡眠時無呼吸症候群で悩んだりもしている。しかし、これらの障害を克服して身についた強さを取り戻し前進していくところが白鵬らしい。怪我は2006年11月の九州場所直前にしてその場所を全休し、翌年1月の初場所が大関のかど番場所となったが10勝5敗で凌いでいる。怪我の回復が早かったためだ

が、そもそも白鵬は古傷に悩まされていても怪我で休場したのは初土俵以来僅か2場所(2005年7月場所の途中休場と2006年11月場所)だけである。この事実は、単に怪我に強い基礎体力や地力があるという理由だけでは到底説明しきれない。初土俵の際に熊ヶ谷親方(現宮城野親方)から言われた相撲の基本となる「四股」「鉄砲」「すり足」を大横綱になった今日まで毎日徹底的に稽古していることが、怪我に強く、怪我をしても治りが早い体質を作りあげている。また、精神面でも内藤堅志(2013)が詳しく分析しているように、白鵬は心が弱くても「ふんばる力」を持っている。これらのことが総合的に作用して、怪我で休場することが極めて少ない白鵬の今日がある。

睡眠時無呼吸症候群に関しては、睡眠時に呼吸装置(シーパップ)を装着するようになってから安眠できるようになったが、この状態は現在まで続いている。安眠はできるものの装置をつけること自体大きなハンディキャップになっているが、それをものともせず強さを保っているのは、心の面のみならず体の面でも「ふんばる力」を持っているからであろうか。

拓大の教育方針は「国際性、専門性、人間性を備えた人材の育成」であり、北短の教育方針は「実践的な知識や技術と豊かな人間性を兼ね備えた、広く社会の発展に貢献できる有為な人材の育成」である。プロの相撲界で育った者と大学生とを単純に比較することはできないが、白鵬が経験した4年間は、まさに拓大や北短の教育方針を地で行く厳しい期間であったと言えるであろう。白鵬はモンゴルの人であり、日本人をはじめ国籍の異なる人々と相撲を取ってきた。夫人は日本人であり、家庭は国境を跨いでいる。大相撲の海外巡業や海外公演では、力士を代表して国際交流や親善に努めている。高い専門性(実践的な知識や技術)は、力士としての最高峰に登りつめたことが証明している。白鵬が培ってきた豊かな人間性は、白鵬に関するさまざまな著作や報道ぶりからも明らかである。この白鵬研究に携わっている執筆者や研究を支えている多くの関係者は、実際に白鵬と何度も接して一様に白鵬の豊かな人間性を認めている。執筆者陣が白鵬と接するようになったのは2012年からであるが、白鵬の人間性は大学生に当たるこの4年間に陶冶されていったと言える。

第5節 白鵬と学校法人拓殖大学

白鵬と学校法人拓殖大学との縁は、拓殖大学企画アドバイザーを務める出村明弘氏の仲介で、2012年10月に白鵬が北短を訪問し、モンゴル原産シーベリーを記念植樹したこと

から始まった。これを契機に白鵬が少年時代バスケットボールの名選手だったこともあり、白鵬は北短女子バスケットボール部の名誉監督に就任し、現在に至るまで数度にわたり直接指導をしている。

また拓大との関係では、白鵬は2013年6月に客員教授に就任し、「世界の中の日本」で講義を行っているが、2014年も客員教授を継続し、「産業と人間」で講義を行っている。北短では、学生の前で何度か講話を行っている。このようなことから、白鵬は拓大の文京キャンパスと八王子キャンパス、北短の北海道深川市にあるキャンパスを頻繁に訪れている。

白鵬から直接幼少時代や入門後の経験をつぶさに聞くことによって、拓大と北短の学生たちは大きな影響を受けている。学生たちが接しているのは、大相撲のあらゆる記録を塗り替えてつある平成の大横綱である。土俵のうえの闘志あふれる姿とは違って、目の前の白鵬は滑舌が良く穏やかな語り口であり、話の内容がすんなりと頭に入ってくる。白鵬は過去と現在を語るだけでなく、未来についても語りかける。色紙に“夢”の文字を書くことも多いが、学生たちには「将来の“夢”を持っていますか」としばしば問う。この問いは、白鵬が苦しい修行時代から、ともすれば苦境から逃げ出したいと思う弱気の心を押さえて目標を立て、それに向かって前進していくという経験を踏まえて出されたのではないだろうか。

白鵬の父はモンゴル相撲のチャンピオンを長年続け、メキシコ・オリンピックでモンゴル史上初めてのメダリスト(レスリング銀メダル)になるなど、国民的英雄である。熊ヶ谷誠志(2010)の文章を引用してみよう。[白鵬は大相撲の世界に飛び込む決心をした時に、あるひとつのことを心に誓っていた。その誓いとは、「自分が厳しい稽古に耐えきれず、モンゴルに逃げ帰ったならば、国民的英雄である父親の顔をつぶすことになる。だから、自分はどんなにつらいことがあっても、絶対にモンゴルに逃げ帰ることはしない!」というものだった。つまり、白鵬は退路を断って、大相撲に自分の人生を賭ける決心をした上で、宮城野部屋に入門していたのである。]このように退路を断った白鵬は、当面の目標を次々に立て(ある程度の成績を残してモンゴルに帰ること、十両になること、幕内力士になること・・・等)、クリヤーしていった。「当面の目標」は“夢”とは異なるが、目標を次々に叶えつつ、未来に向けて大きな“夢”を持っているのが白鵬であろう。白鵬と話をしていくと、折々に2020年の東京オリンピックへ寄せる自分なりの活躍の場を見出すこと、引退後大相撲界への恩返しとともに何らかの社会貢献をしたいことなどが断片的に吐露される。白鵬にとって“夢”とは、そこに至るまでに精一杯の努力を積み重ねていくうえで持

ち得るものなのである。

学生たちへの「将来の“夢”を持っていますか」という問いかけには、当面のことに最善を尽くすという前提が含まれており、ただ漠然と“夢”を持つということではない。白鵬の話の前後の脈略を推し量ると、賢明な学生はこのことに気がつく。年齢から見れば白鵬は学生たちの兄貴分である。それだけに目の前の白鵬は偉大な存在ではあるが、親しげで穏やかな口吻に学生は親しみを感じており、その教育的効果は非常に大きいと言わなければならない。

白鵬は 2011 年から毎年北海道滝川市でお米を生産しているが、自ら田植えをし、収穫もしている。品種は「ななつぼし」で、「白鵬米」と名付けて販売もしている。また、寒冷的な母国モンゴルでも稲作プロジェクトに着手している。

先述したように白鵬は 2012 年 10 月にモンゴル原産のシーベリーを北短農場に植樹し、現在生育中である。また、2013 年 10 月には北短農場でかぼちゃの定植栽培をするなど、白鵬は北短が展開する農業教育に並々ならぬ関心を抱いている。このような滝川市や北短における白鵬の農業体験は、白鵬が北短の教育方針である「新しい時代の農業及び地域経済を創造・発展させる人材の育成」を見守り、その成果を奨励し得る立場にあることを示している。

前節(第 4 節)では、白鵬の横綱 2 場所目(2007 年 9 月場所)までを記述した。それ以降の横綱としての白鵬の務めを辿ってみると、さまざまな事態が起きている。2007 年 9 月場所から 2010 年 1 月場所までは、まさに日の出の勢いを示す土俵ぶりで、14 場所中 9 場所優勝している。2010 年 3 月場所から 2012 年 9 月場所までの 15 場所は、たった 1 人で横綱という最高位の責任を背負った。1 人横綱としての重圧に加え、数多くの行事に大相撲の看板として参加しつつも、15 場所中 10 場所で優勝している。八百長問題で 2011 年 3 月場所は中止となり、次の 5 月場所は技量審査場所として開催されたが、興業色を一切排除して、外部表彰の辞退、客席の無料開放、NHK の放送中止という異例の場所となった。

大相撲界が八百長問題で大揺れの最中、2011 年 3 月 11 日に白鵬は 26 歳の誕生日を迎えた。まさにその日の午後 2 時 46 分東日本大震災が発生した。震災直後から白鵬は被災地を支援したいと考え、相撲協会とも相談のうえ、同年 4 月にトラックで被災地を訪れ、多くの物資を届けている。その後何度も被災地を訪れ被災者を勇気づけ、募金活動などにも力を入れている。白鵬は、他の力士とともに被災地を慰問に回るなかで、[私たちは、被災地の皆さんを励ましたいという一心から慰問を始めた。だが逆だった。行く先で、「ありがと

う」という言葉とともに、「がんばって」「いい相撲を見せて」と声をかけられた。パワーをもらったのは、私たちのほうだったかもしれない。そして私は、自分にできることはなにかを考えた末、「みんなが苦勞している中、自分も苦勞しなければダメだ。自分にできることは、精いっぱい相撲を取るのだ」と心に決めた」と述懐している。

2012年9月場所後に日馬富士が横綱に昇進したことによって次の11月場所からは1人横綱ではなくなったが、白鵬はその後にも優勝回数を重ね、2013年には年6場所中4場所、2014年には5場所優勝している。2014年11月場所では史上1位の大鵬に並ぶ32回目の優勝を果たした。翌2015年初場所(1月)には、全勝優勝の成績で遂に単独史上1位という大記録を打ち立てた。この優勝回数はさらに伸びており、2015年末現在で35回の優勝を果たしている。

このように華々しい成績を残している白鵬であるが、2015年は白鵬にとって試練の年でもあった。前述のように白鵬は同年1月場所において前人未到の35回目の優勝を、しかも全勝優勝で遂げているのであるが、千秋楽の翌日の記者会見で13日目の大関稀勢の里戦に触れて、土俵審判を批判した。記者会見には前夜の深酒で1時間も遅刻したことや、審判批判の発言の中で人種差別をほのめかす発言をしたこともあって、当事者の審判委員からの反論をはじめ、北の湖理事長や横綱審議委員長からも厳しい批判を受けた。これを契機に、審判批判問題に限らず白鵬批判やスキャンダラスな憶測記事がメディアに溢れるようになった。優勝回数新記録のお祝いムードが一転して白鵬自身の品格問題に転じてしまったのである。さらに追い打ちをかけるように、2015年7月場所において白鵬が14勝1敗で35回目の優勝を飾った次の9月場所に初日と2日目に連敗した後精密検査を受け、「左大腿四頭筋腱炎」のために3日目から休場を余儀なくされた。白鵬の休場は、実に2006年11月場所以来で、2007年7月場所の横綱昇進以降は初めてのことである。なお、休場は1場所中途からに留まり、翌11月場所には早くも土俵に復帰し、優勝こそしなかったものの、12勝3敗の成績を残している。

この2015年における一連の出来事から、各種の報道で描かれているように白鵬の人格が変わってしまったのか、また、2015年11月場所の3連敗中に見せた土俵際の粘りの無さや“猫だまし”という奇手を格下の力士に連発したことで白鵬は弱くなったのか、という疑問が呈せられている。前者の人格問題に関しては、本来多面的な人間の性格を否定的な覗き口から見るとそれなりの見方ができるだろうが、白鵬の性格の芯は変わっていないと見ている。われわれ本論文の執筆に当たっている者たちへの応接態度は初対面のときと

何ら変わらず、温和で謙虚かつ真面目である。むしろ、いかに人気商売とはいえ、数々の人間性を貶めるような憶測記事に耐えている白鵬の我慢強さを評価したい。後者の白鵬の強さに対する疑問に関しては、彼自身が自覚しているように身体的な強靱さのピークは過ぎたかもしれないが、技能的な蓄積を考慮した総合的な強さは継続していると思われる。2015年11月場所で見せた土俵際での粘りの無さは、病み上がりの体調と稽古不足からきているのではないか。

試練の年となった2015年を挟みつつも、圧倒的な強さを示しながら大相撲史上で前人未到の記録を塗り替えていく白鵬であるが、それを支える心技体の基となっている肉体的な強靱さや技を磨きあげている稽古に加えて、心を大きくしている数々の意識や精神がある。

白鵬は大相撲が古来から続いている日本の伝統・文化であり、神事であることを十分認識している。「力士が四股を踏むことで邪気が払われ、土俵入りすることで大地の荒ぶる神を抑えられるのではないかと述懐し、「自己が神、仏、霊気など目に見えないものを含めた大きな世界で生かされていることを知り、畏怖の念を抱くことも、自分の心を整えるうえで大切なことだ」と感じている。そのうえで、「生きていることに感謝し、助け合う気持ちを持って生きていきたい」と強く思っている。白鵬のこのような心情は、上述の被災地慰問にも良く表れているが、その他の福祉活動や社会活動を展開している根源ともなっている。国際的な子供相撲大会「白鵬杯」の開催、白鵬米を通ずるモンゴルへの稲作技術支援や収穫米を貧しいモンゴルの子供たちへ寄贈していることなどが、その具体例である。

ここまでの考察から、現役の横綱として大相撲の最高峰にいる白鵬は、学校法人拓殖大学が掲げている建学の精神「積極進取の気概とあらゆる民族から敬慕されるに値する教養と品格を備えた有為な人材の育成」に見合う存在として位置づけられるであろう。また、白鵬の今日に至るまでの歩みは、拓殖大学の各設置校が有している教育方針と相通ずる面が多々ある。あるきっかけから始まった第69代横綱白鵬との縁を大切にして、学校法人拓殖大学は白鵬の歩みを見守りつつ、引き続き有為な人材を世に送り出していきたい。

注記

- 1) 相撲と神事の関係については、新田一郎『相撲の歴史』山川出版社、1994年に詳しい。
- 2) 上掲書、30頁
- 3) 武者成一『史談 土俵のうちそと』雲母書房、2002年、22頁。大正2年12月、板垣退助の紹介によってオーストリアの青年が友綱部屋に入門したが、修行に耐えられず本場所に上がることなく廃業した。
- 4) 現在、日本相撲協会は「帰化者を含む外国出身力士を1部屋1人まで」に制限している(2010年2月理事会決定)。

- 5) 熊ヶ谷誠志『白鵬「山」を越える男』2010年、主婦と生活社、16頁、28頁、31頁
- 6) 上掲書、29頁-31頁
- 7) 白鵬という四股名は初土俵を前にして熊ヶ谷親方(現宮城野親方)がマネージャーと相談して命名している(上掲書、32-34頁)。
- 8) 上掲書、60-63頁
- 9) 上掲書、63頁、225頁
- 10) 上掲書、71頁
- 11) 内藤堅志『白鵬のメンタル』講談社、2013年
- 12) 上掲書、49頁。本文で挙げている2点以外の2点は、「つながりを大事にすること(感謝の気持ち)」及び「日常生活を大事にすること(稽古がすべてではない)」である。
- 13) 熊ヶ谷誠志『白鵬「山」を越える男』2010年、主婦と生活社、49頁、69頁
- 14) 2003年10月から2007年9月までの白鵬の各場所における成績と身長・体重の推移は、上掲書巻末(224頁、225頁)の「白鵬年表」による。
- 15) 睡眠時無呼吸症候群に関わる話は、上掲書94頁から98頁で詳しく説明している。
- 16) 上掲書、110頁
- 17) 小松成美『横綱白鵬、試練の山を越えてはるかなる頂へ』学研教育出版、2013年、163-165頁
- 18) 内藤堅志『白鵬のメンタル』講談社、2013年、147-149頁
- 19) 白鵬は横綱になってから2015年7月場所至るまで48場所の間、まったく休場していなかった。この間、2010年春場所(3月)から2012年秋場所(9月)までの15場所、一人横綱であった。
- 20) 熊ヶ谷誠志『白鵬「山」を越える男』2010年、主婦と生活社、71頁、72頁
- 21) 白鵬翔『勝ち抜く力』悟空出版、2015年
- 22) 上掲書、241頁

(参考文献)

- ・阿栄娜・林良子「シャドーイング練習による日本語発音の変化：モンゴル語・中国語母音語話者を対象に」『電子情報通信学会技術研究報告(SP、音声)』109(451)、2010年
- ・石井智美「モンゴル遊牧民の食生活と伝統的なたべもの」『砂漠研究』Vol.15、No.1、2005年
- ・石井智美「モンゴル国の伝統的な発酵乳製品に関する微生物学的検討」『Milk Science』Vol.50、No.1、2001年
- ・石井智美「モンゴル遊牧民の製造する乳製品の性質と呼称に関する研究－先行研究と比較して」『J. Rakuno Gakuen Univ.』Vol.31、No2、2006年
- ・石井智美・鮫島邦彦「家畜に依存するモンゴル遊牧民の食事の雪害による変化」『日本栄養・食糧学会誌』第57巻、第4号、2004年
- ・石王敦子「外国語学習に影響する要因」『追手門学院大学地域支援心理研究センター紀要』2005年
- ・稲盛和夫・白鵬翔「心を高め、運命を伸ばす」『致知』致知出版、2012年
- ・入江実・葛谷健「力士および肥満者の糖代謝」『糖尿病』12巻5号、1969年
- ・植田史生・福本修二・吉田泰将・石手靖・望月康司・大嶽真人「剣道における心理的競技能力調査について」『慶応義塾大学体育研究所紀要』44巻、2005年
- ・内田照久・中畝菜穂子「声の高さと発話速度が和書の性格印象に与える影響」『The Japanese Journal of Psychology』vol75 No.5、2004年
- ・内田照久「音声の発話速度と休止時間が話者の性格印象と自然なわかりやすさに与える印象」『教育心理学研究』53、2005年
- ・内田照久「未知のイントネーションから想起される話者の性格印象と方言地域の特徴」『音声研究』第10巻3号、2006年
- ・内田照久「音声の韻律的特徴と話者のパーソナリティ印象の関連性」『音声研究』第13巻1号、2009年
- ・ウランバヤム、ツェツェグドラム「モンゴルにおける日本語教育：高等教育における漢字教育に着目して」『言語文化と日本語教育』Vol.41、お茶の水女子大学日本語文化学会、2011年
- ・江橋博他「新弟子相撲力士の形態的特徴と基礎体力」『生理人類学研究会』第14回大会抄録、1985年
- ・大谷元「チーズの起源と歴史」『New food Industry』Vol.49、No.10、2007年
- ・大森暢久・長田宗徳・浅見正彦・伊藤国子「スポーツ(相撲)による体型変化について」『民族衛生』26巻4号、1960年
- ・小川新吉・古田善伯・山本恵三・永井信雄・中嶋英昭「相撲力士の体力科学的研究(新弟子の体格・体力に関する研究)」『体力科学』21巻、1972年
- ・小川新吉・古田善伯・山本恵三・永井信雄「相撲力士の体力科学的研究(その2)(関取の体力と発達)」『体力科学』22巻、1973年
- ・小澤修・高井信治・花井淑晃・徳田治彦「骨代謝における亜鉛の役割の解析」『ソルト・サイエンス学術財団平成17年度助成研究報告集Ⅱ』2007年
- ・風戸真理「草原と都市を往還するノマド：20世紀モンゴルにおける居住地と職業選択」楊海英編『中央ユーラシアにおける牧畜文明の変遷と社会主義』アフロ・ユーラシア内陸乾燥地文明研究叢書Vol.8、

2014年

- ・上井一男・志場正光・林光「力士年寄の糖尿病」『糖尿病』12巻5号、1969年
- ・ガンバト・ジャミアン「モンゴルにおける地域格差に関する一考察」『比較経済体制学会年報41』2004年
- ・熊ヶ谷誠志『白鵬「山」を越える男』主婦と生活社、2010年
- ・桑森真介「相撲競技者の競技力と形態および筋機能」『明治大学教養論集』通巻273号、1995年
- ・桑森真介・佐藤隆「学生相撲選手の体力科学的研究－主に全身持久性について－」『武道学研究』2巻、1989年
- ・香原志勢「相撲力士の人類学」『遺伝』19巻、11号、1966年
- ・コールズ(常田景子訳)『モラル・インテリジェンス』朝日新聞社、1998年
- ・小長谷有紀『世界の食文化3 モンゴル』農山漁村文化協会、2005年
- ・小長谷有紀『モンゴルにおける農業開発史』国立民族博物館研究報告、Vol.35、No.1、2010年
- ・小長谷有紀『食農教育』農山漁村文化協会、2008年
- ・小長谷有紀「モンゴルの馬乳酒治療」石毛直道編著『モンゴルの白いご馳走』チクマ秀版社、1997年
- ・小林幸江「モンゴル人に対する日本語教育の研究」『日本語学校論集』8号、東京外国語大学外国語学部附属日本語学校、1981年
- ・小松成美『横綱白鵬 試練の山を超えてはるかなる頂へ』学研教育出版、2013年
- ・近藤眞理子「日本語学習者の音声習得における第一言語特有の干渉と普遍言語的干渉：日本語教師へのアンケート調査から」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第3分冊57、2011年
- ・杉山邦博・宮田修『土俵のチンギス・ハーン 白鵬』新風舎、2007年
- ・鈴木文子「Sheldonの三角図形法による体型及び体格の判定に関する研究 第2編各種スポーツマンの体型と体格」『体力科学』7巻1号、1957年
- ・須田昭義「相撲力士の体格」『人類学輯報』18巻、1957年
- ・須田昭義「相撲新弟子の将来性について」『人類学雑誌』66巻、1958年
- ・駿河輝和・アマルジャルガル ダイリー『モンゴルにおける教育と労働市場』国際協力論集第16巻第3号、2009年
- ・蘇迪亜「モンゴル語母語話者の日本語母音の音声的特徴について」『ことばの科学』23号、名古屋大学言語文化研究会、2010年
- ・蘇迪亜「日本語学習者における日本語母音無声化について：中国語話者とモンゴル語話者を対象に」『ことばの科学』v.25、2012年
- ・ダンザンニヤム ブレンチメグ・馬場久志「モンゴルにおける日本語学習者の現状と課題」『埼玉大学紀要 教養学部』58、2009年
- ・田中喜代次・加藤弘・菊池和夫・長友睦美・中嶋英昭・柴山秀太郎・江橋博・西島洋子・松沢真知子・小川新吉「新弟子相撲力士の形態及び身体形成」『体力科学』28巻、1979年
- ・張文麗「学習者はドラマ視聴で何に気づいているか：プロトコル分析を通して」『日本語教育方法研究会誌』17(1)、2010年
- ・寺内弘子「歌を教材とした日本語教育と異文化コミュニケーション」『法政大学教養部紀要』95号、1996年

- ・トウシンバット ダワースレン・新沼勝利「市場経済移行に伴うモンゴル農業経営の変化－都市近郊における酪農経営を事例として」『農村研究』第106号、2008年
- ・徳永幹雄「スポーツ選手に対する心理的競技能力の評価尺度の開発とシステム化」『健康科学』23巻、2001年
- ・徳永幹雄・金崎良三・多々納秀雄・橋本公雄・高柳茂美「スポーツ選手に対する心理的競技能力診断検査の開発」『デサントスポーツ科学』12巻、1991年
- ・徳永幹雄・橋本公雄「スポーツ選手の心理的競技能力のトレーニングに関する研究(4)－診断テストの作成－」『健康科学』10巻、1988年
- ・徳永幹雄・細川伸二・西田孝宏・高橋幸治・小野沢弘史・村松成司「全日本柔道選手の心理的競技能力に関する研究」『柔道科学研究』3巻、1995年
- ・内藤堅志『白鷗のメンタル 人生が10倍大きくなる「流れ」の構造』講談社、2013年
- ・中江利孝・片岡啓・宮本拓「モンゴルの乳及び乳製品の科学的性状について」『岡山大農学報』Vol.48、1976年
- ・中嶋英昭他「新弟子相撲力士の体力特性」『体力科学』28巻、1979年
- ・仁木豊「力士の糖代謝」『糖尿病』12巻、5号、1969年
- ・新田一郎『相撲の歴史』山川出版社、1994年
- ・野々宮広章他「大相撲のメディカルチェック」『体力科学』40巻、1991年
- ・バーサンジャブ バトゲレル「モンゴルの教育における伝統的価値観とソビエト社会主義価値観の葛藤」『佛教大学教育学部学会紀要第12号』2013年
- ・ハーロウ(浜田寿美男訳)『愛のなりたち』ミネルヴァ書房、1988年
- ・ハワード・ガードナー(松村暢隆訳)『MI：個性を生かす多重知能の理論』新潮社、2001年
- ・萩原正大・米倉礼子・藤原昌・千足耕一「セーリング競技における国内一流選手およびユース選手の心理的競技能力」『スポーツパフォーマンス研究』6巻、2014年
- ・白鷗翔『相撲よ!』角川書店、2010年
- ・白鷗翔『勝ち抜く力』悟空出版、2015年
- ・バトモンク・ウメルジアン ウスマン、中平勝子、三上喜貴「伝統的モンゴル語テキストの音節分割アルゴリズム規則の設計」『情報科学技術フォーラム講演論文集』10(2)、2011年
- ・福盛貴弘「ニュース番組におけるアナウンサー・キャスターの発話速度－2006年5月3日のニュース番組を資料として」『大東文化大外国語学部創設三十五周年記念論文集』2008年
- ・古田則夫「清音と濁音の区別－日本人・中国人の場合－」『講座 日本語と日本語教育3 日本語の音声・音韻(下)』明治書院、1990年
- ・前川喜久雄「母音の無声化」『講座 日本語と日本語教育2』明治書院、1989年
- ・松村美智子「モンゴルにおける幼児教育の現状と課題－JICA 海外シニアボランティアとしての活動から－」お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター国際教育協力セミナー講演記録、2004年
- ・丸島歩「音声言語のテンポに関する一考察－時間構造とピッチ構造に着目して－」『言語学論叢』28号(オンライン版第2号)、2009年

- ・御手洗昭治『異文化にみる非言語コミュニケーション』ゆまに書房、2000年
- ・宮崎里司『外国人力士はなぜ日本語がうまいのか』明治書院、2001年
- ・三輪徳寛「力士測定の成績」『人類学雑誌』4巻、35号、1989年
- ・武者成一『史談 土俵のうちそと』雲母書房、2002年
- ・吉田章信「力士の身体測定成績(第一報)」『体育研究』5巻、1937年
- ・Lois Holzman, *Vygotsky at work and play*: Routledge. New York, 2008
- ・Vygotsky, L. S, *Mind in Society*: Harvard University Press, 1978
- ・スポーツニッポン新聞、2013年5月27日
- ・日本経済新聞、2015年1月11日
- ・「横綱白鵬～“最強”への挑戦～」NHKスペシャル、2010年11月28日放送
- ・「白鵬と大鵬 最後の会話」TBSテレビ、2013年2月24日放送
- ・Louis E. Keefer “The Army Specialized Training Program in World War II” 2014年9月30日閲覧
- ・praat(linux版)=開発者: Paul Boersma and David Weenink (Phonetic Sciences, University of Amsterdam)
- ・日本語文章難易度判別システム alpha版「読解教育支援を目的とする文章難易度判別システムの開発」
(代表者: 李在鎬)

研究チーム構成員略歴

- 篠塚 徹 武蔵大学経済学部卒、海外経済協力基金理事、国際協力銀行理事、拓殖大学国際学部長、同副学長、現拓殖大学北海道短期大学学長
- 大道雅之 高知大学農学部卒、青年海外協力隊員(ホンジュラス)、JICA 専門家(エルサルバドル)、現拓殖大学北海道短期大学農学ビジネス学科教授
- 岡崎正昭 弘前大学大学院農学研究科修了(農学修士)、北海道美幌農業高校校長、同岩見沢農業高校校長、現拓殖大学北海道短期大学農学ビジネス学科教授(学科長)
- 近藤真宣 慶応義塾大学大学院文学研究科修了(文学修士)、交流協会(台湾)高雄事務所、拓殖大学外国語学部専任講師、現同国際学部教授
- 土門裕之 北海道教育大学特設音楽科卒、ダルクローズ音楽院卒、ジュリアード音楽院で作曲履修、現拓殖大学北海道短期大学保育学科教授、同現副学長
- 西口茂樹 日本体育大学大学院修了(修士)、拓殖大学学生主事、現同体育振興部長、現同国際学部教授、現リオデジャネイロオリンピック・レスリング(グレコローマン)強化委員長

執筆担当

- 篠塚 徹 第1章 序論、第4章 第5節、補論
- 大道雅之、岡崎正昭 第2章 第1節、第3章 第1節、第4章 第1節
- 近藤真宣 第2章 第3節、第3章 第3節、第4章 第3節
- 土門裕之 第2章 第2節、第3章 第2節、第4章 第2節
- 西口茂樹 第2章 第4節、第3章 第4節、第4章 第4節

第 69 代横綱白鵬関研究

平成 28 年 7 月 26 日 印刷

平成 28 年 7 月 26 日 発行

発行人 篠塚 徹

印刷 松本印刷株式会社

発行所 拓殖大学

東京都文京区小日向三丁目 4 番 14 号

郵便番号 112-8585

電話 03(3947)7160